
初恋をあきらめて

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋をあきらめて

【Zコード】

Z57280

【作者名】

さくら

【あらすじ】

公爵令嬢ナターリアには好きな人がいました。けれど、傾きかけた家のために後宮に入ることになりました。

年下の国王陛下との間に王子も誕生しますが…。

やがて権力争いにまきこまれて、危険な目に遭います。争いなどが苦手な方は「注意下さい」。

田へ行へ田（前書き）

はじめまして。
読む専門でしたが、私の頭の中で妄想が広がってしまい、物語にしました。よろしければお付き合ごと下さいませ。

私には好きな人がいます。

けれど、私にはそれを伝えることが出来ない。

だって、私は家のために今日別の人のもとに行くのだから…

「お嬢さま、王宮からお迎えの使者が参りました」

「こま、参ります」

私は公爵令嬢ナターリア、18歳。幼なじみの3歳上のカールに恋をしていました。

男爵家の跡取りで私とは少し身分違いだけど叶わない恋ではないはずでした。

母にはひそかに伝えて、いざれは結婚できるのではと思つていました。

けれど、父が病気になり、まだ幼い弟たちではロプーヒナ公爵家は支えられません。

傾きかけたわが家を助けるには、私が後宮に入り国王陛下の側室となるだけ。忘れなければ…。

「ナターリア、いらっしゃいおいでなさい」

「お母さま、何ですの?」

「『めんなさいね。あなたに重荷を負わせてしまつて…。』
私に何の力もないばかりに。」

母は公爵夫人とはいっても商人の娘で、遠縁にあたる男爵家の養女となつて公爵家に嫁いだので、後ろ盾がありません。父とは貴族にしては珍しい恋愛結婚です。

「お気になさらないで下さいます。それより、お父さまや弟たちのことよろしくお願ひします。」

「ありがとうございます。出来るだけのことはしますから、安心して頂戴。それよりこれをあなたに渡したいと思って…」

渡されたのは、カールさまからの手紙でした。

『お久しぶりです、ナターリアさま。後宮に入られると伺いました。幼い頃、仲良く遊んだことが、昨日のことのようです。どうぞお幸せに』

田へ行へ田へ西へ（後書き）

いかがでしたでしょうか。
ハッピーホンデこしたいなとは思つてますが、もしかしたら違う結果
になるかな。.

王宮に入つて（前書き）

続いて王宮に入つたところです。

王宮に入つて

「奥さま、お嬢さま……。」

「あら、アリス。どうしたの？」

「じつじたのじゃ」わこませよ。お嬢さま下わこまわ。お選の方々
がわせせどよりお待のうじわこませよー。」

この間ねこアリスは私付きの侍女。

「い」みんなさい、アリス。すぐ行くわ。お母さま、やれでは行つて
まいります」

「行つてらつしゃい。アリス、ナターリアをお願いね。」

「お任せ下さい、奥さま。わ、お嬢さま参りましょ」

そのこの王宮では、謁見の間でウロウロと歩く国王陛下の姿があり
ました。

それを見咎めた女官長が、
「陛下、何をそわそわしておられますのか？」

「いや、何か落ち着かなくて…。女官長、あの、まだか…?
ボソボソと国王陛下アレクセイが答えます。

この国では、国王陛下または王太子殿下は16歳になつたら、妃を

迎えるのがしきたりでした。

後宮に何人か妃を迎える、その中から正式な妃・王妃、または王太子妃が選ばれます。

国王陛下アレクセイは若くして即位したのでまだ妃はいませんでした。そのため、王妃の役割は母の王太后が担つてきました。このたび16歳になつたのでようやく妃を迎えることになりました。

「何をどういいますか？ああ、後宮に入られる令嬢でしたらまもなくお着きになりますよ。しっかりして下をこなせ。いくら初恋の女性が参られるとほいえ……」

近くに控えているのは女官長。国王陛下の乳母でもあります。そのとき、護衛の一人が来客を告げました。

「申し上げます。今日より後宮に入られるご令嬢方が参られました」

「わへ、陛下。お早く玉座へお座り下さこませ」
きびきびと女官長がアレクセイに言います。

「分かつてある。余はもう子供ではないぞ、マーヤ。もうすぐ逢えるのだな……」

あわてて国王陛下が玉座に座り、護衛に命令しました。

「通すがよい。」

「はつ、了解しました」

護衛に伝えた後、謁見の間に妃に選ばれた三人の令嬢方が入つきました。

「ペトロヴィチ公爵の娘・シャルロッテ、16歳でござります。よろしくお願ひします」

大臣の娘で王太后のお氣に入りで王妃に一番近い存在です。

「ロブーヒナ公爵の娘・ナターリア、18歳でござります。よろしくお願ひします」

「ハリス伯爵の娘・オリガ、20歳でござります。よろしくお願ひします」

伯爵の娘とはいえ、母は先々代の国王の王女で国王の叔母にあたります。

王宮に入つて（後書き）

いよいよ後宮が始まります。ドキドキ…

壁紙の塗装（塗装）

つこながつた。

玉座に悠然と座る国王陛下からお声をかけられました。

「ようこそ王宮に参られた。これからのこととは女官長に聞くがよい。疲れたであろうから、今日はゆっくりと過ごされよ。」

16歳になられたばかりなのに幼さの残る中にもなかなかの男前で威儀のある若き国王陛下でした。

国王陛下との「」挨拶を終えて、三人の「」令嬢方はすぐに後宮に入られることになりました。

それぞれ与えられた部屋に落ち着きました。明日は王太后さまとのお茶会に予定されています。

「ナターリアさま、疲れましたね。でも、私もついに憧れの後宮で働けるんですね。」

「マリア、楽しそうね。」

少し疲れた表情でお茶を飲みながら侍女のマリアと会話しています。

「何をおっしゃっているんですかー。後宮で侍女として働くなんてマリアにとっては夢のようですね。ここで働いたって、縁談の数も違いますのよ。」
かなり興奮してマリアは話します。

「つねにい侍女だと思つてたのにこんな一面があつたとは…

「マリア、疲れたからもつ寝ましょうか？」

少し微笑んでナターリアはマリアに言いました。

「はい、ナターリアさま。明日の予定もありますし、お休みなさいませ」

翌日、慣例により王太后さまのもとでお茶会が開かれました。招待されたのは、後宮に入ったシャルロッテとナターリアとオリガの3人です。

「よう参られた。」の後宮にこんなに美しい令嬢方をお迎え出来て嬉しく思います。」

王太后さまが笑顔で迎えて下さいました。

「」招待ありがとうございます、王太后さま。」
三人が口々に答えます。

「おお、シャルロッテどの、すっかりお美しくなられて見違えましたわ。」

「恐れいります、王太后さま。父からも王太后さまにくれぐれもよろしくお伝え下さいと申しておりました。」

前国王陛下が早くに亡くなつたとき、シャルロッテの父の大臣が後ろ盾になつて国王陛下を支えたことを恩義に王太后さまは感じておりました。

「……やはりよくじく伝えて下され。私がおりますれば、今後のことはじめ心配なきよつこと」

「ありがとうございます、王太后さま。そのお言葉、父も喜びます。

」

王太后に答えたあと、シャルロッテは勝ち誇ったような笑顔をナターリアとオリガに向けます。

それは一番年下でありながら王妃になるのは私だと言わんばかりでした。

「ああ、お茶会を始めましょう。側妃の方々、いらっしゃへおこでなさい」

後宮に入られる方には位がありました。

一番上はもちろん王妃ですが、次は側妃で他国の王女や公爵・侯爵・伯爵出身またはの位です。次は夫人でそれ以下出身の位です。三人とも側妃に選ばれました。

王妃に選ばれるためには側妃にならなくてはなりませんが、三人とも王妃候補としての条件を満たしています。

しかし、ナターリアだけはそういう目で見られているとは露とも思つていませんでした。

壁との接觸（後書き）

後富士山の展開が始まり、ワクワクします。

王太后のお茶会（前書き）

お茶会の始まりです

王太后のお茶会

お茶会が始まり、美味しい紅茶とアップルパイが出されました。

「ナターリアどの、公爵どののお加減はいかがですか？」

王太后が心配そうに話しかけます。

「お気遣い恐れ入ります。母がついておりますので、なんとか過ごしております。」

ナターリアが控えめに答えます。

それを聞いた王太后がピクッと眉をひそめて話しかけます。

「そうですか。心配していましたのよ。」
「病気の父君がいるナターリアどのをお迎えすることになつて申し訳なく思つておりましたが
…。」

「とんでもございません。どうぞお気になさいませんよ！」

ナターリアが控えめに答えます。

「気にする」とはなかつたようですね。」

急に機嫌の悪い様子で王太后が答えました。

実は若い頃のナターリアの父の公爵はハンサムで令嬢方の憧れの的でした。まだ独身だった王太后も憧れていきました。

それが公爵家の侍女だったナターリアの母に奪われてしまいました。それがしゃくに触つてているのでした。

ナターリアは何か悪いことを言つたつもりはないのですが、王太后が機嫌を損ねた気がしてどうしてよいかわからず…

「あの、王太后さま、何か失礼な」とを申しましたでしょ「つか…」
申し訳なさそうにナターリアが話しかけます。

「いいえ。どうぞナターリアどの、公爵のお見舞いに伺いたい折には遠慮なく申して下さいませね。」
ハツとして笑顔を取り繕つて答えます。

「ありがとうございます。」

ナターリアはそれを聞いて、安心しました。

王太后は氣をとり直し、オリガに話しかけます。

もちろん、オリガの母の王女に敬意を払つてのことです。亡き夫の妹にあたる人ですから。

「オリガどの、久しぶりですね。お母さまはお健やかにお過ごしでしょうか?」

「ありがとうございます。おかげで元気に過ごしております。
さすがに一番年上ですので落ち着きもあり、ゆつたりと笑顔で答えます。

「それは何よりですね。お母さまとは、私が後宮に入つたころ仲良くなっていたときましたのよ。よろしくお伝えくださいませね。」

「ありがとうございます。母に伝えておきます。ふつつかでござりますが、これからよろしくお願ひします。」

「まあ、ふつつかなんてとんでもない。あなたのよつな優雅でお血筋のよろしこお方を後宮にお迎え出来て陛下もお幸せですわ。」

機嫌良く王太后さまは話されます。

それを聞いたシャルロッテは私のことを忘れるなど言わんばかりに

「本当に優雅でいらっしゃってお羨ましい「う」やこますわ。まだ私は16歳なものですから、いつかそなれるといいのですけれど…。」

「まあ、何を言われます？シャルロッテどのは、愛らしくて そのままで十分陛下にふさわしいお方ですよ。」
王太后はいけないと笑顔で答えます。

ナターリアは後宮に入ると思つてもいなかつたのですから、どうしていいかわからずポツンとしながら、受け答えをします。こうしてお茶会は一見、和やかに過ぎていきました。

王太后のお茶会（後書き）

嬉しさのあまり調子に乗つて書いてしまいました。
信じられないことで私の妄想のお話しにお気に入り登録して下さった方、ありがとうございます。

陛下と王太子の思い

「陛下、王宮の執務室では若き陛下が執務に励んでおりました。

「陛下、そろそろ休憩をとられてはいかがですか？」

女官長がお茶を持って入つてきました。

「どうか、ではそろそろ休憩にするか。では、そちも下がつて休憩するがよい。」

陛下は近くに控えていた書記面に命令しました。

「はつ、了解しました。では失礼致します。」

書記面が下がると、陛下がお茶を用意していた女官長に向かつて話しかけました。

「女官長みずからお茶を持つてくるとは、何か話しがあつたのであります。」

「アレクセイさまには隠せませんね。実は添い臥しの儀のことです」

「あこます。」

添い臥しの儀は16歳になつた国王及び王太子が初めて女性とともに夜を過ごす儀式のことです。

一緒に夜を過ごした女性は王妃になることが多いと言われています。いわば、国王の初夜です。

陛下はドキッとして、女官長から視線を逸らし、お茶を飲みはじめました。

女官長は構わずに話を続けました。

「後宮に側妃方も入られたことですし、儀式の準備をしなくてはなりません。

陛下には、どのお方とを思ひ召しどりぞりますか？」

陛下は、

「こや、それはあのお方に……」

と口ごもつて答えました。

「もしや、初恋のお方を選ばれますのか？それは、王妃にとお考えになつたつえでのことでござりますか…」

女官長が心配そうに尋ねます。

「やうしたいと思つてゐるのだが、マーヤは反対か…？」

俯いて、悲しそうに

女官長が言います。

「いゝえ、陛下、反対など…。どの側妃を選ばれましても王妃にふさわしいお家柄の方でござりますが。ただ、王太后さまの意向を考えますと難しいかと存じますが。」

「母君は大臣の、何と申したか、あの令嬢を望んでおられるのはわかつてはいるが…。余はの人を王妃にしたいのだ。」

陛下ははつと女官長に言いました。

「アレクセイさま、かしこまつました。では、そのよつて手配致しましよう。ですが、王太后さまのござ意向に逆らつてになることをお忘れなきように」

ため息をつきながら女官長は陛下に言いました。

「おつがとつ、マーヤ。よろしく頼むぞ。」

その後、そのことを聞きつけた王太后さまが女官長を呼びつけました。

「王太后さま、お呼びと伺いました。何用でございましょう?」

「すまぬな、わざわざ来てもらつて。忙しいそなたを呼んだを他でもない、添い臥しの儀のことじや。陛下にはかの初恋の君を選んだとの噂じやが、まことか?」

なぜか王太后のそばには大臣の息女の側妃・シャルロッテが控えておりました。

女官長はきたかと思いながら答えました。

「さぬうでござります。陛下の意向でござりますれば、ただいまそのように準備しております。」

王太后はピクッと眉が上がり、機嫌が悪そうに

「女官長、どうこうことかわかつておるのか?私がなぜこのシャルロッテどのを後宮にお迎えしたのかわかつていると思つていたが?」

「女官長に言います。

「まつ。ですが、これは陛下の命令でござります。逆らひことな
ど…」

「黙れ。そなたは私に逆らうと申すかー。もつよいわ。陛下には私が
ら申し上げる。下がれ！」

王太后はシャルロッテの手前といつこともあつたのか、女官長を怒
鳴りつけました。

それを聞いたシャルロッテはわざとらしく、おずおずと王太后に云
えます。

「あの、王太后さま、私のことでしたらお気遣いなく。女官長どもの
がお氣の毒にござります。」

「まあ、シャルロッテど。あなたが氣にされる事ではござこま
せんのよ。陛下のことは私にお任せ下さこな。よいですね？」

王太后はやれしべシャルロッテに話しかけます。

シャルロッテはそれを聞いて、

「はい。王太后さま。」

と言つてはにかんで笑いました。

女官長は内心、
猫かぶりがと、

思いながら

「では、私はこれにて失礼いたします。」

と王太后に伝え、立ち去ろうとしたら、王太后が呼び止めました。

「女官長、待ちなさい。陛下に母が話しがあるゆえ、これから参る
と伝えなさい。」

「かしこまりました。お伝えいたします。
と言つて女官長は下がつて行きました。」

添臥の儀

えーん、えーん…

「泣いているの…」

「泣いてなんかいな」ぞ。誰だー！母君に言われてきたのか…」

「違うわ。あら、ケガをしているわ。
だいじょうぶ？」

きれいな菜の花畠で出逢った少女が話しかけてきました。

「平氣だい。」のべら…」

泣きながらアレクセイが立ち上がります。

「そんな強がりが言えるなら、だいじょうぶね。でも、血が出てる
から」

そう言つとその少女はポケットからハンカチを出すると、擦りむいた
足をハンカチで結んでくれました。

「これでよしつと、あなたの名前は？私はナターリアつてこのの」

「アレクセイだ…」
しぶしぶ名乗ります。

「アレクセイ、ねえ、もしかして家の人に黙つて出てきたの？」

「悪いが…」

アレクセイはプイッ

と横を向いてしまいました。

「やつぱつ…。家人、心配してゐるんじゃないの」

「心配なんかしてなによ。つねにただだよ。」

「アレクセイ、何があつたのね…。

よかつたら私に話してみて!誰かに話すとスッキリするものよ、ね?」

少女は心配を隠しかけます。

「母瓶がこつむかひのとこだ、あれはダメ、これをしてはいけない、こつむかひのとこはまじりこづりみだりだよ…」

「それで逃げ出しあがつたのね。私もね、お父さまに小皿を皿を壊されて一方的で嫌になつたやつとやがあるわ。」

「やつこつむかひあるんだ?」

「それはね、お母さまがこつもおつしやるの。相手の立場になつて考えなきつて。心配をかけたり迷惑をかけたのはあなたなのだから、まずは謝りなさい。それから、あなたの話しこなさい。そういうつまづくつまづくがあるのよ、つてね。」

「それでつまづくのか?」

半信半疑にアレクセイが尋ねます。

「つまづかないこともあるが、でも私の話しても聞いてもらひるし、一方的に怒られるつまづくわ。わ」

「そっか、そういう方法もあるんだな…」

「よかつたら、試してみて。きっと上手くいくと嬉しいわ。」

少女は笑顔でアレクセイの手を握つてきました。

アレクセイはけょっと顔を赤くして、

「おこ、こきなり伺すんだよ。」

アレクセイはけょっと顔を赤くして、

「…下、陛下」

「ああ、女官長か。」

「どうなされました？何かお尋ね」とドモ…」
心配そうに女官長が話しかけます。

「いや、ちょっと、幼い頃のことを思に出でて…、それより何か用か？」

「はい、あの…、「命令のとおり、例の儀式は今夜、お相手はシャルロッテさまにて準備を進めております。」

「せうか、「苦労であつたな」

ため息をつきながら

、陛下は椅子に座ります。

「本当によろしかったのですか？」「王太后さまが強くお望みと
はいえ…」

「仕方ないであります。それだけが母君の願いであるのだから。それに、王妃に必ずしもなるとは限らぬしな……」

「陛下、やはり王妃をあの方にとお考えで……。確かに陛下の亡き父君さまの王妃は王太子さまでしたが、儀式は別の妃が勧められましたが。」

「ま、そういう可能性があるということだ。」

その夜、後宮にて儀式が無事行われました。

添臥の儀（後書き）

次から女の戦いを始める予定かも？

儀式の説明（前書き）

儀式の説明のお話です。

添臥の儀式の翌日、王太后のもとにシャルロッテが挨拶に訪れていました。

「王太后さまには」機嫌麗しくおめでとひ「ゼ」ます。昨日、無事に儀式を終えましたことを「ゼ」報告申し上げます。」

「「ゼ」げんよつ、側妃どの。無事の「ゼ」めつとめ、「ゼ」苦勞であります。」

「恐れ入ります。すべては王太后さまのお導きに「ゼ」ます。」

「セ、シャルロッテの、儀式はこれで終わりじゃ。」かくおいでなさい。」

王太后はわざわざ侍女にお茶を用意をわせました。

「ありがとうございます、王太后さま。」

シャルロッテは礼を言つて、用意された席につきました。

「今日はよい天氣じや。儀式が終わり、疲れはしませんか?」

王太后はシャルロッテにやわしく話しかけます。

「いいえ、疲れたなどとこつ」とは「ゼ」ません、王太后さま。大役を終えて、少しほんやりしておりますが。」

俯いてシャルロッテが答えます。

王太后はちょっと笑つて、

「それは疲れたといつゝことですよ。陛下はやせじへじて下をこまつたか？」

「はい。とてもおやせじの方で」「やれこまつた。

俯いたまま恥ずかしそうにシャルロッテが答えます。

「わづですか。陛下とよき夜を過いわれましたか？」

「はい…」

「それはなによりです。シャルロッテどの、もう側妃となられたゆえ申しますが、ここ後宮は公爵家とは違いますゆえ、しきたりも多く、勝手な振る舞いは許されませぬ。嫌なこともあらうが、陛下と仲睦まじく過いざれますよ」。

それを聞いたシャルロッテは少し驚いて、初めて顔を上げて、王太后に抗議しました。

「えつ、でも、王太后さまは我が家のつもりでおこでなさいとおっしゃつたではありませんか？」

「つもりだと申したでしよう。女は嫁いだ先が我が家になるのですからね。公爵夫人はもあなたに伝えなかつたのですか？」

「いえ、お母さまは何も…。」

「後宮に入る娘に何も云えぬとは…。まあ、これから私が教えましょ」。

シャルロッテは少し不満そく、「はい、よろしくお願ひします。」

王太后は少し微笑んで、

「心配することはない。何かあつたら私に申しなさい。私にでも
わざとほしましょ。いいですね？」

「はい。王太后さま、頼りにいたします。」

シャルロッテは少し安心したように言います。

「あなたには私がついてますからね。さあ、お茶がさめてしまつわ。
これは隣国から取り寄せた美味しいお茶なのよ。」
と言つてお茶を勧めます。

「美味しい…。とても馨しい香りがしますわ、王太后さま」

「喜んでもらつてうれしいわ。時々、お茶をいたしましょつね？」

「はい、楽しみにしております。」
シャルロッテはそつなく答えます。

その頃、ナターリアのもとに同じく側妃となつたオリガが訪れてい
ました。

「まあ、オリガさま。よつじをおいでくださいました。」
ナターリアは戸惑いながらオリガを迎えるました。

「連絡もなく来てしまつて申し訳ございません、ナターリアさま。」
申し訳なさそうにオリガが話しかけます。

「いいえ、そのようなことは……。でも、おひこちゃんにいただければ
お伺いしましたの。」

「わうわうしゃしゃねと黙つて参つましたのよ。」さすがにうわのこ
るじこ……

そう言つとホリガは侍女に持たせていた菓子折を手渡しました。

「まあ、恐れ入ります。アリス、すぐにお茶の用意を……」

儀式の翻訳（後書き）

「…からワクワクの展開が…。陛下もこないのに。」

オリガの訪れ

「ナターリアさま、突然訪れたのにこうして迎えて下さりてありがとうございます。」

オリガが遠慮がちにナターリアに話しかけます。

「いいえ、オリガさまをお迎え出来て嬉しく思います。」
戸惑いがちにナターリアが答えます。

「おやさしい方ね、ナターリアさまは。突然で申し訳なかつたのだけれど、ナターリアさまと仲良くしたいと思つて参りましたの。ご存知かしら、昨日の儀式の噂を?」

「噂でございますか? いいえ、私は何も存じませんわ…」
訝し気にナターリアが答えます。

「実は陛下は別の方をとお考へでしたのに、王太后さまに泣きつかれでシャルロッテさまになさつたという話しがですよ。」

「まあ、そのようなことが…。」
興味なきにナターリアが答えます。

「あまり興味がおありがならないのですね。私、もしやそのお方はナターリアさまではないかと思つておりましたのに…」

ナターリアはちょっと驚いて、

「まさか、そのようなことがあるはずがありませんわ。」

「あら、」病氣の父君のいらっしゃるナターリアさまを後宮に召し

出されたのですからそれなりの理由があると想いましたのに。私の
思い違いかしら？」

「私には分かりませんわ、オリガさま」
困ったようにナターリアが答えます。

「まあ、そのうち分かるでしょ、つけど。
ねえ、ナターリアさま、こういう時に時々はお茶でもいたしません？ き
つと私たち、よいお友達になれると想っていますのよ。」

「ええ、それは喜んで…」

戸惑つたようにナターリアが答えます。

「戸惑つていらっしゃいますね。率直に申しますと、王妃になられる
のはおそらく大臣の息女で王太后の後押しもあるシャルロッテさま
でしょ？ それに比べて私は王女を母に持つとはいえ伯爵令嬢、ナ
ターリアさまだって公爵令嬢とはいえ父君は「」病氣でいらっしゃつ
いますからお互い後宮においての立場は弱いですわ。だから、この
後宮で生きていくために仲良くなれません？ いがみ合うよりはそ
の方が多いと想っていますのよ。」

ナターリアは後宮に入ったものの、ここに生きていいくとをあまり
実感出来ていませんでした。

なので、オリガの言つことに感心して、

「オリガさまは、率直な方でいらっしゃるのですね。あの、後宮は
そうして生きていくもののですか…？」

オリガはそれを聞いてクスクスと笑い出し、

「ごめんなさい、笑つたりして…。ナターリアさまがあんまりのん
びり構えていらっしゃるものだから。そうですわよ。それから尊も

「気にしなくては、ナターリアさまが不利な立場になることだつてありますから。」

ナターリアはせらに感心して、

「そういうものなんですね。いろいろありがとうございます。私は、オリガさまが率直におっしゃつていただいたので申しますが、お父さまが病気になり、急に後宮に入ることになつてしまつて少し戸惑つております。」

オリガは紅茶を一口飲んで、ふうーとため息をついて、

「そのようですね。分かりましたわ。私と仲良くなさりたいお気持になられたら、いつでもお越し下さいな。私ね、シャルロッテさまよりナターリアさまの方が仲良くなれそうな気がしますの。」

「まあ、シャルロッテさまよりだなんて…。私、そんなたいした人間ではありませんし。」

「」謙遜を、ナターリアさま。母君に似てお綺麗ですわよ。では、私はこれで失礼します。私のところに来て下さることを願つておりますわ。」

そう言つとオリガは立ち上がりました。

「はい。必ずお訪ねしますわ、オリガさま」
ナターリアは笑つてオリガを見送りました。

その頃、王太后さま はシャルロッテが帰つたあと、儀式を担当した侍女を呼びつけておりました。

「お呼びドレマサスか、王太后わ。」

「わざわざまぬな。昨日の儀式のことが気になつましてね。少し尋ねたのです。」

侍女は少し身を離へして、

「はー。どのよひな」とドレマシヨウツカ。

「昨日、何もなかつたのであります。」

オリガの訪れ（後書き）

こんな妄想なお話しにお気に入り登録していただいた皆様、ありがとうございます。読んでくださる方がいると思うと頑張れそうです。

王太后からいきなり言われて侍女はドキッとしましたが、「王太后さま、何をおっしゃっているのか分かりかねます。」

「隠せどもよ。私は陛下の母ゆえ、あの子の様子を見れば分かれます。女面長にはそなから聞いたとは申さぬゆえ、教えてもらえぬか?」

王太后は微笑みながら侍女に尋ねます。

侍女は困惑しながらも、

「王太后さま、申し訳ございません。恐れながら、そのようなことはお答えいたしかねます。」

王太后はしぶとい侍女だなと思いながら、強い口調で、

「そなたは何か思い違いをしておらぬか?王妃不在のいま、この後宮のあるじはこの私です。この後宮で起こったことを把握しておかねばならぬのです。さあ、申してみよ。今すぐ!」

侍女はもう仕方ないと想い、

「恐れながらお答え申しあげます。私も詳しくは存じ上げませんが、寝室にお印が残されておりませんでしたので、恐らくは何もなかつたのではと思われます。」

王太后はやつぱりそうだったか。シャルロッテが俯いていたのはこのせいかと思い、

「そうでしたか。ありがとうございました。よく話してくれましたね。もう下がるがよい。」

「かしこまりました。失礼いたします。」

侍女せやう細川と下がへてこ抱せした。

それから何週間かたった頃、シャルロッテが王太后とのお茶会から戻る途中、オリガとすれ違いました。

いいところで出逢つたとオリガは思い、

お静かでござるが、

「さけんよう、オリガさま、いえ、王太后さまのお茶会からの
帰りですの。」

三ヶ月の接待を受けていたのに和かに ~~こと~~ 言わんばかりに自信をもつて
シャルロッテは答えました。

オリガはやつぱりねと思ひながら、

まあ、それは羨ましい」と。私などには声もかかりませんね。

「まあ、そうでしたのか？では、私から王太后さまにオリガさまを招待して下さるようお頼み致しましょうか？」

「あら、ヒンでもない。そんなつもりで申しあげたわけでは」
「ませんわ。どうぞお気遣いなく、シャルロッテさま。」

「……」遠慮なさらいで。王太后さまは私から申しあげればきっと

招待して下さいね。

微笑みながらシャルロッテは自慢をうたい言います。

「まあ、それはそれはさすがはシャルロッテさま。儀式をつとめられた方は違いますわね。いざれは王妃さまになられるのかしら？」

シャルロッテそれを聞いて満足そうに
「まあ、そんな恐れ多いことを。お決めになるのは陛下でいらっしゃ
やこます。」

「そんな」謙遜を。とにかく陛下にはあれからお会いになります
？」

「いいえ。陛下はお忙しくいらっしゃいますから。」

「やつでしたか。では、私はこれにて失礼いたします

「オリガさま、お茶会の」と、こつでも王太后さまに申しあげます
から遠慮なさらないで下さいませね。失礼いたします。」

オリガはシャルロッテを見送つた後、

「ふふ、いい気なものね。陛下がいまどきこるのか知りもしない
で…。」

とニヤリと笑つてつぶやき、やがて寝室へと戻つて行きました。

儀式の真実（後書き）

これから楽しくなりそうですね。次は陛下の登場です。たぶん…

陸の訪れ（前書き）

陸下とナターリアの後宮での初対面です。

陛下の訪れ

陛下がりの後宮の一室、ナターリアの部屋に陛下が訪れていました。

「陛下、ようこそおいで下さいました。」

ナターリアは初めての陛下の訪問に少し緊張氣味に迎えました。

陛下は少し微笑んで

「ナターリアどの、後宮に入られたとき以来ですね。これを…」

陛下が差し出したのは綺麗な菜の花の花束でした。

それを見たナターリアは少し緊張が緩み、笑顔で受け取り、「まあ、綺麗な菜の花…。陛下、これを私に下さいますの?」

陛下は少し頬を赤くして、

「そなたのために持つてきたのだ。受け取ってくれ。」

ナターリアは嬉しくなつて満面の笑顔でお礼を言いました。
「ありがとうございます、陛下。菜の花は私の大好きなお花でございます。お礼申しあげます。恐れながら陛下、お茶の用意が出来ておりますから」「わく…」

陛下は席に着いたあと、少し照れながら、

「そんなに喜んでくれるとは思わなかつた。もしかしたら、私のことを思い出してくれるかなと…」

ナターリアは何のことか分からずに、

「あの、思い出すとは…。私、以前に陛下にお目にかかつたことが

「じゃこましでしょうか?」

「わからないですか?私はあの菜の花畠で出逢つたアレクセイです
よ。」

陛下は一ヶ口リ笑つて答えます。

ナターリアはあつとじう顔をして、

「まあ!あのとき泣いていたアレクセイが陛下なんですの…」

陛下はいたずらうのよひな顔をして、

「泣いていたとは」挨拶だなあ、ナターリアビの」

ナターリアは急に恥ずかしそうに、

「あ、あの、その節は知らぬことは申せ、失礼の数々お許し下さ
いませ。誠に申し訳ございません。」

陛下はクックツと笑いながら、

「いいよ。気にしてないから。余いやナターリアビのの前では僕で
いいか。僕も言ってなかつたしね。」

ナターリアは安心して、

「ありがとうございます。陛下の広いお心に感謝いたしますわ。」

「ひつしてナターリアビのに逢えてうれしいよ。もつ後宮は慣れた
かい?ここは窮屈だるう?」

ゆつたり笑つて陛下が話しかけます。

「はい。いいえ、窮屈だなんて…。少しづつ慣れて来てあります。
戸惑いがちにナターリアが答えます。

「本当のことだよ。だから時々、逃げ出したくなるんだ。おっと、これは母君には内緒だよ。監視が厳しくなるからね。」
いたずらを見つかられたような少年のよつたな笑顔で陛下が言います。

「はい、陛下。王太后さまには内緒で」」やることますね。
笑顔でナターリアが答えます。

「ありがとうございます。ナターリアどのはい、やつぱりしてくれると思つたよ。
だからね、逃げ出したくなつたとき、ここに来てもいいかな? ここ
なら安心出来そうだ。ね?」

陛下はいたずらっぽい表情でウインクしながらナターリアに言いま
す。

「 もちろんで」」やることますね。こつでもおいで下をこませ。私も安心
しましたの。

陛下がどのような方が分からずになつておつりましたの。」

「僕の名前でわからなかつたの?」

陛下がおどけて話しかけます。

「急なお話でしたので…」

恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「まあ、いいや。これから仲良くなつよ。」
やつぱり陛下がナターリアの手を握つてきました。

ナターリアは少し顔を赤くしながら、

「はい、陛下。私も仲良くしていけそつたな気がします。」

それから一人は女官長が迎えに来るまで、思い出話などで楽しい時

問題を廻りました。

陛下の訪れ（後書き）

他の方に比べて話しが短くてすみません。
頑張つてはいるのですが…。
素人が書くものなので多少のことはお許しを。

初めて結ばれた日（前書き）

読んでくださる方が増えてきて嬉しい限りです。また、調子に乗つて書いてしまいました。

初めて結ばれた日

「陛下、お迎えに参りました。」

予定時間を過ぎて、しごれを切らした女官長がナターリアの部屋まで陛下を迎えてやつてきました。

「あ、もうそんな時間か…。ナターリアどの、長話をしたよつだ。」
残念そうに言つて、陛下が席から立ち上がりました。

「あ、いいえ、私の方こそ、気がつかなくて失礼をいたしました…。」

戸惑いがちにナターリアが言います。

「では陛下、参りましょ。」

女官長が陛下に帰りを促します。

「ナターリアどの、また来てもよいか?」

陛下が名残惜しそうにナターリアに尋ねます。

「はい。お待ちしております。」

ナターリアは微笑んで答えました。

「また来る、ナターリアどの。では、女官長、参りまづか。」

陛下はうれしそうに言つて、女官長と部屋を後にしました。

「ナターリアさま、いつまでそちらにおいでござりますか?」
ナターリアが陛下が去った後もしばらくそこに立っていたので、侍

女のマリアが見かねて声をかけました。

「え、ああ…、そうね。マリア、わざわざ陛下が下さった菜の花はどうしたの？」

「花瓶に活けておきましたわ。」「覽下さい。綺麗ですわ。」

マリアがそう言つてテーブルまでナターリアを誘います。

「本当に綺麗な菜の花ね。幼い頃を思い出すわ。」

ナターリアは物憂げに咳きます。

「ナターリアさま、決心して後宮にいらっしゃるのよつて、陛下も良いいお方のようですし…」

マリアが少し強い口調で諭します。

「やうだつたわね。だめね、私は…」

それから数日後、王宮の執務室で、機嫌な陛下が執務に励んでおりました。

「陛下、本日の執務はこれにて終了で、」やれこます。」「側に控えていた宰相が陛下に話しかけます。

陛下は微笑んで

「本当か。ではわづ、今日は自由の身だな？」

「いえ、本日は隣国の大臣をお迎えしての晩餐会がござりますれば、お忘れで？」

宰相が冷静に陛下に答えます。

陛下は残念そうに、

「まだ、公務があったのか…すると、夕食までは自由だな？」

「はい、夕食までは自由でござります。それにしても最近の陛下は、
「機嫌でいらっしゃいますな。妃をお迎えになると変わるもので。
宰相は微笑みながら陛下に話しかけます。

「からかうな、宰相。では、もつ部屋に戻るが。」

そう言つて陛下は執務室を出て、後宮のナターリアのもとへ向かい
ました。

「まあ、陛下。よつひをおいで下わこました。」

ナターリアが笑顔で迎えます。

「また来たよ。話しがしたくてな。」

陛下がうれしそうにナターリアに話しかけます。

「あの、今日はお時間はよろしこのでござりますか？」
ナターリアが遠慮がちに陛下に尋ねます。

「大丈夫だ。夕食までは自由の身だよ。きよひはゆつべつ出来る。
陛下はうれしそうに話します。

それから夕食までの時間一人でゆつべつと話しました。

その帰り際、陛下がナターリアに向かつて恥ずかしそうに、
「今度は夜、訪ねてもよいか？」

「はい。どうぞ私でよろしければお越し下せこませ。」
ナターリアは陛下のことを弟のように思つていたので、話し相手をするつもりで答えました。

「本当にいいのだな…。ではまた近いうちに来るからな。」
陛下はそれを聞いてとても喜んで、鼻歌まじりに部屋を後にしました。

ナターリアは私と話しをするだけでのようには陛下に喜んでもらえるなんて、後宮の生活も悪くないのかも知れないと思はじめました。

その夜は陛下は来れませんでしたが、翌日の夜、ナターリアの部屋に陛下が訪ねてきました。

「ナターリアどの、來たよ。」
陛下が頬を染めてナターリアに話しかけます。

「陛下、ようじやこらつしゃいました。遅くまで執務をなされたのですね。お疲れさまでござります。」
ナターリアが微笑んで陛下を迎えます。

「ああ、今日は疲れたよ。慰めてくれるかい？」
陛下がナターリアにあまえて話しかけます。

「はい、陛下。こま、お茶の支度をさせますので…」

「こや、お茶はよい。寝室へ参りや。」

そう言つて陸下はナターリアの手を握つてきました。

ナターリアは驚いて、

「陸下、寝室とは……」

「ナターリアどの、いやナターリアは私の妃だ……。夜来るとまだつ
いこうとかわかるだらう?」

陸下はナターリアに熱い視線を向けて言いました。

「陸下、あの……」

戸惑いがちにナターリアが言いました。

「陸下が悲しそうに

「ナターリア、嫌なのか?」

「いえ、そういうわけでは……。今日は話し相手だと思つていたので
驚いて……。」

「じゃあ、こいのだな……。」

陸下はそう言つて、ナターリアの肩を抱き寄せて、その頬にキスを
しました。

ナターリアは突然の出来事に恥ずかしそうに陸下に寄りかかりまし
た。

「では、寝室に行こや。」

陸下は顔を上気させて、ナターリアの耳元に囁きました。

「はこ……」

ナターリアは弟のように思っていた陛下に抱き寄せられ、ボーッとなってしまいました。

そのまま一人は寝室に行き、その夜結ばれました。

初めて結ばれた日（後書き）

二人が結ばれました。ここからが後宮の恐ろしさの始まり始まり…

幸せな朝

夢のような出来事だった…。愛しい初恋の人を抱くことがやっと出来た。

窓のカーテンの隙間から朝日がこぼれてくる。
もう、朝なのか…。

今日は朝から公務がが田白押しだ。もつ行かねばならない…。
隣には愛しい人が寝息をたてて眠っているところに。

「ナターリア、愛してる。」

陛下はそう言って、ナターリアの額にキスをしました。

そのとおり、ナターリアが身じろぎして、田を覚ました。

「陛下…、おはようござります。」

恥ずかしそうにナターリアが話しかけます。

「おはよう、ナターリア。起こしてしまったか…。すまない。私は
公務があるから、もう行かねばならない。」

ナターリアの髪をなでながら陛下が名残惜しそうに話しかけます。

「陛下、お支度を…」

ナターリアはそう言って、陛下の身支度を手伝おうと体を起こしけ
けましたが、
体がだるく起き上がれそうにありません。

それを見た陛下が

「ナターリア、起きなくてよい。ゆっくり過ごすといい。」

そう言って起き上がりました。

「でも、陛下…」

ナターリアも無理に体を起こしました。
そして、陛下の身支度を整えました。

「ありがとうございます、ナターリア。」

陛下はそう言って、

ナターリアを抱きしめました。

「いつてらつしゃこませ、陛下。」

ナターリアは抱きしめられたまま切なそうに話しかけました。

「また、来てもよいか？」

陛下はナターリアから体を離してから尋ねました。

「はい。お待ちしております…」

体をふりつかせながら、ナターリアが答えます。

「大丈夫か？また、来る。ゆっくり休んでくれ。行ってくる。」

陛下は心配そうに言って、部屋を後にしました。

ナターリアは陛下が部屋を後にするとベッドに横になり、日が高く
なるまで眠つていました。

「…たま、ナターリアさま、お加減はいかがでござりますか？」
侍女のマリアが心配そうに話しかけます。

「マリア、もう大丈夫よ。起きるわ。」

ナターリアはそう言って起き上がりました。

「大丈夫でござりますか？ナターリアさま。」昼食の支度が出来ておりますので。」

その夜も陛下が訪ねてきて、一緒に過ごしました。

そんな日々が続いたある日、陛下のもとに王太后が訪ねてきました。

「これは母君、いかがなされました？」

「陛下、こんなことを申したくないのですが、シャルロッテさんののもとに行かれてないとか…？」

遠慮がちに王太后が言います。

それを聞いたアレクセイは、思わず眉をひそめて、「公務が忙しいのですよ。」

「他の妃に行く暇はあるのに、ですか。陛下？」

陛下は王太后に痛いところを突かれて、動搖して「どうしろと言つのですか？」

「シャルロッテさんは大臣の息女です。大臣にはいろいろお世話になっていますし、私の顔をたてて、行つてはもらえませんか？」

陛下が苦虫を潰したような顔をして、

「王太后が特定の妃を蠶貝にされるようなことは控えられた方がよろしいのではないですか？」

王太后は困った顔をして、

「わかつてはあるが、そなたに頼むしかないのだ。母の頼みを聞い

てはもうえまいか？「

陛下はナターリアのもとに行くつもりで執務を頑張つて時間を作つていたので、ため息をついて、

「仕方ありませんね。では、今日のお茶の時間に参りましょう。それでよろしいですね、母君？」

「ありがとうございます、陛下。そなたなら頼みを聞いてくれると思いましたよ。シャルロッテどのも喜びます。泣いて頼まれたのですよ。」

王太后がうれしそうに言いました。

そして、午後のお茶の時間となりました。

後宮のシャルロッテの部屋に陛下がやつてきました。

「陛下、お待ちしておつました。」

シャルロッテが陛下を笑顔で迎えました。

幸せな朝（後書き）

これから的发展がうう、楽しくなりそうですね。

シャルロッテのもとへ

「シャルロッテの、久しぶりだな。」

陸下がふつむつと話しかけます。

「陸下、儀式の時以来で、やれこませぬ。お逢にできなくて寂しかつたですわ。」

シャルロッテが可愛らしく小言を言こます。

「すまない。何かと忙しかつたものでな……。」

「そんなこにしあつたんですの？お父さまに陸下をあつまつしつへくせなこいつてぬせもじゅうか？」

「いや、いい。公務だからな。」

「遠慮なさいなくしてよひじこ。お父さまは私のことなら聞いてくれますよ。」

陸下に対しても血縁者にシャルロッテは言こます。

それを聞いて陸下は

母君の頼みとはいえ、来るんじゃなかつたな……。
と思い、ひそかにため息をつきました。

そのころ、同じ頃のナターリアの部屋では……。

「ナターリアわよ、陸下が都合が悪くお茶の時間に来られなくなつたとのことだ」わこます。」

使いを受けたマリアがナターリアに伝えます。

「ナターリアおじいのね…。」

ナターリアは寂しそうに苦笑しました。

「ナターリアさま、陛下はいらっしゃらないですけど、お茶の時間ですしお用意いたしますね。」

そう言つてマリアがお茶の支度を始めました。

「なんだか、今日のお茶の時間は一人で寂しいわね、マリア?..」ため息をつきながらマリアに話しかけます。

マリアが首をかしげて、

「ナターリアさま、でも陛下がいらっしゃる前はずっとお一人でいらっしゃいましたでしょ?..」

「もうなんだけど、陛下がいるのが当たり前になってしまってなんだか寂しいのよ…」

「もしかしてナターリアさま、もう陛下のことを好きになってしまってしゃいますの?..」

「私にもよくわからないの…。カールさまのことを好きな気持ちには変わりはないと思うのだけど、陛下がいらっしゃらないとなんだか寂しいのよ…。」

戸惑つたようにナターリアが答えます。

「そうですか。カールさまとのことは残念ではござりますが、ナターリアさまはもう皇妃さまとなられでよいのですよ。もうお連れになりませんと…」

姉のような口調でマリアはナターリアを諭します。

「わかつてはいるのだけれど…。それにもう、カールさまも私のことなんて忘れてるわよね…。」

ため息をついて呟きます。

「ナターリアさま…」

「『めんなさい。もう忘れるよ』にするから…。」

「ナターリアさま、何か気分転換なさつたらいかがです？後宮に入つてからずっと部屋に閉じこもりですし、気分も変わりますわ。」
ナターリアを元気づけるようにマリアが言います。

「そうね。あ、そうだわ、以前オリガさまが訪ねていらつしゃつたけど、まだお返事してなかつたわね。

明日にでも、オリガさまを訪ねてみよつかしら？」

「そういうは、そうでしたわね。陛下がよくいらっしゃつるよにになつたのでそのままになつてましたわね。オリガさまのもとに明日お伺いしますと使いをだしておきますわ。」

そして翌日のお茶の時間にナターリアはオリガの部屋を訪ねていました。

「オリガさま、『きげんよう。お訪ねするのが、遅くなりまして申し訳ございません。』

遠慮がちにナターリアは挨拶をします。

「『ハセガワ』よ、ナターリアさま。いいのですよ。陛下がいらっしゃるの、お暇がなかつたのでしょ？」「微笑みながらオリガが言います。

「ま、ご存知でしたの…」

恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「噂ですわよ、ナターリアさま。でも、シャルロッテさまば」存知ないようすけど…」

と言つて、含み笑いをしました。

「まあ、そんな噂があつましたの…」

「ええ…。ナターリアさま、今日は来てくださつて嬉しいですわ。仲良くして下さるとこう」となんですもの。お茶の用意をしてありますから」おひるべくおつぶ。」

王太后と大臣の話し合い

それから数日たつたある日の午後のことです。いつものように後宮の王太后の部屋にシャルロッテがやってきてお茶会が行われておりました。

「「」きげんよう、王太后さま。」

いつものように可愛らしい笑顔でシャルロッテが挨拶をします。

「「」きげんよう、シャルロッテどの」

笑顔で王太后も迎えます。

「あの、今日は父と一緒に参りましたの。お茶会に「」一緒に下るしいでしようか？」

上目遣いにシャルロッテが王太后に尋ねます。

王太后はえつと、いう顔をしましたが、

「大臣が…。それはもちろんかまいませんよ。」

「ありがとうございます、王太后さま。きっとそうおつしゃって下さるといましたわ。」

シャルロッテはホッと一安心して王太后に話しかけます。

「王太后さまには「」機嫌麗しくおめでとうございます。突然参りまして、申し訳「」ぞいません。側妃さまに誘われまして、厚かましくも参つた次第で「」ぞいます。」

大臣が遠慮がちに挨拶をしました。

「これは大臣、よく参られました。ご丁寧な「」挨拶恐れ入ります。」

困惑しながらも、笑顔で王太后が迎えます。

「ねえ、お父さま、大丈夫でしたでしょ？」「

シャルロッテが恐縮していの父に笑って話しかけます。

その様子を見た大臣がため息をつきながら、シャルロッテに小言を言います。

「お前という子は…。ここには屋敷とは違うのだぞ。王太后さまに失礼のないよう致さねばならぬというに…。」

「お父さま、何もこんなところでおつしゃらなくとも…。」

シャルロッテは不満げに言います。

「大臣、もうそのくらいでよいではないか。

しかし、シャルロッテどの、突然参つては侍女たちがお茶の支度に困るゆえ、次からは連絡してから来るよう。いいですね？」

王太后は大臣にとりなしながら、シャルロッテに釘を刺します。

「はい、王太后さま。次から気をつけます。」

しおりしくにシャルロッテが答えます。

「王太后さま、しつけがなつておりませんよつて誠に恐れ入ります。」大臣が恥ずかしそうに王太后に伝えます。

「まあ、よいよい。お茶の支度が整つたようだ。二人ともお茶会を始めるゆえ、こちらへおいでなさい。」

王太后がそう言つて一人を誘い、お茶会が始まりました。

楽しいお茶会が終わり、お開きの時間となりました。

「ではお父さま、そろそろ失礼しましょうか？」

シャルロッテが大臣に帰りを促します。

大臣は言いにくそうに

「それがシャルロッテいや側妃さま、父は王太后さまに少しお話ししたいことがありますので、お先に部屋にお戻り下さいますようにお願ひいたします。」

「そうですね？じゃあ、仕方ありませんわね。それでは、王太后さま失礼いたします。」

満げにシャルロッテは言つて、自分の部屋に戻つて行きました。

シャルロッテが帰つた後、大臣が王太后に話しかけます。

「恐れ入ります。王太后さま、少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「かまいませんよ、大臣。話しあはせてもしゃ、シャルロッテどのに關係することでしょうか？」

恐縮しながら大臣が答えます。

「王太后さまにはかないませんな。お察しのとおり、側妃さまのことがござります。至らぬ娘ではございますが、いざれは王妃にと後に上げた娘でござります。」

「やはつやつでしたか。私も氣にはなつてはいるのですが…」

王太后は言葉を少し濁します。

苦笑いしながら大臣が、

「聞いたところによりますと、陛下にはシャルロッテさまではなく別の側妃さまをじ寵愛されておられるとのことです…。」

王太后が困ったように、

「そうなのです。儀式はシャルロッテどのがつとめましたが、陛下には別の妃のもとに通つております。私もシャルロッテどのもとに行くように陛下には申しあげましたが…。」

「それで、陛下はシャルロッテさまのもとにお越しに？」

大臣が窺つよに尋ねます。

「数日前に行つたようですが、どうもかれきりのよつのなのです。」

弱り切つた様子で王太后が答えます。

「それは、困りましたな。万一、その妃に先に王子でも出来ては…。何が手を打ちませんと。」

苦々しく大臣が言います。

「そうですね。何か考へては見ますが、シャルロッテどのも陛下の「寵愛を得られるように少し努力をしていただきませんと。」

「よく申しておきますので、王太后さま、何卒よろしくお願ひします。」

「分かりました。悪いが大臣、もうさがつてはくれぬか？何か手を考えますゆえ…。」

少し王太后は考え込みながら、大臣に伝えます。

「ははっ。何か私に出来ることがありましたらお申しつけを下さい
ますように。では、失礼いたします。」

大臣はそう言って、王太后をもとをさがつていきました。

後日、王太后は何を考えたのか、ナターリアを呼びつけます。

突然の里帰り

ナターリアはいきなり王太后から呼ばれて何事かしらと、何か失礼でもあつたのかと少し怯えながら王太后のもとにやってきました。

「王太后さまには」機嫌麗しくおめでと「いらっしゃいます。ナターリア、お呼びにより参りました。」

緊張しながら王太后にナターリアは挨拶をしました。

「「」きげんよう、ナターリアどの。突然呼ばれて驚かれたでしょう？悪いとは思つたのですが、気になることがありますてね。」

笑顔で王太后が迎えました。

ナターリアはえつという顔をして、
「気になることで」ぞいりますか…？」

王太后は後宮に入つて以来何ヶ月かぶりに見るナターリアが以前も美しいとは思つていたのですが、陛下に愛されているせいからに美しくなつていきました。これでは可愛いがわがままなシャルロッテどのにもとに来る気になれないなとひそかに王太后はため息をつきました。

「ええ。さあ、お茶の用意がしてありますので、こちらへおいでなさい。」

そういつて王太后はナターリアを誘いました。

「恐れ入ります、王太后さま。」
ナターリアは恐縮しつつ席につきました。

「それにしても、ナターリアビのほお綺麗になられたこと。見違えましたわ。」

微笑んで王太后はナターリアに話しかけます。

「いえ、そのようなことは…」
ナターリアは思いもかけないことを言われて、恥ずかしそうに答えます。

「本当にことですよ。他にも妃がいるのに、そなたのばかりに行く陛下のおかげかしら?」

棘を含むように王太后が言います。

ナターリアは、

他にも妃がいることは分かつてはいましたが陛下が自分のところにばかり来るのせいで他の妃が自分のことをどう思っているか考えもしませんでした。

それというのも、急に後宮に入るに至ったので何の勉強も覚悟も出来ていなかったからでした。

他の妃の立場を考えなかつたことを指摘されたと思って、すっかり畏れてしまい、

「恐れ入ります…。」

王太后はその様子を見て、ほくそ笑み、

「それで、気になることとこつのはロアーハナ公爵のことです。」
窺つよつて王太后が言います。

「お父さまの…、どのよつなことじょつか?」

いきなり父のことを言われてナターリアは戸惑いがちに答えます。

「ええ。父君が「病氣なのに後宮にお迎えして申し訳なく思つてお

りましてね。それで、一度、お見舞いに実家に帰られて はいかが
かと思いますね。どうかしら、ナターリアどの？」

微笑みながら王太后 が尋ねます。

ナターリアは父のことを忘れていたわけではないのですが、後宮での生活や陛下がよく来るようになつてそのことを実家にいたときより考えなくなつていきました。なので、そのことを言われたとき、はつとして、お父さまに悪いことをしてしまつたと思い、遠慮がちに、「王太后さま、でも、私、後宮に入りましたのに、実家に帰らせていただいてもよろしいのですか?」

「遠慮なさらなくともよろしいのよ。陛下には私から伝えておきますから、すぐに実家にお帰りなさい。」

王太后は親切そうにナターリアに語氣を強めて言います。

「本当にいいの？」やれこますか…？」

「もちろんですよ。」

「お気遣いありがとうございます。あ、でも、実家に使いを出しますので、また田にちが決まりましたら、ご挨拶に伺います。」

少し嬉しそうにナターリアが言います。

王太后はつまらこきそうだと含み笑いをしながら、

「その必要はありませんよ。すでに使いを出し、馬車も用意出来ておつます。」

あまりに手際よいの良い王太后にびっくりして、戸惑いがちに、「そんなことまでしていただいでは…。」

王太后はイライラして強い口調で、

「遠慮はいらぬと申しているであらつ。誰かおらぬか！」

側に控えていた侍女が駆け寄り、

「王太后さま、お呼びでござりますか？」

「ナターリアどのが父君の見舞いに実家に帰られる。陛下にそのことを伝え、ナターリアどのが実家にお送り申し上げなさい。」

侍女は王太后が機嫌が悪くなっているので素早く行動し、

「ナターリアさま、ご実家までお送り申し上げます。さあ参りましょ。」

あつという間にナターリアと一緒に王太后の部屋にやつてきていた侍女のマリアは馬車に乗せられて実家のロプーヒナ公爵家に帰されました。

その様子を眺めて王太后は

「悪く思わないでね、ナターリアど。憎いわけではないけれど、こうでもしないとアレクセイはシャルロッテどのもとに行かないでしようから。」

と小さく呟きました。

それから数時間もしないうちにあわてふためいた陛下が、王太后のもとへやつてきました。

王太后の驚愕

「」は後宮でも奥まつたところにある王太后の居室で、広い庭園のある場所でござります。

数時間前、強引に側妃ナターリアを実家に帰した後、王太后は陛下はいつやって来るかなと思いながら、今日はシャルロッテをお茶に誘うことなく、一人優雅に午後のお茶を楽しんでおりました。

「王太后さま、陛下のお越しでござります。」
侍女が陛下の訪れを告げます。

王太后は
案外来るのが早いわね。
と思いながら、陛下を迎えました。

「母君…どういたしまして…！」
血相を変えた陛下が女官長とともに王太后の部屋に飛び込んできました。

「」きげんよう、陛下。それに女官長も。突然、何事ござりますか？」

王太后はとぼけて、微笑んで一人を迎えます。

「王太后さま、突然失礼いたします。至急お伺いしたいことがございまして、陛下と参った次第でござります。」

女官長は、
全くこの古狸が…。
と思いながら王太后に挨拶をします。

「至急とはどのよつなことですか？ちょうどよこところへ来ましたね。いまお茶を飲んでいたところですから、一緒に飲みながら話をしましょ。」

さらに王太后はとぼけます。

その様子を見た陛下はイライラして、叫びます。

「母君、とぼけるのもいい加減にして下さいーナターリアを突然お帰しになつたでしょー…。」

「ああ、そのことですか。ナターリアどのは父君のお見舞いに帰られたのですよ。」

突然叫んだ息子の様子に少し驚きながら王太后が答えます。

「帰したのは母君でしょー！私に何の断りもなくつー。」

語氣強く陛下が王太后に迫ります。

「王太后さま、恐れながら、後宮におられるお妃が外出されるにはどのような用件であるつとも事前に私を通して陛下の許可が必要でござります。」

穏やかに女官長は陛下に続いて王太后に迫ります。

「何ですか、二人とも…。ただ、私は、父が病氣のナターリアどんを氣の毒に思つて見舞いに実家に帰して上げただけではありませんかー。」

わなわなとふるえながら王太后は言い返します。

「母君、本当にそれだけですか…。」

疑わしそうに陛下が王太后に尋ねます。

「それだけとは、この母の言つことが信じられぬと申すのか…。」

王太后は痛いと口をつかれて、動搖しながらも言ひ返します。

「それならばそれでよろしいですが、側妃が後宮を出るとはそれなりの手続きが必要でしょう。長く後宮にお暮らしの母君ならおわかれのはず。」

冷ややかに陛下が王太后を諭します。

王太后はこれまで何でも言つことを聞いてくれていた息子にこんなことを言われるとは思わなかつたので、呆然としてしまいました。

「アレクセイ、 じつしてなのです……」

すっかり意氣消沈した表情で王太后は陛下に尋ねます。

「どうしてとは？」ショックを受けていた王太后に少し言ひ過ぎたかなと思いながら陛下が尋ねます。

「どうして母君のやうなことを申すのですか……。父君が早く亡くなつてから頑張つてそなたを育ててきたところの……。」

震える声で王太后は陛下に尋ねます。

「そのことには感謝しておりますが、このことはまた別のことでござります。」

「別だと申すのか……」

「やつです。今回、母君は国王である私が許可を出すべきものを勝手にしておしまいましたの。後宮を仕切るはずの女官長の立場もありますまい。」

夫を早く亡くして頑張つてきた母を少し哀れに思いながら言わねばならないことだからと勇気を振り絞つて陛下は言います。

王太后は消え入るような声で、
「母にどうしようと申すのかじや。そなたのためによかれと思つてしまふたと言ひのに…。」

その様子を見た陛下が母のことがかわいそうになり、
「母君、今回のこととは見逃しますが、次はこのようないふにして下さい。」

そう言つと陛下は女官長に向かつて、

「では女官長、早速にもロブーヒナ公爵家にナターリアを迎える使者を手配してくれ。」

「かしこまりました、陛下。」

王太后を気遣いながら女官長は答えます。

「それから母君、女官長の顔も潰さぬように今後はご配慮下さい。今日のところはこれで失礼いたします。では、女官長、参らうか。陛下は王太后に挨拶をした後、女官長とともに帰りを促します。

呆然とする王太后に女官長は何と言つていいかわかりませんでしたが、言わねばならないことだからと思い、王太后に告げました。
「王太后さま、今後はよろしくお願ひいたします。御前、失礼いたします。」

こうして二人は呆然と立ちつくす王太后を置いて去つて行きました。

残された王太后は、なぜ可愛がつてきた息子があんなに変わつてしまつたのか理解することが出来ませんでした。
ただ、変わつてしまつたのがナターリアのせいだと思つしかなかつ

た
の
で
す。

ナターリアの里帰り

そのころ、ナターリアと侍女アリスは、王太后の手配した馬車によりローブーヒナ公爵家に到着しておりました。

「お帰りなさいませ、側妃さま…。」

ナターリアを迎える母の公爵夫人も連絡があつたとはいえ、後宮に入つたはずの娘が突然帰つてくるのですから戸惑いがちに挨拶をしました。

「お母さま、あの…、ただいま戻りました。」

ナターリアも見舞いとはいえ突然帰されたのですから「どちらも戸惑つていました。」

お互いしばらくの沈黙ののち、公爵夫人が心配そうに、
「あの、ナターリアさま、何かあつたのですか？側妃になられた方が父君の見舞いとはいえ実家に帰られるとは…。」

「私にもよくわからないのです。実は今日、王太后さまに呼ばれて参りましたの。そうしましたら、父君のお見舞いに実家に帰りなさいと突然仰せられて、あつという間に馬車に乗せられてアリスと一緒にここに帰りましたの。」

困惑した表情でナターリアが答えます。

「どうして急にそんなことに…。」

それを聞いた公爵夫人は後宮はいろいろなことがあると聞いていましたが娘がつらい目にあつているのではないかと心配になり、絶句してしまいました。

「奥さま…、申し訳ございません。」

ナターリアと一緒に帰ってきた侍女のアリスがおずおずと公爵夫人に言います。

「アリス、あなたのせいではないわ。気にしないで。」

公爵夫人は泣きそうなアリスを気遣うように話しかけます。

「ありがとうございます、奥さま。何の役にも立てずに申し訳ございません。」

アリスは任せて下さい、との歎敷を出て王宮に行つたのにこんなことになり情けない気持ちでいっぱいになりました。

「そうだわ。公爵さまがナターリアさまが帰つてくると聞いて心配していました。逢いに行きましょう。」

公爵夫人は暗くなつた雰囲気を振り払つように、病氣療養中の公爵のもとに一人を連れていきました。それというのも、いまは公爵夫人とはいえナターリアの母は商家の娘で公爵家の侍女に過ぎませんでしたから、後宮のことは分かりません。夫の公爵なら何か解決策があるのでないかと考えたのです。

「ンン…」

「Hレナか?」

「はい、公爵さま。側妃さまがお見舞いに参られました。」

「そうか。恐れおおいが、ここに通してくれ。」

ナターリアはなつかしい父の声に家に帰つてきたと実感していました。

「かしこまりました。さあ、ナターリアをまどひわ。

母はそう言つと、ドアを開けて父に引き合わせてくれました。

久しぶりに見るベッドに横たわる父は以前に比べて少し健康を取り戻したように見えました。

「久しぶりです、お父さま。『気分はいかがですか?』
ナターリアはおずおずと父に話しかけます。

「側妃さま、わざわざのお見舞い有り難く存じます。おかげさまで、
今日は気分が良いよいでござります。」

突然帰つてきた久しぶりに見る娘は以前より綺麗になつたようでした。

「それはよろしく『ございました。』

ナターリアは少し元気になつた父の姿を見て安心しました。

公爵は綺麗になつた娘の姿を見て、これは陛下の『寵愛』を受けて何かあつて、帰されたのかと感じました。そこで、ナターリアを探るよう尋ねました。

「ところで側妃さまには、いつ王室にお戻りになられる『予定』にござりますか?」

聞かれたナターリアも突然帰されたのですから、いつと聞かれてもどう返事をしていいかわからず、

「あの、お父さま、私…。」

そばで聞いていた母のヒレナが公爵に見かねて話しかけます。

「あの、公爵さま。今回のこととは王太后さまの「」意向のようだ」とね
います。」

「王太后さまの? それでは、大臣の指しがねやも知れるな…。」
少し考え込むように公爵が呟きました。

「あの、お父さま、私、今日突然お見舞いにと帰されたのでいつ帰
つていいのか分かりませんの…。」

戸惑った表情で父に助けを求めるようにナターリアは言います。

その様子を見た公爵は、娘に重荷を背負わせて悪かったと思いつつ、
詳しい話しを聞かなければならぬなと思いました。

「ナターリアさま、ご苦労をおかけして申し訳ない。至らぬ父では
あるが、あなたさまのためにお力になれることがあるかも知れぬか
ら、後宮に入つてからのこと話をしてもうえぬか?」

それを聞いたナターリアは父に話すのは恥ずかしいとは思いました
が、どうしてよいか分からなかつたので後宮であつたことを話しました。

それを聞いた公爵はやはり大臣の指しがねだと確信しました。
そして、娘のナターリアに語りかけました。

「ナターリアさま、これから父の申すことをよく聞いて下さい。」

「はい、お父さま。」

話そつとしたそのとき、侍女が王宮からナターリアの迎えの使者が
來たと伝えてきました。

「何？迎えの使者が…。では、ここにお連れするよつた。ナターリアさま、父が話しますから、自分の部屋にてお待ち下さりますようお願いしてもよろしいか。」

ナターリアは父の言つことだからと頷き、以前暮らしていた部屋に行ってしまいました。

そして、迎えの使者が公爵の部屋に入つてきました。

「お使者どの、わざわざのお越し恐れ入ります。」

迎えの使者

「お久しぶりで」「やります。公爵さま。お加減はいかがでいらっしゃりますか？」

迎えの使者が公爵に挨拶をしました。

その姿を見た公爵があつと思いました。
使者は何と女官長でした。

「これは女官長さま…！お久しぶりで」「やります。まさか女官長さまみずからがおいでとは、恐れ入ります。おかげさまにて少し加減が良いようで」「やります。」

公爵は驚きながらもお辞儀をして挨拶をしました。

公爵のそばに控えていた公爵夫人も驚いた様子でしたが、
「女官長さま、よつこをおいで下さいました。」
と言つて会釈をしました。

あつたことが、自分より身分の高い公爵にさまで付けをされた女官長は戸惑いましたが、遠慮がちに受け答えしました。

「それはよろしく」「やりました。公爵夫人の」「看病や」のたびの側妃さまのお見舞いの賜物で」「やいましょ」。

「どうやらそのよう」「やります。突然の側妃さまのお見舞いにはいたさか驚きましたが…。」

公爵は少し皮肉るよつて答えました。

「JのたびのJとは私の不手際にて、申し訳なJとJぞこます。

女官長は少し困りながらも、公爵には「まかしあきかないなど思ひ、謝罪しました。

「いや、女官長さまのせいではござりますまい。王太后さまの意向のよつに伺いました。女官長さまもご苦労のこととで…。」

女臣様を遺憾の限り公爵が語ります。

「恐れ入ります、公爵さま。あの、ところで側妃さまはいづれにおりでござりますか？」

言いにくそうに女富長がそばにいないナターリアのことを公爵に尋ねます。

「側妃さまは別室においてでござります。女官長さまに迎えに来て
いたいたのに申し訳ないが、父として今日のところは側妃さまに
王宮にお戻りいただくことは賛成出来かねます。」

俯き加減で話しをしていた女官長がはっと顔を上げて、

「それでは公爵をお[口]は、側妃をお[口]のままお手[口]に置かれるおつもりド[口]れこますか…」

「女官さま、勘違いわれますな。今田のどひせと申しましたで
しょう。こも困惑しておられるナターリアさまのお気持ちが落ち着
くまでの」とです。このたびのことは、恐れながら陛下の「寵愛が
側妃さまばかりに過ぎたことが原因のひとつと思ひますが、いかが思
われる?」

はつきりと女官長を顔を見て、きつぱりと公爵は言います。

「それは……、否定は致しませんが、あまり長くはおひいきでな

りますと側妃さまが王宮に戻りにくくなつたと存じます。困惑しながらも女官長も言い返します。

「それはやうだが、このままお戻りいただいては同じことの繰り返しになりますよ。違いますかな?」

女官長を窺うよつて公爵が尋ねます。

「「」もつとも」「」やります。」

女官長は痛いところをつかれて返す言葉もないようでした。

「女官長さま、私も急なお話しだつたとはいへ後宮のことを娘にあまり教えられず送り出したことを悔いております。このうちにおいで間にそのことを教えてく思います。他の妃への気遣いも出来るようになりますゆえ、一、二日ばかりお預かり致したく存じます。よろしいか?」

公爵は女官長に尋ねる形をとつていますが、有無を言わぬ口調でした。

「公爵のお気持ちをお察し致しますが、今日といふわけには参りませんでしょつか?」

女官長は陛下に頼まれてこゝまで来た手前、手ぶらでは帰れませんので必死で言い募ります。

公爵は女官長の立場も察しながらも、

「申し訳ないが、それは出来かねます。陛下に私から手紙を書きますゆえ、それでお許しをいただきたく存じます。」

「かしこまりました。よろしくお願いします。」

女官長はがっくつと肩を落として答えました。

「ハレナ、すまないが女官長さまを応接間に『』案内して、お茶を出ししておくれ。女官長さま、おくつろぎの間に手紙をお書き致しますので。」

公爵はそう言つと、そばで手紙を書き始めました。

公爵夫人は

「では女官長さま、『』案内致しますので『』あらへどり。」

と女官長を促します。

女官長は公爵夫人の案内で部屋を出て、応接間に向かいました。

二人が部屋を出て公爵一人だけになつたときでした。
公爵が隣の部屋に向かつて声をかけました。

「カール、もうよいぞ。『』ちらに来なさい。」

隣の部屋から現れたのはナターリアの初恋の入カールでした。

「公爵さま、失礼致します。」

カールは公爵のお見舞いにきていたのですが、ナターリアが突然見舞いに戻ってきたので遠慮して別室に控えていたのでした。

「カール、幼なじみなのだから遠慮することなくナターリアさまにお逢いすればよかつたのに…。」

「いえ、公爵さま。私は男爵家の跡継ぎに過ぎない身に『』ぞいます。」

側妃さまにお逢いすることなど懲れ多い」とアレルコモア。

遠慮がちにカールが答えます。

公爵はため息をついて、

「そんなに遠慮することはないのに。私はそなたを息子のように思つていいのだから…。」

「ありがとうございます。しかし、身分違いでございます
ゆえ…。」

俯き加減でカールは公爵に答えます。

「すまないな、カール。私の本当の息子にしたいと思つていたのだが…。」

申し訳なさそうに公爵がカールに言います。

「いいえ、公爵さま。もう終わつたお話しにござります。もともと私には過ぎたお話しでしたから。」顔を上げて、公爵にきつぱりとカールは言います。

「そう遠慮ばかりするな。そなたの悪い癖だぞ。さて、手紙が書き終わつた。すまないがカール、これを応接間まで届けてくれまいか?」

そう言って公爵はカールに手紙を二どづけます。

「私でよろしいのですか?」

「ここでもカールは遠慮します。」

「カール、いまここにはそなたしかおらぬではないか。頼みを聞いてはくれまい?」

公爵はカールの手をとつて頼みます。

「かしこまりました。では、お届けして参ります。」
仕方なくカールは部屋を出て、応接間に向かいました。

女面の聲り（前書き）

サブタイトルを分かりやすく名前をつけました。読みやすくなつた
かと思います。

女官長の帰り

はあ…

女官長は困っていました。陛下の使者として、せっかく公爵家まで来たというのに側妃ナターリアを連れて帰ることが出来ないのでした。

ここ応接間で出された公爵夫人手作りのアップルパイも紅茶も味がまるでしないのでした。

それに気づいた公爵夫人も、氣の毒に思いましたが、このままナターリアを帰すことも出来ないのでした。

そんな雰囲気の中、カールがやつてきました。

「失礼します。公爵さまの手紙をお持ちいたしました。」

カールはそう言って、応接間に入つて来ました。

カールの姿に驚いた公爵夫人は、

「まあ、カールどの。どうしてあなたが公爵さまの手紙を…。」

「公爵さまのお見舞いに伺いましたら、こちらに手紙をお持ちするようにとのことでございましたので。」

遠慮がちにカールが公爵夫人に答えます。

「まあ、公爵さまはカールどのに小間使いのようなことをさせて…。ありがとうございます。お手をわざわらせて申し訳ありません。」

手紙を受け取りながら公爵夫人はすまなそうにカールに詫びます。

「いえ、どうぞお氣になさいませんよ！」

カールは微笑んで公爵夫人に答えます。

そのやり取りを眺めていた女官長は、怪訝そうに、
「あの、公爵夫人、こちらの方はどうぞ？」

「失礼致しました、女官長さま。こちらはフレデリカ男爵家のカールどのです。公爵さまが息子のように思つておられる方です。今日もお見舞いに来て下さいましたのよ。」

にこやかに公爵夫人は言つて、カールを女官長に紹介します。

それを聞いた女官長は、

「そうでしたか。フレデリカ男爵家の…。初めまして、カールどの。」

と言つてカールに挨拶をします。

「カールどの、こちらは王宮の女官長さまであります。」

公爵夫人はカールに女官長を紹介します。

カールは少し緊張氣味に挨拶を交わします。

「初めまして、女官長さま。カール・フレデリカでございます。お逢い出来て光栄でござります。」

「いらっしゃりこそ、公爵さまの息子同様の方にお逢い出来るなんて光栄ですわ。」

「いえ、この身には過ぎた」とです。」

遠慮がちにカールは答えます。

公爵夫人はため息をついて、

「カールどの、またそんなことを…。遠慮はいらないと申している
でしょ？」

そう言われてカールは困った顔をしながら、

「申し訳ありません、公爵夫人。なかなか慣れないものですから…。
あの、それでは私はこれにて失礼させていただきます。」

そう言つてカールは帰つて行きました。

カールが帰つた後、女官長は公爵夫人に尋ねました。

「なかなかの好青年のですね、カールどのは。ナターリアさまとも
面識がおありなのですか？」

「いい青年でしょ。私も気に入つておりますの。ナターリアさま
とも幼い頃、兄弟のように仲良くしておりましたのよ。」

公爵夫人はカールのことを褒められて嬉しいのか、機嫌良く答えま
す。

「そうでしたか。さて、それでは私も、長く王宮を離れてはいられ
ませんからそろそろ失礼いたします。」

女官長はそう言つて立ち上りました。

公爵夫人はあわてて手紙を女官長に渡して、

「これは長居をおさせ致しまして、申し訳ございません。くれぐれ
も陛下によしなにお伝え下さいますようお願い申し上げします。」
そう言つて帰つて行く女官長を見送りました。

その日のH宮の執務室では陛下が執務も上の仕事でわざわざとしながらナターリアの帰りを待ちわびていました。

そして、迎えに行つた女官長が帰つてきたと聞くと、うれしさうにH宮女官長を連れてくるよう指示をしました。

そして、報告に現れた女官長からナターリアを連れて帰れなかつたと聞くと、陛下の顔は笑顔からあつとくいう間に悲しいひきつった顔になりました。

「どうしてなんだ…」

今にも泣きそうな顔で陛下が尋ねます。

「申し訳ございません、陛下。ただ、ローラーナ公爵をおまつ陛下にお手紙をことづかつて参りました。」

そつとつて女官長は公爵からの手紙を陛下に手渡しました。

女官長の帰り（後書き）

「いつナターリアは戻つてくるのか」「いつ」期待です。

う、腕が震える。後宮らしい展開が始まるぞ！

わへ、いよいよ王宮の執務室、どんよつした空氣に包まれておひます。

王太后によつて数時間前に実家に帰された側妃ナターリアを迎えに行つたはずの女官長が手ぶらで帰つてきたからです。

いや、ナターリアの父のロブーハナ公爵の手紙を携えて戻りましたが…。

報告を聞いた陛下はがつくりと肩を落としながらも公爵からの手紙を震える手で読んでいます。

「陛下、公爵さまは何と書かれておられましたの？」
心配そうに女官長は陛下に尋ねます。

泣きそうな顔を上げて陛下は、

「公爵は、ナターリアばかり寵愛しては他の妃の嫉妬を買つて今回のようなことになるから、他の妃にも配慮しようと…。」

ううう…、

最後は涙まじりに答えます。

女官長は心の中で、さすがは公爵まだ」と。後宮を良くわかつていらっしゃると思いました。

「どうしてなんだ…。私はナターリアがいてくれるだけでいいのに。他の妃などいらぬのに…。もしや、公爵は私を恨んでいるのかな、

女官長?」

さきほどまで執務を威厳ある態度でこなしていた別人のよつに情けない態度で陛下は女官長に尋ねます。

「まあ、何をおつしやるかと思えば…。

公爵さまが陛下をお恨み申すなど有り得ませんよ。」

含み笑いをしながら、幼い子供をなだめるよつに女官長は陛下に話しかけます。

「だつてマーヤ、ナターリアを後宮に迎えたいと何年も前から頼んでいたのにずっと断つてきただじゃないか。公爵が病気になつたとき、弱みにつけこむよつで悪いとは思つたけど頼んだら、よつやく承知してくれた。そのことを恨んでるんぢや…。」

うつうつ…

子供のよつに涙を流してグズグズと言つて陛下はもはや威厳も何もありませんでした。

女官長は、若くても威厳のある立派な陛下にお育て出来たと自負していたのに…。この情けない姿。

どこで育て方を間違えたのかしらと思い、ため息をつきつつ、「公爵さまはそのような方ではありませんよ、陛下。ずっとお断りなされたのはきっと何かわけがおありになつたのでしょうか。」

「わけって、どんなわけ?」

俯いていた陛下が顔を上げて女官長に尋ねます。

陛下に聞かれて、女官長はちよつとつまり、

「それは分かりませんが、まあ、でもよいではありますか?今は

側妃さまにお迎え出来ていいのですから。」

陛下をなだめながら女官長は、なぜ公爵さまは断つてきたのかしらと思いました。側妃の実家には王宮からの援助もあるし、王妃になれるかも知れないのに…。もしかして、ナターリアさまに結婚させたい人が…。いや、まさかそんな話しさは聞いたことがないし。

「確かにいりますけど…。」

「ううう…、陛下は
もう涙ぐみます。」

女官長は、仕方ない陛下だなと思いながら、

「気にされることではありませんよ。それから、お妃は何人もおられたら、それぞれに気遣いをするのも国王陛下の勤めにいりますよ。」

冷静に女官長は陛下を諭します。

陛下を諭しながら、女官長は考えていました。誰かしら?ナターリアさまのお相手は…。噂にもならない相手なんて。

「分かってねナビ、どうしてもダメなの?マーヤ。」

上田遣いに陛下が尋ねます。

「はい。ナターリアさまのお為でいります。万一件のことがないよ
うこと、公爵さまは涙をのんでいじ助言なされたのでいりますよ。」

「分かった。努力するよ。でも、今日は自分の部屋で寝るからね。
陛下はいつも肩を落としてトボトボと自分の部屋へ侍従を連れて歩いて行きました。」

その小さくなつていく後ろ姿眺めていた女官長は、
氣の毒だけど仕方ないわね。だけど、相手は誰だったのかしら、噂
にもならない相手なんて。

確か公爵さまは公爵家の侍女だつたいまの公爵夫人と結婚されたか
ら……。

もしかして、あの、公爵家で逢つたカールとかいう青年かしら?
うへん、でも、いまさら何も起こらないわね。
きっと……。

それから2日後、ナターリアは侍女のアリスと共に王宮に戻つてきました。
父の公爵に後宮の心得を十分にたたきこまれて。

ナターリア戻る（前書き）

たくさんの方にお気に入り登録していただきましてありがとうございます。
励みになります。

ナターリア戻る

「ナターリアさま、もう出発の時間ではないのですか？」
病床の父のロプーヒナ公爵が側に控えていた娘のナターリアに話しかけました。

「でも、お父さま、私、お父さまのことが心配です。もうしばらくここにいはいけませんか？」

俯いたままナターリアが父に頬み込みます。

それを聞いたロプーヒナ公爵は少し困った顔をして、「何をおっしゃいますか。一度決心して、王宮に入られて側妃となられたはず。この父をだしぜなさいますな。『ホツ、『ホツ……』」
そう言つと公爵は苦しそうに咳き込みました。

「お父さま、しつかりなさつて……。」

ナターリアが心配そうに父の背中をさすります。

「大事あつません。それよりも、王宮にて戻られますよつ。」

「お父さま……、私、不安なのです。」

ナターリアが戸惑つたように父にすがりつります。

そんな娘の髪を撫でながらロプーヒナ公爵は娘に語りかけます。「よく聞きなさい、ナターリアさま。父はもう長いことはない。後ろ盾のない後宮での生活はつらいものになるであろう。しかし、だからこそ陛下にとってそなたの存在は安らぎとなるであろう。私にとつてのHレナのよつにな。」

「お母さまのよう…。」

「やうですよ。私には結婚前は公爵家の跡継ぎとして縁談がいくつもあつた。だが、どれも家のための愛のない政略結婚だ。私は両親のように冷ややかな結婚生活は送りたくなかつた。だからエレナとどんなに反対されても結婚したのだ。幸せだった。エレナやナターリアさまには苦労をかけてしまつたが…。」

「お父さま、そのようなことは…」

「気をつかわなくともよい。だから申すのだ。後宮におられる他の側妃方はおそらく政略的なもの。陛下には安らぎになるのはナターリアさまだけであろう。だからそのおつもりでお仕えなさい。」

「お父さまはそれで私に後宮に入れとおっしゃいましたの？」

「やうだ。カールと結婚させてやりたいのはやまやまだつたが、公爵家を支えていく後ろ盾がない以上致し方ない選択だつた。しかし、ナターリアさまは陛下の安らぎとなって生きていければ幸せになれるのではないかと思つたのだ。許してくれ。」

そう言ってロープーヒナ公爵はナターリアに頭を下さります。

「お父さま、私、公爵家のために後宮に入ったと思っていたのに、私の幸せのことも考えて下さつていたのですね。」

不安そうだったナターリアが希望が出てきたように笑顔で父に答えます。

「まあ、幸せになれるかどうかはナターリアさま次第ですがな…。」
ウインクしながらロープーヒナ公爵はナターリアにおどけて話しかけます。

「お父をまつたら…。分かりましたわ。私、幸せになれるよう頑張りますわ。じゃあ、そろそろ行きますわね。」

ナターリアは最後には笑つて父に別れを告げます。

そのとき、侍女がやつてきました。

「失礼します。旦那さま、王宮よりナターリアさまのお迎えが参られました。」

「どうやら、お迎えが参ったようだな。行っておいで。」

少し寂しそうに笑つてロブレー・ヒナ公爵が送り出します。

「はい、お父さま。行つて参ります。私、きっと幸せになりますわ。だから、お父さまも大事になさつて下さいね。」

ナターリアはそう行つて公爵の部屋を出て迎えの馬車に乗りました。

そして、ナターリアは侍女のアリスとともに後宮に戻りました。最初に迎えに出たのは女官長でした。

「ナターリアさま、お戻りなさいませ。」

笑顔で女官長はナターリアを迎えます。

「「おげんよ、女官長。お忙しい中わざわざの迎え、感謝いたします。」

ナターリアは遠慮がちに女官長に話しかけます。

女官長は以前と違つて気遣いの出来るナターリアにハッとした

ました。

「いえ、ナターリアさま。私の役目にはやむこせねば、お駆遣い下
わこますな。それでは、お部屋でおくつねがトわこます。」

「ありがとうございます。それでは、お部屋でおくつねがトわこますわ。それから、落ち
着きましたら、王太后さまにご挨拶をさせていただきたいのですが
…。」

少しはにかんだ笑顔で女官長に話しかけます。

「それは私からお願ひしようと思つておつまましたのに…。では、早
速手配いたします。」

女官長はつれしそうに言つていそいそと
手配に動きました。

そして、善は急げとばかりにその日のうちに王太后との面会の運び
となりました。

「王太后さま、ナターリアさまが女官長とともに参られました。」

それを聞いた王太后は、数日前に帰したナターリアのことと陛下と
言い争いをしたので、逢いたくなかったのですが立場上致し方ない
ので逢うことになりました。

「王太后さま、失礼いたします。本日はナターリアさまが戻られま
したので、ご挨拶に参りました。」

女官長は静かに挨拶をします。

「王太后さまには」機嫌麗しくおめでとげんぞります。ただいま実

家から戻りまして」*ヤ*ります。このたびはおかげさまで父のお見舞いに行くことが出来ましてお礼申し上げます。」

微笑んでナターリアは挨拶をします。

それを聞いた王太后は完璧な挨拶なのに、嫌味を言われたように感じて眉をひそめて、

「麗しくなどないわ。」

「王太后さま、おとなげないお言葉で¹ヤりますよ。」

女官長が思わずとがめます。

それを聞いた王太后は不満げに、

「分かつてあるわ。ナターリアどの、よつ戻られましたな。」

ナターリアは少し怪訝そうに王太后に答えます。

「恐れ入ります、王太后さま。」

王太后は仕方ないと思って、

「ナターリアどの、公爵はお加減はいかがでしたか?」

ナターリアは王太后の機嫌が悪いので遠慮がちに、

「おかげさまにて少し良くなつたように²ヤります。王太后さま、久しぶりに父に逢えてうれしうつ³ヤりました。お礼申し上げます。」

「

それを聞いた王太后は気をよくして、

「それはなによりでしたね。公爵もナターリアどのに逢えて喜ばれましたでしょ。」

「恐れ入ります、王皇太后さま。」

ナターリアは笑顔で王太后に答えます。

その様子を見た王太后は、少し憎らしく思つていたナターリアをかわいらしく思い、

「ナターリアどの、さきほど戻られたばかりで疲れておられるでしょう？今日はゆっくりお休みなさいなさい。また、おいでなさい。」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えまして、これにて失礼いたします。」

ナターリアはそう言つと女官長とともに王太后の居室を下がつていきました。

王太后はナターリアの様子を見るにつけても、シャルロッテとの違いを見せつけられたようだため息をつきました。

アレクセイはすぐにもナターリアどのの部屋に行くだらうけど、ナターリアどのは私の言葉の意味が分かつてくれるかしり…。

王太后はナターリアが去つた後、心中で呟きました。

そのころ、王宮の執務室にいる陛下はナターリアが戻つてきたと聞いて、大喜びでした。

ナターリアがいない間は後宮に足を向けることはなかつたのに、早くその夜にナターリアの部屋を訪れました。

母の気持ちは知らずに…。

ナターリア戻る（後書き）

陛下ははたして公爵の気持ちが分かるのでしょうか…。

ナターリアとの再会

ナターリアが戻ったと聞いた陛下は、執務を早々に切り上げて、いそとナターリアの部屋に向かいました。

「ナターリアさま、陛下が早速、お越し下さいましたよ。侍女のマリアがうれしそうに陛下の訪れを告げます。

それを聞いたナターリアは、

これから本当の後宮生活が始まるのだわと思つて、深呼吸をしました。

た。

そして、少し緊張氣味に陛下を迎えました。

「陛下、ようこそおいで下さいました。」

陛下は愛しい人に何日かぶりに逢えたのでうれしくて、

「ナターリア、逢いたかったよ。元気だつた？」

ナターリアは少し微笑んで、

「はい、少し疲れておりますが元氣で」やがてこまます。陛下もお元氣そ
うでなによりと存じます。」

陛下は少し他人行儀な言い方にひつかかりましたが、気にせず、

「疲れてるの、ナターリア？」

「今日、実家から戻ったばかりなので。」

遠慮がちにナターリアが言います。

「そういえば、母君から聞いたけど公爵のお見舞いに行つてたんだ
よね。」

苦々しい表情で陛下がナターリアに尋ねます。

「はー。王太后さまの『』配慮により父の見舞いに実家に帰らせていただいておりました。」

突然でびっくりした出来事を思いながら不安そうに答えます。

「ナターリア、聞いて欲しいことがあるんだ。もし、また『』ことがあったときは女官長を通じて余に言つてくれないかな？母君にではなくてね。」

アレクセイが言つにくやうにナターリアに言つます。

「は、はー。かしこまりました。」

ナターリアが戸惑つたように答えます。

「ありがとうございます、ナターリア。」

そつ言つと陛下はナターリアを両手で引き寄せて抱きしめました。

「陛下…」

ナターリアはいきなり抱きしめられて戸惑つたよつて上田遣いに陛下を見つめます。

「ナターリア、陛下じゃないよ。アレクセイだよ。」

ナターリアの髪を撫でながら話しかけます。

「アレクセイさま。」

「やー。一人だけのときはそう呼んでね。」

そつ言つとアレクセイはナターリアと口づけを交わしました。

アレクセイと口づけを交わしたナターリアは腕をアレクセイの背中

「回した後、

愛おしそうに小さな声で、

「はー。アレクセイわあ…。」

それを聞いたアレクセイはたまらなくなり、

「ナターリア、寝室に行こう。」

とナターリアの耳にわざわざきます。

「陛下、いえアレクセイさま、あの…。」

少し困惑ったように

言つて、アレクセイの体から腕を少し離します。

「ナターリア、どうしたの？」

少し不満そうにアレクセイが尋ねます。

「いえ、あの…、私、ちょっと疲れでありますので、今日はこれで

失礼させていただいくよろしくですか？」

ナターリアは申し訳なさそうに答えます。

アレクセイは離れていくナターリアの腕をつかんで、心配そうに、「疲れてこるのはじめんね。僕、すぐ逢いたがつたから。」

「いえ、そのようなことは…。」

少し俯いてナターリアが答えます。

「じゃあ、僕、今日は何もしないから。側に寝ているだけだから。それならいいでしょ？」

窺つようにアレクセイが尋ねます。

「いえ、それでは、アレクセイさまに申し訳ござりませんから。」

困ったようにナターリアが答えます。

「誰かに何か言われたの？もしかして、母君が…。」

疑わしそうにアレクセイがナターリアに聞きます。

「いえ、疲れているだけでござります。お許しを…。」

ナターリアは気まずそうに答えます。

ある意味そうだけど、とても言えないわとナターリアは心の中で思いました。

その様子を見たアレクセイは仕方ないと思つて、

「じゃあ、今日は帰るよ。大事にしてね。」

残念そうに言つて、ナターリアの額にキスをして帰つて行きました。

陛下が帰つた後、侍女のアリスがナターリアを咎めるように
「ナターリアさま、どうしてござりますの？そんなにお疲れのよ
うではないようですが…。」

「仕方ないのよ、アリス。王太后さまにござ挨拶に伺つたときに、お
疲れでしうから今日は休みなさい。と言わされたから。」

苦しそうにナターリアが答えます。

「そうでしたか…。」

「それにお父さまにも言われたしね。私には他の妃と違つて後ろ盾
が弱いの。アリス、あなたもつもりで仕えてちょうだい。
すまなそうにナターリアが言います。」

「ナターリアさま、そこまで気にされなくても…。」
アリスはナターリアの決意を戸惑つたように答えます。

「大事なことなの。分かつてちょうどいい。」
真剣な表情でナターリアが頼みます。

「分かりましたわ。そのつもりでお仕えいたします。」
マリアはナターリアの真剣さに打たれて、何が起きててもしつかり仕えようと心に決めました。

そのころ、陛下は自分の部屋に戻りながら考えていました。

なぜナターリアは、私を拒んだのだろう。そんなに疲れているように見えなかつたが…。

やはり、誰かに言われたのだろうか、それとも他に理由が…。

今日は眠れそうにないな…。

はあ…。

朝日が眩しい…。

わづ、朝なのか。結局、あまり眠れなかつた…。

「おはよ〜い〜ます。陛下、お目覚めで〜い〜ますか?」

女官のアンナが寝室に入つてきました。

「ああ、アンナか。おはよ〜。起きて〜る。」

ぼんやりした声でアレクセイが答えます。

ナターリアはもう起きているのだろうか。朝はいつもナターリアがそばにいたのに、今日は…。

「どうしたので〜い〜こ〜ます?ぼんやりなやつ〜…。わあわあ、今日もスケジュールが日一杯詰め込まれてありますから、お支度なさつてくださいまし〜ね。」

アンナがキビキビと叫んで、侍女たちに陛下の支度をやらせるように指示をします。

「ああ…。」

アレクセイは言われても、ぼんやりしたままでした。

ナターリア、逢いたいな…。今日は逢えるかな。

そんなことを考へているアレクセイにかまわず、何人もの侍女に囲まれて支度をさせられてしまいました。

そして、朝食の時間となりました。

陛下の朝食は王宮に住む王族とどることになりました。

朝食の席に支度をさせられたアレクセイがたどり着くと、すでに王族が待っていました。

その王族は、母の王太后と妹のテオドラ王女です。

テオドラ王女は亡き父の寵妃の生んだ王女です。王太后は寵妃が早くに亡くなつたので王女を引き取つて育てていました。

「おはようございます。陛下。」

王太后が微笑んで挨拶をします。

「お兄さま、おはようございます。」

テオドラ王女も続いて挨拶をします。

「おはようございます、母君。それにテオドラもおはよう。一人とも早いですね。」

アレクセイはやうやく席につきました。

「お兄さまが遅すぎるのよ。」

テオドラ王女が笑いながら話しかけます。

「そんなに遅かったか？」

アレクセイがほんやりとテオドラ王女に尋ねます。

それを聞いた王太后がテオドラ王女をたしなめます。

「テオドラ、陛下に対して失礼ですよ。」

テオドラ王女は不満そうに、

「はーい、お母さま。でも、遅いでしょ～もひ、私も腹ペコペコで

…

「悪かつたな、テオドラ。さあ、早く食べよつか。」

アレクセイがそう言つと朝食が始まりました。

朝食には焼きたてのパンやベーコンエッグ、料理長自慢の野菜スープなどが並んでいました。

テオドラ王女のお皿には隣国から献上された最高級のマンゴーで作られたゼリーでした。

「ん～、最高だわ。」

テオドラ王女は満足そうに次々と朝食をたいらげます。

その様子を見たアレクセイは、からかいつゝに、

「テオドラ、そんなに食べると太るぞ。」

「このくらいじゃ太らないわよ。お兄さま、乙女の楽しみを奪わな
いで欲しいわ。ねえ、お母さま？」

テオドラ王女は隣にいる養母の王太后に同意を求めます。

王太后は笑つて、

「そうね、テオドラ。陛下いえアレクセイ、かわいい妹にそんなこ
とを言つてはいけませんよ。」

「母君に言われたら仕方ありませんね。許してくれ、テオドラ。」

アレクセイはテオドラ王女に詫びます。

テオドラ王女は機嫌をなおして、
「分かったわ。ねえ、といひでお兄さまの側妃のナターリアさんの
て、綺麗な方ね。」

アレクセイは飲んでいたコーヒーを思わず吹き出して、
「ぶつ、テ、テオドラ、ナターリアをどいで見たんだ？」その反応
を見たテオドラ王女はおもじろそうに、
「えへへつ、昨日、お母さまに挨拶にいらしたからカーテンに隠れ
て見てたの。」

それを聞いた王太后は飲んでいた野菜スープを吹き出しかけて、
「ゴホッ、ゴホッ、テオドラ！ 覗き見るなんて、王女の品位に欠け
ますわよ。」

「じめんなさい。だつて、お兄さまが夢中になつてる方つて言つから、見てみたかつたんですね。お茶会にはシャルロッテのしか
来ないし…。」

テオドラ王女は首をすくめて答えます。

それを聞いたアレクセイはため息をついて、
「母君、特定の妃を最優になさるとは、王太后として相応しくあり
ませんよ。テオドラのことは申せますまい。」

王太后は氣まずそうに、

「じめんなさい、アレクセイ。でも、あなただつて、ナターリアさん
のところばかり行くではありますか。」

「母君、それはそうですが…。でも、昨日は自分の部屋で寝ました
よ。」

アレクセイは痛いところをつかれながらも答えました。

「あーり、 そうでしたの? てっきり行かれたものと思つてましたが。」

「ナターリアが疲れてるようでしたから。」

不満そうにアレクセイが答えます。

その様子を見た王太后が、
まあ、ナターリアどのは私の気持ちを察して下さったのね。
と思い、機嫌が良くなり、
「昨日、戻られたばかりでしたからね。」

「ねえ、お兄さま、お母さま。私もナターリアどにお逢いしたい
わ。逢いに行つてもいいかしら?」

テオドラ王女は甘えるように一人に尋ねます。

「そうですね。いきなり王女が逢いに行つたらナターリアどのが驚
かれるでしようから、私が今日のお茶会に招待しましょう。」

王太后がテオドラ王女に提案しました。

「本当ですね、お母さま。」

テオドラ王女が嬉しそうに答えました。

「ええ、ナターリアどのは18歳で、テオドラは15歳だからきつ
と話しても合つでしよう。」

王太后は微笑んで話しを決めてしまいました。

その様子を見たアレクセイは、

今日のお茶の時間はナターリアと過ごせないのか
と思い、不満そうに

「待ってください、母君。今日は僕と一緒に過ごすからダメです。」

「じゃあ、お兄さまもお茶会に来ればいいじゃない。ねえ、お母さま？」

テオドーラ王女は兄に不満そうに提案します。

「そうですね。みんなで仲良くお茶をいたしましょう。兄なら妹の頼みを聞きなさいな。」

王太后がアレクセイにたたみかけます。

「仕方ありませんね。絶対行きますからね。」

二人を睨んでアレクセイが不満げに答えます。

こつして、王太后のお茶会にナターリアが招待されることになりました。

ただし、このお茶会にはシャルロッテは招待されていませんでした。いつもは招待されているのですが…。

王女のお茶会？

ナターリアは困惑していました。

いきなり王太后のお茶会に招待されたからです。

正直、あまり好かれてないとは感じていたので尙更です。

「ねえ、アリス。王太后さまはどうして私をお茶会に誘つて下せりたのかしら？」

側に控えていた侍女のアリスに尋ねます。

「私などには分かりかねます。でも、昨日、恐れおおくも陛下を歸されたことを感謝されておられるのではと思ひますが。」

おずおずとアリスが答えます。

「そうかしら。はあ…。なんだか気が重いわ。」

ナターリアがため息をつきながら言います。

「ナターリアさま、そろそろお時間ですわ。参りませんと。」
マリアが急かすように言います。

「もう、そんな時間なの？じゃあ、行きましょうか。」

そう言つとナターリアは立ち上がり、アリスとともに王太后の居室へ向かいました。

そのころ、王太后のもとではテオドラ王女がナターリアがいつ来るかこまかこままかと待っていました。

「申し上げます。側妃ナターリアさま、お越しでございます。」

そのとき、侍女がナターリアの訪れを告げました。

「ナターリアどの」

陛下に良く似たかわいらしい少女が王太后の居室に入ってきたナターリアの前に現れました。

ナターリアは突然現れた少女に少し驚いたものの、

「あの、じきげんよう。どうして、私の名前をご存知なの?」ナターリアは突然現れた少女に尋ねます。

そこへ王太后が現れて、

「テオドラ、おてんばが過ぎますよ。」

と王女をたしなめます。

「お母さま、ごめんなさい。」

テオドラ王女が恥ずかしそうに言います。

「じきげんよう、ナターリアどの。ごめんなさいね、しつけがなつてなくて…。この娘はテオドラ。陛下の妹なのよ。さあ、ご挨拶なさい。」

王太后はすまなそうにナターリアに話しかけます。

「いえ、そのようなことは…。あの、王太后さま、ご機嫌麗しく存じます。本日はお茶会にご招待ありがとうございます。」

王女と聞いてびっくりしながらも、あわてて、ナターリアが挨拶をします。

「はじめまして、ナターリアどの。テオドラです。よろしくね。」

にっこり笑つてテオドーラ王女は挨拶をしました。

「はじめまして、王女さま。お田にかかるてうれしゅ「ハジマコ」ます。

「

ドキマギしながらナターリアも挨拶します。

どおりで陛下に似てると思ったわ。びっくりした。」

「ナターリアどの、私、お兄さまが夢中になつてゐる方だと聞いてお

逢いしたくてお母さまにお願いしましたのよ。」

笑つてテオドーラ王女は話しかけてきました。

王太后は苦笑しながら、

「そつなのよ、ナターリアどの。突然でごめんなさいね。王女が逢
いたいと言つものだから、お茶会にお誘いしましたの。さあ、こち
らにおいでなさい。お茶会をはじめましょう。」

そう言つと、王太后はナターリアと王女を庭園に準備されてゐるテ
ーブルに案内しました。

そこには美味しい紅茶と焼き菓子が用意されていました。

少し緊張氣味にナターリアが席に着くとおずおずと、

「あの、私が作りましたアップルパイを持つてまいりました。よう
しければ、お召し上がり下さいませ。」

言つて、お菓子の入つた箱を差し出しました。

それを見た王太后は、

シャルロッテどのは持つてきたことがなかつたけど気が利くわね。

「まあ、ありがとう。これをナターリアどのが作られたの?」

「はい。実家でよく作つておつましたので…。」
恥ずかしそうにナターリアが答えます。

「陛下が来たらきつと喜びますわね。」

王太后は微笑んで答えます。

「陛下もおいでになられますの?」

ちよつと驚いたナターリアが王太后に尋ねます。

「ええ、来ると喜つてたわ。」

「ナターリアさんは、綺麗なだけじゃなくてこんな美味しいものも作れるんですね。す」「こです。早速いただきましょ「よ、お母さま?」

テオドラ王女は感心しながら、話しかけます。

王太后は仕方ないなと思い、

「じゃあナターリアさんの、王女もいひに喜つてゐ」とですし、早速いただいてもいいかしら?」

「もちろんで、」ゼロコム。ゼロコムお召し上がりをこませ。」

ナターリアは、

喜んでいただいて良かつたわ。

と思い、安心したように答えます。

それを聞いたテオドラ王女は喜んで、

「いただきます。うーん、美味しいです。」
早速食べはじめました。

その姿を見たナターリアは実家にいる妹のことを思い出しました。
いま、どうしているかしら…。

「…どの、ナターリアどの？」

王太后に話しかけられていたことに気づいたナターリアは、ハッと
して、

「失礼しました。何でいらっしゃいますか、王太后さま？」

「昨日、私の言ったこと分かって下さったのね。ナターリアどの、
ありがとうございます。」

王太后は遠慮がちに話しかけます。

ナターリアはどう返事していいか困つて、

「いえ、その、私、昨日は疲れておりましたもので…。」

その様子を見た王太后は微笑んで、

「やさしい方ね、ナターリアどのは…。一人の妃に寵愛が集中して
しまつと後宮の秩序は保てないので。それぞれ後ろ盾もありますから
ね。理解してくれて有り難いわ。」

ナターリアはそれを聞いて、

「恐れいります。気をつけます。」

「さあ、いただきましょ。せつかく作っていただいたなんですから
ね。」

王太后はそう言つとナターリアの作つたアップルパイを食べはじめ
ました。

そして女三人での楽しいお茶の時間を過ぎました。

王太后も最初のお茶会と違つて、王女がいるせいカリラックスしているようでした。

そしてお茶会も終わりに近づいた頃、アレクセイがあわてて飛び込んできました。

「ナターリア、まだいるか？」

庭園に飛び込んで来るなり開口一番、アレクセイが叫びました。

その声に驚いたナターリアが思わず振り向いて、

「陛下、まだあります。」

その息子の様子を見た王太后は苦笑しながら、

「陛下、ここは私の部屋ですよ。私に挨拶はないんですね？」

母の存在に気づいたアレクセイが気まずそうに、

「あ、すみません。母君、いま来ました。間に合いましたね。」

「ぎりぎり間に合いましたよ。ナターリアビのアッブルパイを作つててくれましたね。」

王太后はそう言つと、アレクセイのために紅茶を用意させました。

アレクセイはナターリア手作りのアッブルパイが食べれると聞いて嬉しそうに待っていました。

しかし、時すでに遅し、テオドラ王女が最後の一つを食べてしまつた後でした。

王女のお茶会？

「あら、アップルケーキがないわ……。」

王太后がテーブルの上の菓子箱の中を探しますが、見当たりません。

「お母さま、私がいま食べてるから。」

そう言って、テオドラ王女が美味そうに最後の一つをたいらげました。

それを聞いたアレクセイが、不機嫌そうに、
「なんで食べたんだ、テオドラー！」

「だつて、お兄さまがもう来ないと思つたんですもの……。
テオドラ王女が不満げに答えます。

ナターリアが助け舟を出すように、遠慮がちに、

「あの、こんなものでよろしければまた作つて参りますから……。」

「本当？ 今度は僕だけのために作つてよ~」

アレクセイが甘えるようにナターリアに話しかけました。

「はい。お気に入るかどうかわかりませんが……。
ナターリアがちょっと笑つて答えます。

「つうん。ナターリアの作るものなら何でも氣に入るから、作つて
ね。」

アレクセイがナターリアの手を握つて頼んできました。

「はい……。」

ナターリアが周りの皿を気にしてか、恥ずかしそうに答えます。

「「ホン、ゴホン…。」

王太后がわざとらしく咳をしました。

それに気づいたアレクセイが、

「母君、どうされました?」

王太后が苦々しく、

「どうされたじゃありませんよ。アレクセイ、未婚のテオドラの前ですよ。少し、慎みなさい。」

アレクセイは

「ことこらだつたのに、と不満げに妹を見て、
「テオドラ、いたのか?」

「せつきからこむじやない、お兄さま。」

膨れつ面でテオドラが答えます。

「そつだつたか。悪い悪い…。」

頭をかきながら、アレクセイがぱつがわるやうに答えます。

「悪いじゃありませんわ、お兄さま。乙女の皿の毒な」とはなれ
ないで下さいませね。」

テオドラがアレクセイにたたみかけます。

「乙女つて…。だいたい、テオドラがケーキを食べ過ぎるのが原因
じゃないか。」

アレクセイが負けずにテオドラに言い返します。

見かねた王太后が

「もういい加減になさい、二人とも。ナターリアジのが不安そうにしているじゃありませんか！」

二人がナターリアを見ると、不安そうな顔で俯いています。

「ナターリア、大丈夫だよ。君のせいじゃないから。」

アレクセイがやさしくナターリアに話しかけます。

「ナターリアジの、『めんなさい』。あんまり美味しかったから。テオドラも悪いと思つて謝りました。」

その時でした。
宰相が息を切らしてやつて来ました。

「王太后さま、突然失礼いたします。もしや、『あなたに陛下がおいででは』『ぞこませんか…』。」

「お兄さま、いかがなされました？アレクセイなら『おひら』おひらりますよ。」

王太后がゆつたりと答えます。

宰相の姿を見たアレクセイはまずいと思いながら、『ままずらつ』、『宰相、よくに』が分かったな…。」

「陛下、お捜しあしましたぞ！執務を放り出して、『おひら』おひらでかと思えば…。」

陛下を睨みつけるように宰相が言い放ちます。

「ちよつと息抜きにお茶を飲みに来ただけだ。許せ。」いたずらっぽく陛下が宰相に許しを請うように言います。

「陛下、執務を放り出して来られたのですか…まあ、なんてことでしょう。」

王太后がきつい口調にアレクセイを問い合わせます。

「母君、ちよつと抜け出しだけですよ。お許しを…。」
気まずそうにアレクセイが答えます。

王太后がため息をついて、

「ナターリアさんのことが心配だったのでしょうか。まったく、この子は…。いじめるとしても思つたの？」

アレクセイは頭をかきながら、
「いや、ちよつとうわけではあつませんが。ちよつと心配だったもので…。」

王太后は仕方なさそうに、

「この子はまつたく…。ナターリアさんの立場も考えなさい。お兄さまいえ、宰相どの、連れていってちよつとうだい。」

宰相はそれを聞いて、やれやれと思いながら、

「ありがとうございます、王太后さま。では、陛下参りましょう。」

アレクセイは、

「もう少しだけ…。だめか？」

「ダメです。執務は日白押しで」ぞこますぞ、陛下。王太后さまが仰せられたでしょ？ナターリアさまのお立場もお考えなさいませ。

「

宰相は陛下を追い詰めるように話しかけます。

アレクセイはがっくりと肩を落として、

「ナターリア、またね…。」

そう言って、宰相に連れられて部屋を去つて行きました。

二人が去つた後、ナターリアがポツリと王太后に話しかけました。

「あの、本日は、申し訳ないことでございました…。」

「ナターリアどのせいではないですよ。でも、もう少し慎重に行
動なさい。ここはそういうところですからね。」

王太后はしんみりと話しかけます。

「はい、王太后さま。ご教授感謝いたします。
しみじみとナターリアは答えます。」

「お兄さま、よっぽどナターリアどのことがお好きなんですね。
なんか、寂しいですわ、お母さま。」

テオドラが王太后にポツリと話しかけます。

「そのうちテオドラにも分かるときが来るから。好きな人が出来た
らね。」

王太后がテオドラを慰めるように言います。

「来るのかなあ、そういう時が…。」

分かつたようなわからないような顔つきでテオドラが答えます。

「来るわよ、きっと。ナターリアどの、今日はありがとうございます。
また、おいでなさい。何も持つて来なくてもいいですからね。」
王太后がにつこり笑つてナターリアに言います。

ナターリアはちょっと緊張気味に、

「ありがとうございます。また、伺います。」

「ナターリアどの、またね。」

テオドラは笑つて手を振つて挨拶をしてきました。

「王女さま、楽しゅうございました。これで、失礼いたします。」
そう言ってナターリアは王太后の居室を出て、自分の部屋に帰つて
行きました。

数日後、その噂を聞き付けたシャルロッテが王太后のもとを訪れて
いました。

シャルロッテのお茶

「えっ、シャルロッテどのが？」

朝食会からテオドラ王女とともに後宮に戻った王太后は、侍女から突然のシャルロッテの訪問を告げられます。

何かしら、突然…。

もしやこの間のことを聞きつけたのかしら。

「そう、突然なにかしらね。で、お待ちいただいてるの？」

王太后が侍女に尋ねます。

「恐れ入ります、王太后さま。お話ししたいことがあるやつで、お待ちしますとのことでございましたので。」

侍女が遠慮がちに王太后に答えます。

「分かりました。すぐ参りましょう。」

王太后は微笑んで答えます。

それを聞いた侍女はホッとして、

「かしこまりました。すぐお伝えしてまいります。」

そう言つて、シャルロッテの待つ部屋に向かいました。

そばにいたテオドラ王女が不安そうに、

「あの、お母さま…。」

その様子を見た王太后が、仕方なさそうに、

「テオドラ、大丈夫ですよ。そなたは部屋に戻りなさい。」

「いいんですの？ ありがとうございます、お母さま。私はの方苦手で…。」

テオドーラは明らかに安心した表情で自分の部屋に戻つて行きました。

テオドーラ王女は、王女の前でも養母の王太后にあまえて、わがままに振る舞うシャルロッテが苦手でした。

王太后も大臣の娘であるシャルロッテに遠慮しているようで、なんだか母を取られたような気がするのです。

「王太后さま、突然お伺いしまして申し訳ございません。」

微笑んでシャルロッテが挨拶をします。

「かまいませんよ、シャルロッテ姫の。わあ、お茶をどうぞ召し上がり。」

王太后が笑顔で応対します。

「ありがとうございます、王太后さま。そういうしゃつて下されると思いましたわ。」

にっこり笑つてシャルロッテが答えます。

「ところで、何かお話しがあると伺いましたが？」

ちょっとあまやかせ過ぎたかなと思いつつ、王太后が話しを切り出します。

「はい。先日、ナターリアさまをお茶会に招待なされたと伺いました。」

シャルロッテが少し不満そうになります。

「ええ、王女が逢つて見たいと言つものですからね。」

王太后が、

やはりこの話しだったのか、
と思いつつ答えます。

「しかも陛下までおいでになられたとか…。なぜ、私を招待して下
さいませんでしたの？」

シャルロッテが恨み言を言います。

それを聞いた王太后 が、
まさか王女が嫌つてるからなどとは言へないので取り繕つようと、
「『めんなさいね。ついつかりしましてね。陛下も息抜きに突然
来られて…。それにしても、シャルロッテさんはよくご存知だこと。
」

シャルロッテは、

まさか王太后の侍女に袖の下を渡して、情報をもらつているとも言
えずにさりげなく、

「そうでした。私も陛下にお逢いしたかつたですわ。でも、その
場にいなくて幸いでした。」

皮肉そうに微笑みながら言います。

「それはどうじつことですか？」

シャルロッテを問い合わせるよつて王太后が尋ねます。

「まあ、怖いですわ。王太后さま、ナターリアさまが執務のある陛
下を無理矢理お茶会に誘い出したともつぱぱりの噂でござりますのよ。

」

それを聞いた王太后が、

「まあ、そんな噂が出てましたの…。」

「ええ。王太后さまも巻き込まれて、お氣の毒でござりますわ。ナターリアさまではなく、私をお誘い下さいましたらこんなことになりましたのに。」

シャルロッテがいかにも氣の毒そうに皮肉まじりに話しかけます。

王太后はそれを聞いて、

「ここの中での出来事が外に洩れるとは…。やはり、誰か洩らしているのか、油断がならないわね。」

「お氣遣いありがとうございます。心配して来て下さったのね、シャルロッテ

ど。」

「いいえ、とんでもございません。他ならぬ王太后さまですもの。それより、ナターリアさまには氣をつけられた方がよろしいのではないかと思いまして。」

シャルロッテが王太后を窺いつぶつに話しかけます。

「そうですか。シャルロッテどのお氣持ちは嬉しく思います。」

言いながら王太后は、

油断のならないのはシャルロッテどのがも知れないわね。

噂ももしゃ…。

と考えていました。

シャルロッテは、

さすがはタヌキ婆ね。まあ、いいわ。

「分かっていただいて嬉しいですわ。王太后さま、たまにはお茶会にお誘い下さいましね。最近、お声がかからなくて寂しゅうじやります。」

あまえるように話しかけます。

王太后はそれを聞いて気まずそうに、
「それは悪かったわね。王太后としての立場もあるから許してね。
また、招待するわ。」

「まあ、そうでしたか。また、ご一緒にお茶が出来るのを楽しみにしておりますわ。では、私はこれにて失礼いたします。」
シャルロッテは微笑んで答えると、用がすんだとばかりに立ち上がりました。

「あら、そう。じゃあ、またおいでなさい。」

王太后はそう言って、シャルロッテを見送りました。

さて、そのころ噂の主であるナターリアは流れている噂に心を痛めておりました。

そのため、アレクセイから午後のお茶の時間に来たいと知らせがきて、体の調子が悪いのでと断つておりました。

いや、実際ふさぎ込んで気分がすぐれませんでした。

その知らせを聞いたアレクセイは悲しく、がっかりしました。

仕方ないので、ナターリアの立場を良くするために気が進みませんでしたが、シャルロッテの部屋に行くことにしました。

そして午後のお茶の時間にシャルロッテの部屋にアレクセイが訪れました。

「まあ、陛下。ようこそおいで下さいました。お逢いしてうれしい
ましたわ。」

満面の笑顔でシャルロッテがアレクセイを迎えた。

その様子を見たアレクセイは悪かったなといつ思いにかられて、
「しばらく来られなくてすまなかつたな。いろいろ忙しくてな。」

「いいえ、陛下。いらっしゃって下せつただけでうれしいですわ。さ
あ、お茶をどうぞ。」

そう言って、シャルロッテはアレクセイにお茶を勧めます。

「陛下、こちらは隣国から取り寄せました紅茶でござりますのよ。
陛下に召じ上がつていただきたくて用意しましたの。」

臣僕そろに陛下に勧めます。

それを聞いたアレクセイは、少し嫌な気持ちがしましたが、「そ
うか。せつかくだから、いただこう。」

飲むとともに香ばしい香りがして美味しい紅茶でした。
アレクセイは、ナターリアにも飲ませてやりたいと思い、

「美味しい紅茶だな。少し分けてはもらえぬか?」

それを聞いたシャルロッテは喜んでもらえたと思つて、
「もちろんで、」といいますわ。侍女に用意させますわ。」

「ありがとうございます。すまぬな。」

アレクセイは微笑んで礼を言います。

「いいえ、他ならぬ陛下のおためですもの。」

シャルロッテはについつ笑つて答えます。

そんな話をして、ついにアレクセイが執務に戻る時間となりました。

シャルロッテの失態

シャルロッテはホッと一安心していました。

王妃候補に相応しい後宮でも勢力のある妃に与えられる豪華な部屋を賜っているのに、なぜか肝心の陛下があまり部屋を訪れてくれません。

大臣の娘で王太后のお氣に入りであるはずの私がなぜ…？

やつと訪ねてくれて、紅茶も美味しいと陛下に褒めてもらえたのでシャルロッテは、一安心で、幸せな心地でした。

そんなときでした。

ぽんやりとお茶を飲んでいたアレクセイが、
「もう、戻らなければならない。」

それを聞いたシャルロッテが顔色を変えて、
「陛下、まだいいではありませんか？」

「いや、そういうわけにもいかないから。」

そつけなくアレクセイは言つて、立ち上がりました。

「そんな、久しぶりにお逢いできましたのに…。」

残念そうにシャルロッテが言つて、アレクセイの手をとります。

その様子を見たアレクセイは思いました。

ナターリアは一度もこんなことを言わなかつたな。

言つてくれれば少しぐらい居るのにな…。

「陛下、いいでしょ?...」

シャルロッテがあまえて話しかけてきました。

アレクセイはハツとして、握ってきた手を離して、
「すまない。もう時間なんだ。」

「陛下、お迎えに参りました。」

陛下付きの女官アンナが迎えにやつてきました。

陛下はシャルロッテに悪いと思しながら、

「ああ、こま行ぐ。」

そう言つて立ち去りつきました。

そのとち、シャルロッテがわつとアレクセイの前に立ちまだかり、
「陛下、お待ちをこませーむつ少しだけこらへりして下をこ。

「

その姿にアレクセイも少し驚き、苦虫を潰したような顔で、

「無礼だぞ、シャルロッテ。こまから会議があるので。許せ。」

「それなら、お父をまことに言えば時間などひどくでもなりますでしょ
う? アンナとやら、お父をまに会議の時間を遅らせるよつシャルロ
ッテが申してくると云えてきてちょうだい。お願ひ。」

シャルロッテがアレクセイとアンナに哀願します。

アンナは、女官になつてから妃からこんなことを言われたのは初めてのことなので、どうしてよいか分からず、アレクセイの方を向いて、

「陛下、あの...」

アレクセイはさすがに腹をたてて、強い口調で、
「シャルロッテどの、無礼と申しているであらつて、アーヴィング、アンナ。
」

そう言つて部屋を後にしました。

アンナもあわてて、

「シャルロッテさま、失礼いたします。
」

と慌てて部屋を出て行きました。

残されたシャルロッテは何が起つたかすぐ理解出来ませんでした。

これまで大臣の娘として生まれ、叶わないことは何一つあります
でした。

それがいま、起きてしまったのです。

びつて…。

壁はなぜ床で下をらなかつたの？

お父さまなら何でも私の望みを叶えてくれたの…

シャルロッテは突然と立ち去りしてしまはるかの場を動く」とが出来ませんでした。

会議があるために後宮から会議室に向かつたアレクセイは、
会議の前に女官長を呼び出しました。

「陛下、お呼びと伺いましたが、何用でいらっしゃる?」

アレクセイは不機嫌そうに、シャルロッテの部屋であつた出来事を話しました。

「まつ、そのよつなことが…。」

女官長はさすがに驚いて絶句してしまいました。

「まつたく母君といい、シャルロッテどのとこ…。無礼にもほどがある。女官長、注意をしておくよつ。」

ため息をつきながら、アレクセイは女官長に指示をしました。

「かし」まつました。そのよつにいたします。」

女官長は、困つたことになつたなと思ひながら答えました。

そして、陛下の命令でもあり仕方なくシャルロッテの部屋に行き、注意をしてきました。

そして、案の定、シャルロッテは王太后に泣きました。

「王太后さま、私、くやしゅうじやござます。陛下に少しだけ居てほしかつただけで」やりますのに…。」

涙まじりにシャルロッテが王太后に訴えます。

女官長から一部始終を報告を受けていた王太后は困つた顔をして、「シャルロッテどのの気持ちも分かりますが、それは陛下に對して無礼ではありませんか?」

「王太后さままでそんなことをおっしゃるので、どうぞますか…どうしてナターリアさまだと何も言われなくて、私が言われなくてはならないのぢやありません？」

シャルロッテはくやしそうに王太后に尋ねます。

それを聞いた王太后がハッとして、
「シャルロッテどの、何を言つてるのでですか？」

「とほけないで下さい。ナターリアさまが執務のある陛下をお茶会に連れ出したではありませんか？それなのに、何のお咎めもないのになぜ私だけが…。」

プリプリと怒りながら、シャルロッテが訴えます。

王太后はため息をついて、

「シャルロッテどの、違うのですよ。あれは陛下が勝手にお茶会に来ただけなのです。ナターリアどのはその場にいただけで…。」

「じまかさないで下さいませ。ナターリアどのに逢いにきたのなら、同じことでしょう。」

シャルロッテはかまわざ応戦します。

王太后はさすがにあきれて、

「それならもう何も言ひませんよ。けれど、陛下の機嫌を損ねることのないよう気にをつけて下さいね。陛下には私から執り成しておきますから。」

それを聞いたシャルロッテはホッとして、

「ありがとうございます。気をつけますので、執り成し、よろしくお願ひします。」

その様子を見た王太后は、

私も亡き陛下に居てほしかつたけどそこまでしたことはなかつたわ。
嫌われたくなかったし、妃にあるまじきこと。これでは王妃は務ま
らないかも知れないわね。寵妃にところに通つてもドンと構えてい
ないといけないのに…。

数日後、王太后のお茶会に三人の側妃が揃つて参加していました。

シャルロッテはなぜ一人も参加するのかと不満でしたが、王太后の
意向ですから仕方ありません。

「王太后さま、ご招待ありがとうございます。」

「よう参られました、側妃方。 まあ、こちらへおいでなさいませ。」
王太后が笑顔で迎えます。

「いかがですか、後宮での生活は？ もう慣れましたでしょう。」
王太后が三人に問いかけます。

ナターリア倒れる（前書き）

ちょっと、いじめが始まります。

ナターリア倒れる

午後のひだまりの中、後宮の庭園にしつらえたテーブルで王太后主催のお茶会が行われておりました。

美しい三人の側妃が後宮に入つて以来、一同に会しておりました。

「はい。王太后さまのお導きで慣れてきたよつでござります。」

一番先に口を開いたのは誰あるつシャルロッテでした。

失態を演じたとはいえ、王妃候補としての自負がありました。

「それはなによりです。ナターリアど、オリガどのはいかがですか？」

王太后はこゝやかに尋ねます。

「おかげさまにて、少しずつ慣れてきたよつでござります。」

オリガがシャルロッテをちらりと見て、微笑みながら答えます。

「私も少しずつですが、慣れてきたよつでござります。」

先日のお茶会の陛下の来訪のことを気にしてか、ナターリアが遠慮がちに答えます。

「それはそれは…。後宮は実家とは違い、勝手の許されぬといひですが、慣れると快適なところですよ。そうであるつ、女官長？」

そばに控えていた女官長に王太后は尋ねます。

「仰せのとおりござります、王太后さま。」

女官長は微笑んで答えます。

それを聞いたシャルロッテは自分に対する当てつけかと思い、力チ
ンときて、不機嫌そうに紅茶を飲みました。

その様子を見ていたオリガは、ニヤツと笑い、
「まことにさようで、」と云います。妃として規則は守らねばなりません。
せん。そういえば、過日は王太后さまもナターリアさまの手作りの
ケーキを召し上がられたとか？」

「ええ。とても美味しかったですわ。でも、王女が食べてしまつて
陛下が召し上がられなくて残念そうで。」

クスクスと笑いながら、王太后が答えました。

「まあ、そうでしたか。私もいただきましたのよ、ナターリアさま
がお訪ねいただいた折りにお持ちいただきましたのですから。」
微笑んでオリガが答えます。

それを聞いたシャルロッテが、
いつの間にオリガはナターリアと仲良くなつたのかしら。私の誘い
はのらずに…。

と思い、憎らしくなり思わず、

「ナターリアさまはケーキをお作りになりますの？」

「はい。母とよく父のために作りましたのですから。」
ナターリアは俯いて恥ずかしそうに答えます。

「それはそれは、公爵夫人は以前はお屋敷に仕える侍女でいらした
とか。その名残で作られておられたのかしら？ナターリアさまとと
もにねえ…。」

意地悪そうにシャルロッテはナターリアに尋ねます。

ナターリアは、母を侮辱された気がして唇を噛み締めながら、「そのようなことはありません。母と私は父に喜んでもらいたくて作っただけに」「じゃこます。」

「こずれにしても妃としての振る舞いでは」「じゃこませんわね。いつそのこと侍女におなりになつてはいかがかしら?」

鼻で笑いながらシャルロッテがナターリアに尋ねます。

さすがにそばに控えていた女官長が、

「シャルロッテさま、お葉が過ぎるトトロ」「じゃこます。お慎み下
れこませ。」

「何を申しておる? 菓子を作るのは侍女や料理人の仕事であり。妃に相応しい振る舞いではないから申したまでの」と。やつでは「
ございませんか、王太后さま?」

シャルロッテがそう言つて、王太后に同意を求めます。

「まあ、確かに料理人などの仕事ですからね。しかし、シャルロッ
テどの、そのことは先日、ナターリアどのに注意しておりますゆえ
…。」

苦笑いしながら王太后が答えます。

それを聞いたシャルロッテは勝ち誇つたように、

「まあ、そうでしたか。ナターリアどの、お気をつけにならないと
いけませんわね。」

ナターリアはそれを聞いて落ち込んでしまって、

「はい。申し訳ございません。以後気をつけます。」

「あら、いやだ。ナターリアどの、これでは私がいじめているみた

いじやない。私は妃に相応しい振る舞いをして欲しいだけですからね。」

楽しそうにシャルロッテがナターリアに話しかけます。

「はい。お気遣いありがとうございます。」

ナターリアが俯いたまま答えます。

それを見ていたオリガが、いかにも心配そうに、「大丈夫でござりますか、ナターリアさま？」

「はい…。」

ナターリアが顔を上げて少しばにかんで答えます。

「さあほどから、紅茶もお菓子も手をつけておられませんけど…。よほどお気に病んでおられますの？」

オリガがちらつとシャルロッテを見ながらナターリアに話しかけます。

「いえ、ちょっと体調がすぐれないものですから…。」

ナターリアがオリガに顔を曇らせて答えます。

「ナターリアどの、いくら体調が悪くても王太后さまがせつかくご用意されたものを手もつけられないなんて失礼じゃありません？」

シャルロッテが微笑んで尋ねます。

それを聞いたナターリアはじつしてよいか分からず俯いたまま押し黙ってしまいました。

「いいのよ。ナターリアどの、気になさらなくともいいのですよ。王太后がナターリアを気遣うように話しかけます。」

そつ言わると食べないわけにはいきませんので、ナターリアは、「いえ、大丈夫でござります。せつかくですからいただきます。」そう言つて食べはじめました。

しかし、食べはじめた途端、ナターリアは吐き気がしてきました。ナターリアは口にしたケーキを吐き出すように手を口で押さえてしました。

その様子を見たオリガがシャルロッテをちらつと見ながら、「まあ、大丈夫でござりますか？ シャルロッテさまのことなど気になさらなくともよろしかったのに…。」

「ちょっと、聞き捨てなりませんわね。私のせいだとおっしゃるの？」

シャルロッテが刺々しくオリガに詰め寄ります。

「他にどなたかいたかしら？」

薄笑いを浮かべながらオリガが答えます。

「お一方ともおやめ下さいませ！ 王太后さまの御前ですよ。」

女官長があわてて止めに入りました。

ナターリアはそつ言つと倒れてしまいました。

「ナターリアさま、いかがなされました！」

「ナターリアさま！」

「誰か、寝室にナターリア・ビのをお連れしなさい！それから医者をすぐ呼びなさい！」

王太后がすぐに侍女に指示を出しました。

そして、こんな状況ですからお茶会はお開きとなりました。

「それで、ナターリア・ビの容態はどうなのでしょう？」

王太后がナターリアを診た医者に尋ねます。

「いえ、ナターリアさまは『病気では』ございません。」

医者がニコニコと笑つて答えます。

「病気ではないと？しかし、あのように倒れて…。それにそなた、なぜ笑つておる？」

王太后が咎めるように医者に尋ねます。

「おめでとうございます。側妃ナターリアさま、『懐妊で』ござります。王太后さまには初めてのお孫さまに『ぞこますな。』

医者が笑顔で答えます。

それを聞いた王太后と女官長が思わず顔を見合わせました。

「女官長…。」

「王太后さま…。」

そのときでした。

ナターリアが倒れたと聞いたアレクセイが駆け込んできました。

「ナターリアは大丈夫なのですか！」

入つてくるなりアレクセイはナターリアのこと尋ねます。

その様子を見た王太后はため息をついて、

「陛下、入つてくるなりなんですか。母に挨拶もなしで…。」

「あ、すみません。母君、心配だったものですから。それで、ナターリアは何の病気なのですか？」

アレクセイは恥ずかしそうに王太后に尋ねます。

「まったく…。ナターリアどのは、陛下のせいで倒れたんですよ。王太后はアレクセイに冗談めかして答えます。

「私のせいとはいつたいどういふことなんですか？医者は何と…。顔面蒼白になつたアレクセイは王太后に尋ねます。

「クスクス…。アレクセイ、ナターリアどのはお子が出来たのですよ。」

王太后は笑つてアレクセイに伝えます。

HINの誕生（前書き）

いじめがじわじわと始まります。苦手な方は「注意下さい。」

「本当なのですか、母君…。」

心なしか震えた声でアレクセイが王太后に尋ねます。

「嘘は申しませんよ。なにしろ王宮お抱えの医師の診たてですよ。さあ、ラウル卿、陛下に「」報告なさい。」

王太后が笑顔でそばに控えていた医師に報告を促します。

王宮お抱え医師ラウル卿が進み出て、微笑みながら報告しました。
「陛下に「」報告申し上げます。さきほど、側妃ナターリアさまをご診察いたしましたといふ、「」懷妊なされておられます。おめでたきことにて、お祝い申し上げます。」

それを聞いたアレクセイは、うれしさのあまり絶句してしまいました。
「何と…。ナターリアと私の子が出来たと…。」

「おめでとうござります、陛下。こんなに早く陛下のお子に恵まれるなんて、マーヤもうれしいござります。」
女官長も笑顔でアレクセイに話しかけます。

アレクセイは満面の笑顔で顔を硬直させて、
「ナターリアと私の子供が…。」

その様子を見た王太后が、
「陛下、どうなさいました?」
話しかけますが、上の空です。

王太后がアレクセイに近づき、その肩を握り、
「陛下、陛下！…どうしました？」

そうするとアレクセイはハツと我に返り、
「あ、母君。あまりのうれしさにほんやりしてしまつて…。
といひで、ナターリアはどうだ？」

王太后はやれやれと思いながら、

「隣の寝室で休んでいますよ。ラウル卿、よろしいですか？」

尋ねられたラウル卿は、

「はい。落ち着かれましたので、大丈夫でございます。陛下が参られましたら、側妃さまもお喜びでござこましょう。初産は不安なものござれこますからな。」

「やうか。では、行つてまいるぞ。」

そう言つとアレクセイは、笑顔でスキップをせんばかりに寝室に入つて行きました。

その後ろ姿を見た王太后が不安そうに、
「大丈夫かしら？あの子…。」

「おそらく大丈夫だと思いますが…。でしたら、すまないけれどアンナ、陛下のそばについてもらえませんか？」

女官長がアレクセイに付き添つてきた娘の女官アンナに話しかけます。

「かしこまりました、女官長さま。」

アンナはやう言つと陛下について寝室へと入つて行きました。

陛下が部屋からいなくなつたとき、ラウル卿がおずおずと王太后と女官長に話しかけます。

「王太后さま、女官長さま、恐れながらナターリアさまのことでお話したいことがあります。」

「ナターリアどののこと……？それはどのような……」

王太后がラウル卿に尋ねます。

「はっ、それは……。」

ラウル卿は俯いて何かを訴えるように女官長の方へ視線を送ります。

それに気づいた女官長が、

「王太后さま、恐れながら人払いを願います。」

それを聞いた王太后が周りにいた侍女に目配せをすると、侍女たちは下がつていきました。

「これでよろしいか？それでどのようなことですか？」

王太后はラウル卿に改めて尋ねます。

「恐れ入ります、王太后さま。実は……」

ラウル卿は陛下に内密でと念を押しながら話し始めました。

そのうち、表向きは女官長の指示、本当は王太后の指示でナターリアの部屋の警護に護衛がつくようになりました。

侍女も陛下付きの女官アンナが臨時で仕えるようになりました。

それから時は流れ、ナターリアは難産でしたが元気な男の子を出産しました。

第一王子の誕生です。

アレクセイ一歳、ナターリア一歳のときです。

第一王子の誕生に國中が喜びで沸き立ちました。
ナターリアの実家も王子の誕生に貴族たちが我も先にとお祝いの品々を贈つてきました。

傾きかけた家に見向きもしなかつたのに、貴族たちの手の平を返したような振る舞いに公爵夫人エレナも戸惑いを隠せません。

そんな中、後宮の一室でオリガが報告を受けていました。

「そり、生まれたの？王子とは見事ね。それで、公爵の様子は…。」

「あまり芳しくないよついでござります。いよいよかと…。」

密使がニヤリと笑つて報告します。

「いい仕事をしたよね。お父さまに公爵家との縁談を進めるように伝えてちょうだい。確か、ナターリアさまに妹がいたはずだから…。」

薄笑いを浮かべながらオリガが密使に言います。

「かしこまりました、お嬢さま、いえ側妃さま。そのようでお伝え

します。では、私はこれにて…。」

そつまつと歛使は去つて行きました。

去つたあと、オリガはゆつくつと紅茶を飲み干しました。

そして立ち上がり、

「さて、そろそろおめでたいナターリアさまのお祝いに参りましょ
うか。」

さて、ここはナターリアの部屋です。

難産で生まれたせいかナターリアは体調を崩し、寝室で横になつて
いました。

生まれたばかりの王子は乳母とともに王太后の居室におつました。
そのとき、オリガの訪れを知られました。

「オリガさまが?すぐに迎えに出来なくては…。起こしてちょうだい。

」

そつまつとナターリアは体を起こし始めました。

そばに控えていた侍女アリスがあわてて、

「まだ」無理で」やりますよ。オリガさまには申し訳ございません
が、お帰りいただければよろしいではござれませんか?」

「そういうわけには参りません。側妃さまがここまで参られたのに、

追い返したとあつては…、ゴホッ、ゴホッ」

ナターリアは話していると咳込んでしまいました。

「マリアがそばに寄つて、ナターリアの背中をさすりながら、
『やはりご無理で』『やこまますよ、ナターリアさま。アンナさんもモ
リ思ひでしょ、う。』

一緒にそばに控えていた女官アンナにマリアが同意を求める。

「わうですね。でも、側妃を追い返したといつ噂がたつても困りますし…。ナターリアさま、こちらでご対面になつては いかがでござこましよう。」

マリアがナターリアに寝室での対面を提案します。

「でも、失礼ではなくて？」

不安そうにナターリアがマリアに尋ねます。

「大丈夫でござこまますよ。体調の悪いことはお伝えしますし、私がついておつますから。陛下付きの女官の私の前で妙なことはなさらないでしょ、う…。」

マリアが不安を吹き飛ばすように答えます。

ナターリアがマリアの最後の一言が気にかかり、「妙なこととは…？」

マリアはしまつたと思いながら、笑顔を取り繕い、

「何でもございませんよ。さあ、お迎えのご用意をいたしますので。」

「そう言つて準備のため部屋を出て行きました。

「ナターリアさま、このたびは王太子さま御誕生おめでとうござこま

す。」

オリガが微笑んでナターリアに挨拶をします。

ナターリアは寝室で体を起した状態で、申し訳なさそう、「オリガさま、わざわざおいでいただきましたのこのよつたな状態で申し訳ございません。」

「かまいませんよ。体調がお悪いのでしょうか?出産でよくなる例もあるのですから、どうぞ大事になさつと下されませ。」
眉をひそめて、オリガがナターリアを気遣います。

「お気遣いありがとうございます、オリガさま。良くなりましたが、改めてご挨拶にお伺いいたしますのでご容赦下さいませ。」
弱々しい声でナターリアが答えます。

「ところで、王女をまはじむらにおいでなのですか?」
オリガが窺つようになターリアに尋ねます。

HNの誕生（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

今年も引き続き頑張つて更新して行きます。皆さまがお読みいただいているのでそれを励みに頑張つています。

20話くらいで終わるつもりが長くなつてしまつて…。まだ半分もきてないのに。

「オリガさま、恐れながら王太子さまは王太后さまのもとにおこででござります。」

そばに控えていたマリアがナターリアに代わって答えます。

「あら、やう。ところどなたは見かけぬ顔だが？」
オリガが不審そうにマリアに尋ねます。

「申し遅れました、オリガさま。私は陛下付きの女官マリアドーラでございます。陛下のご指示によりお仕えしております。」
微笑んでマリアが答えます。

「まあ、陛下のご指示で…。よせど、ナターリアさまがご心配なのです。」

オリガがマリアを一瞥して答えます。

そして、ナターリアに向かつて残念そうに、
「王太子さまにお逢いしたかったのに残念ですわ。王太后さまもひどいですわね。王太子さまを引き離すなんて、そう思われません、ナターリアさま。」

「いえ、そのようなことは…。王太后さまは、体の具合が良くなるまで面倒を見て下さっているだけですわ。申し訳ない」とドーラがいります。

弱々しいながらもきつぱつとナターリアが答えます。

オリガはそれを聞いて、

用心深いわね。足を引っ張ることもできやしない…。

「やつでしたか。では、私はこれにて失礼いたします。お大事になさつてくださいましね。」

そう言つとオリガは部屋を下がつて行きました。

「オリガさま、ありがとうございました。」

ナターリアが軽くお辞儀をして見送りました。

「オリガさま、本日はありがとうございました。」

見送りに出た侍女アリスがオリガに挨拶をしますと、

「確か、アリスでしたね？」

オリガが微笑んでアリスに尋ねます。

「はい。覚えていただいてうれしく存じます。」

パツと笑顔になつたアリスが答えます。

「やはりやつでしたか。こちから伺つといつもそばにいらした侍女だと思いましたのよ。今日はそばにはいなかつたのですね。オリガが気の毒そうに尋ねます。

「はい…。陛下から派遣された女官方がおいでですか。」

俯いてアリスが答えます。

「そう。よく仕えてましたのにね、残念ね。ねえ、お見舞いの品を渡すのを忘れてしまいましたの。アリスから渡して下さる？」

そう言つとふところから小さな包みをアリスに手渡しました。

「かしこまりました。確かに渡しました。オリガさまのお気遣いにナターリアさまもお喜びになられますわ。ありがとうございます。」

アリスはうれしそうに包みを受け取った後、お礼を伝えました。

その様子を見たオリガは、

「あ、ねえ、アリス。思いついたのだけど、これは私からでなく、あなたからだと言つて渡してはいかがかしら？」

「えつ、そんな…。オリガさまからの贈り物でござりますのに。」戸惑うようにアリスが答えます。

「いいのですよ。ずっとナターリアさまに親身に仕えていたのですからこのくらいのことは…。お近づきのしるしよ。女官たちと一緒に仕えるなんて大変でしょう？頑張つてね。」

しんみりとオリガがアリスに語りかけます。

それを聞いたアリスは、最近ナターリアのそばで仕えられなかつたせいもあって、うれしくなつて、

「ありがとうございます、オリガさま。この恩は忘れません。」

「そんな大袈裟な…。でも、これは人のいない時に渡した方がよろしいわよ。これは隣国の有名な紅茶で貴重なものですから、誰かに取られるかも知れないのでから、ね。では、私はこれで。」

オリガがアリスに囁くように伝えます。

「はい、お気遣い恐れ入ります。そのようにいたします。これにて失礼いたします。」

アリスが微笑んで答え、オリガを見送りました。

部屋に戻りながらオリガは、

単純ね。うまくナターリアの手元に届くといいけれど…。

「やっと黒い笑みを浮かべました。

「アリスさん、どうしたの？」

見送りに行つたはずのアリスが戻つてこないのでアンナが探しにきました。

アリスは、アンナに見られてはまずいと思い、オリガから受け取つた包みをあわててふところに隠し、

「何でもありません。ちょっとせんやつしていただけです。」

「やうなの。ねえ、ちょっと聞いてみるけど、もしかして、オリガさまから何か渡されなかつた？」

アンナは周りを気にしながらアリスに尋ねます。

アリスはドキッとしましたが、

「いいえ、何もなかつたですわ。でも、どうしてそんなことを？」

アンナは声をひそめて囁くよつこ、

「そう、それならいいけど。実は、ナターリアさまの体調が悪いのは（出産のほかにわけがありそつなの。あ、これは内密だから口外しないで下せ）いね、絶対にね。」

「そんな、ナターリアさまが…。」

アリスは驚いて絶句してしまいました。

「（い）～。まだはつきりしないことだから、だから私たちが（い）～いるのよ。アリスさんも用心してね。さ、中に入りましょ（う）。」

アンナはやう言つと部屋の中に入りました。

アリスも続いて部屋の中に入りつつも、オリガさまのあの包みは渡しても大丈夫かしら…。ふと不安がよぎりました。

さて、ここ陛下の執務室において、アレクセイが宰相と女官長の報告を受けておりました。

「それで犯人の目星はついたのか？」アレクセイが暗い顔をして尋ねます。

「いえ、残念ながらまだ分かつておりません。ただ、護衛や女官がついてからナターリアさまの『ご体調が良くなりました』ことを考えますと、それ以前の出来事かと…。」

女官長が申し訳なさそうな様子で報告します。

「そうか、引き続き調査を続けよ。して、宰相の方はいかがか？」アレクセイが宰相にも尋ねます。

「はい。噂ではございますが、ハリス伯爵がこの国と密貿易を行っているとのこと。かの国の貿易で得られる薬の症状がナターリアさまのものと酷似しているとラウル卿の返答を得ております。」

宰相が苦々しく報告します。

それを聞いたアレクセイが体を震わせて怒り、椅子から立ち上がり、叫びました。

「すぐにハリス伯爵を呼べ！ 真偽のほどを確かめるのだ！」

「お待ち下さい、陛下。」これは噂の段階にすきません。もし、違つた場合はいかがなされます？お気持ちはお察ししますが、ご自重なされませ。」

宰相があわててアレクセイを押し止めます。

「しかし、ナターリアだけでなく、王子に危険が迫つてているのかも知れないのだぞ。国王としても許してはおけぬ……。」
そう叫びながら握った手が震えておりました。

「そうですよ、アレクセイ。慎重に行わなくてはなりませんよ。」
そう言いながら入ってきたのは王太后でした。

「母君、なにゆえこちらに？まさか、王子に何か……。」
アレクセイが突然入ってきた王太后に驚きます。

「いえ、王子は無事ですよ。王太后たる私のそばについて、手を出せるものではございませんよ。」
にこやかに王太后が答えます。

「王太后さま、」機嫌うるわしゅうござります。
女官長と宰相が王太后に挨拶をします。

「挨拶はいいわ。それより本題に移りましょ。」
王太后はそう言つて陛下の向かいの席に座りました。

「それでうまくいきましたか、王太后さま？」
宰相が王太后に尋ねます。

「ええ、お兄さま。アレクセイ、よく聞いてちょうどだい。ナターリ

アドリがこのようになったのは、後ろ盾がないせいよ。それは分かっているわね？」

王太后が話を切り出しました。

「それは分かりますが…。母君、ご心配には及びません。ナターリアのことは私が守ります。絶対に！」

アレクセイが力強く宣言しました。

それを聞いた王太后が、眉をひそめて言い返しました。

「おだまりなさいーーいま、守れてないではありませんか！国王だからと言つてすべてを掌握出来ないのですよ。後宮を甘く見ないでちようだい！」

アレクセイはかつこよく決めたつもりが母に一蹴されてしましました。

一緒にいた宰相も女官長も同意するように頷きます。

アレクセイはすっかりうなだれて、

「ではどうしようと…。」

「だから母の申すことを聞くのですよ。ロプーヒナ公爵どのはもう長くはありますまい。亡くなつた後、跡継ぎもまだ幼いゆえナターリアどのの妹君に婿養子を迎えてはどうかと思いましてね。お相手は宰相どのの次男レオンドのです。これで後ろ盾も出来ます。いい話でしよう？」

王太后は自分の手腕に満足そうにアレクセイに話しかけます。

王太后の提案

この国の主であるはずのアレクセイは母の迫力にすっかりまといつてしまいながらも、

「し、しかし、お考えは分かりますが。母君はシャルロッテどのを推しておられたのではありませんか？大臣が承知するわけが……。」

それを聞いた王太后は宰相に目配せをしながら、

「おほほ……アレクセイ、母に感謝なさいな。この母が大臣の了解を取り付けたました。宰相の長男の夫人はシャルロッテどのの姉君ですよ。縁続きになるのですからね。ロプーヒナ公爵どのもよい選択をなされました。ねえ、お兄さま？」

「はい。レオンも幸せ者になります。ロプーヒナ公爵家の跡継ぎになれるだけでなく、お美しいナターリアさまの妹君と結婚出来るとは……。」

宰相もニコニコと笑つて答えます。

その様子を見たアレクセイは、

母君も宰相も、恩を売ると見せかけてナターリアを権力争いに利用するつもりだな……。

と思いましたが、いかんせん17歳の若き国王には抵抗したところでいい方法があるわけではありません。

女官長が心配そうにアレクセイの様子を窺いますが、口を挟めるものではありません。

しばらく考えたアレクセイでしたが、いまはこの案を飲むしかあるまいと思つて、ため息をつきながら、

「分かりました。ではそのように進めて下さい、叔父君。ナターリアの良き後ろ盾になることを信じていますよ。」

「お任せ下さい、陛下。」この叔父が必ずナターリアさまをお守り申し上げます。」

宰相がうれしさを隠し切れない様子で笑顔で答えます。

「感謝します。では、調査も引き続きよろしく頼みます。」
苦々しくアレクセイが言います。

宰相は、アレクセイの表情の堅さが気になりましたが、第一王子の母であるナターリアの後ろ盾になれたことに浮かれて、まあ、気にするほどのことではないかと思い、

「かしこまりました。最善を尽します。では、これで失礼いたします。」

そう言つと、執務室を後にしました。

宰相が出て行くとアレクセイは王太后にも、
「母君も、後宮におもどりにならなければ、王子のことが案じられますゆえ。」

「やうでしたね。これで一安心ですよ、アレクセイ。では失礼します。」

王太后もやう言つと、後宮に戻つて行きました。

二人が出て行き、執務室にはアレクセイと女官長の一人だけになりました。

「陛下、よろしいのですか？」

女官長が心配そうに陛下に話しかけます。

ダンッ！

アレクセイは、悔しさのあまり、握り拳を机にたたきつけました。
「クソッ。いいもなにもないだろ？ 何も出来ないんだから…。妻一人守れないなんて、なんて無力なんだ…。」

「陛下、お気持ちはお察ししますが、いまは仕方ありませんわ。ですが、これでナターリアさまも後ろ盾を得たのですから。」

女官長は仕方なさそうに答えます。

「ま、確かにな…。女官長、今夜はナターリアの部屋に参るわ。手配してくれ。」

アレクセイが女官長が指示を出します。

「かしこまりました。あの、陛下、差し出がましいようですが、たまには他の側妃さまのものにも参られませ。ナターリアさまへの恨みを買うもとにります。」

遠慮がちに女官長がアレクセイに進言します。

それを聞いたアレクセイは苦虫をつぶしたような顔をして、
「分かってはいるが、ナターリアが心配だし、逢いたいんだ。少し体調が良くなつたら他の妃のところにも顔を出すようにする。しばらく大目に見てくれ、マーヤ。」

そう言ってアレクセイはため息をつきました。

そんなアレクセイを見ていると女官長は句も言えなくなり、
「分かりました。そのお言葉、お忘れなきよつこ。では失礼いたし
ます。」

「そう言つと女官長も執務室を出て行きました。

一人になったアレクセイは、

「国王とは何と不自由な身の上なのだ…。父君のよつには出来ぬな。

」

そして夜になり、他の皇妃をよそにナターリアの部屋にアレクセイがやってきました。

「ナターリアさま、陛下のお越しです。」

「陛下が? 気分がすぐれぬと申し上げたのに…。」「寝室で起き上がりて食事をしていたナターリアが言います。

「はい、申し上げております。でもナターリアさまのことを案じておいでですか?…。」

女官アンナが遠慮がちに答えます。

「そう言わないでくれ、ナターリア。気分がすぐれぬなら、見舞いぐらこさせてくれ。」

そう言いながら、侍女の案内も待たずにアレクセイが寝室に入つてきました。

ナターリアはアレクセイの姿を見ると、戸惑いがちに、

「陛下、ようこそおいで下さいました。ですが、今夜は…。」

「ナターリア、追い返さないでくれ。見舞いに来ただけだ。具合は

どうだ?」

そう言つてアレクセイはナターリアの寝てゐるベッドのそばに用意されてゐる椅子に座ります。

「はい。皆がよくしてくれますわえ、良くなつてきつてゐるよつてド」
「ありがとうございます。」

ナターリアが弱々しく微笑んで、答えます。

「そうか、それは良かつた。王子も元氣に育つてゐるよつだい。」
アレクセイはナターリアの髪を撫でながら言つます。

「王子に逢いたい。どんなに大きくなつたことか…。」

ナターリアがポツリと呟きました。

「そのためにはじつかり食べて、元氣になつてくれ。王子のお披露目もせねばならぬし、な」

アレクセイはそう言つてナターリアを抱き寄せました。

すると元氣だったころに比べると体がやつれて細く感じ、アレクセイはたまらなくなりました。

「アレクセイさま、いかがなされました?」

ナターリアがアレクセイの様子がおかしいのを尋ねてきました。

「いや、なんでもない。あまり、長留しては体にこたわるわえ、もつ行くぞ。しつかり治すがよい。」

アレクセイはそう言つて、ナターリアのおでこにキスをしました。

ナターリアは恥ずかしくなり、頬を赤らめながらアレクセイのシャツをつかんで、

「アレクセイわ、まだ侍女がおりますの……」

その姿を見たアレクセイは年上のナターリアがとてもかわいらしいへ思えて、

「すまぬ。つい、な……。お残惜しいが、また、来る。お休み。」

そう言つとナターリアの頬にキスをしてから、立ち上がりました。

「もうつ！アレクセイさま……。」

ナターリアは恥ずかしいやら、急に体を離されて寂しそやうでプライツと顔を横に向けてしました。

「悪かつた、ナターリア。機嫌をなおしてくれ。もう侍女の前ではしないから。」

アレクセイが頭をかきながら、謝ります。

「本當ですよ、アレクセイさま。」

ナターリアは、上田遣いにアレクセイに訴えます。

「分かつた。それから、いや、また来たときには話そつ。」

アレクセイが言葉を濁して立ち去ります。

ナターリアはいままでそんなことがなかつたので、気になり、「アレクセイわ、何じやこます？」

「いや、たいした話しじはないからまた話そつ。じつかり頼むぞ、アンナ。」

アレクセイはそう言つて寝室をさつてこきました。

残されたナターリアはそれが何なのか、気になりましたがまた話して下さると言わされたからいかと、思いなおして食事を始めました。

それがたいした話しだと分かるのは数日後のことです。

ナターリアの部屋を出た陛下は、外で待っていた女官長、「女官長、オリガどのの部屋に行くべさ。」

女官長は、アレクセイは私室にもどるものと思っていたので、意外そうに、「

「おもどりではなく、オリガさまのところにござりますか?」

「そうだ。確かめたいことがあるのだ。」

アレクセイは暗い顔をしながら歩き始めました。

陛下、オリガのもとへ（前書き）

オリガは実は可哀相な人かも知れません。ナターリアも愛されすぎ
て……。

「陛下、オリガのもとへ

「陛下、お待ち下さいませ。」

女官長が、足早に歩くアレクセイの後を追いかけます。

「恐れ入りますが、くれぐれも」慎重になさこま。取り返しのつかぬことになつては一大事にござります。」

「そんなことは分かつてゐる。」

アレクセイは不機嫌そうに女官長に言ひ返します。

「あ、陛下。忘れておつましたが、ナターリアさまが父君のロブーヒナ公爵さまの見舞いに侍女を遣わしたことの」希望でござりますが、いかがいたしましょつか？」

女官長が思い出したよつて言ひ出すと、アレクセイが足を止めます。

「何、ナターリアが…。さきほどは何も言つておらなかつたが？」思わず振り向いたアレクセイは、怪訝そうに女官長に尋ねます。

女官長は微笑みながら、

「ナターリアさまは眞面目な方ですから、後宮の規則を守つておられるのです。要望のあるときは陛下ではなく、女官長を通じて伝えることになつております。誰かとは大違ひ、とつ、失礼しました。」

た。」

「さうが、ナターリアは体調がすぐれぬのに、父君の心配までしておるのか…。」

アレクセイはため息をついて答えます。そして、ふつと頭を上げて、

「よい、許す。ナターリアが遣わす侍女とともに女官長、そなたも医師を連れて参れ。」

「私もで、『じやこますが…』。」

女官長が困惑したように尋ねます。

「やうだ。第一王子の母の実家に行くのだ。出来るだけのことをしてやりたい。」

「されど陛下、ナターリアさまは王子の母君とはいえ側妃の一人に過ぎません。そのようなことをしてはまた、お立場が危うくなります。いかがでございましょう、私の代わりにアンナを遣わしては？」女官長はナターリアを気遣つてアレクセイに提案します。

「しかし、それでは…。公爵にナターリアを大事にしているという私の気持ちが伝わらぬではないか？」
アレクセイは不満そうに言います。

「それより特別扱いをしては、ロプーヒナ公爵さまがナターリアさまをお案じになられます。以前、『指摘になられましたでしょう?』

それを聞いたアレクセイは、
痛いところをつかれて言葉を失つてしましました。

「それなら、それでよろしく『じやこますね。医師はラウル卿にお願いしますゆえ。』

ラウル卿は王宮お抱え医師の中でも身分が高く、ナターリアの担当医でもあります。

女官長にさう言われては、アレクセイも仕方なく頷きました。
そつして「にしごひに」、オリガの部屋にたどり着きました。

「陛下、じいじでお待ち下さいませ。先触れをしてまつりますので。
女官長はさう言つて、陛下の訪れを告げようとしたら誰かが部屋から
ひきあいました。

「あら、あれは…。確かにどこかで見たよつな…？」
女官長は不審そうに呟きました。

アレクセイはそばにいた護衛の一人に声をかけて、
「さきほどどの者の後をつけ調べよ。」
と指示を出しました。

陛下に気づいた侍女が慌てて知らせて、オリガがやつてきました。

「陛下、ようじこわ越し下下さいました。」

オリガが笑顔で出迎えました。

「突然すまぬな、オリガどの。」

アレクセイが声をかけました。

「とんでもござこません、陛下。おこでいただきわいわいこ
ますわ。」

「オリガさま、いきがさんつるわじゅうびうやこます。わせばど誰が來
ておひれたようですが？」

女官長がさりげなくオリガに尋ねます。

聞かれたオリガはきまずそうに、

「ああ、実家からの使いの者で、」それこまかよ。」

「」実家からの、のよつなお時間で、」それこまか…。」
女官長が咎めるように尋ねます。

後宮では外部からの訪問は夕方までと定められています。

オリガは陛下の前で余計なことを言つと思いながら、
「つい、長居をしてしまつただけです。お許し下さいませ。」

「オリガどの、以後気をつけるよ。」ナターリアは規則を守つて
おるぞ。女官長、このたびは大臣に見よ。」
アレクセイはそう言つて女官長に田配せをしました。

「かしこまりました。では、私はこれにて失礼いたします。
女官長はさうとオリガを見てから立ち去つて行きました。

オリガは、

女官長め、王女の娘である私に陛下の前で恥をかかせて、このままですむと思わないでよ、
と思ひながら唇を噛み締めました。

アレクセイはそれに気づかないふりをして、

「オリガどの、参りうか?」

オリガはアレクセイに声をかけられて、はつとして、
「申し訳ございません、陛下。どうぞお入り下さいませ。」

一人は部屋に入ると侍女がお茶を持ってきました。

「女官長は仕事熱心でござりますね。」

オリガが窺うように話しかけます。

「そうだな。あれの仕事だ、女官長をあまり困らせるでないで。王妃がいればまた違うのかも知れぬが…。」

アレクセイはため息をつきながら、答えます。

オリガは、うまくしまかせたよつねと思いながら、
「はい、以後気をつけます。ところで陛下には、そろそろ王妃を決
められるおつもりでござりますの?」

「まあ、そろそろとは思つてはいるが、特には決めているわけでは
ない。ナターリアの体調もすぐれぬし…。」

アレクセイは紅茶を飲みながら答えます。

オリガはそれを聞いて、やはりナターリアさまを、ふふつ、王妃に
なるまで命があるかしら…。

「そうですね、ナターリアさまのこと、じ心配ですね。早く良くな
つて下さればよろしきのですけれどね。先日、お見舞いにも伺いま
したのよ、陛下。」

「せうか、確かオリガどのはナターリアと親しかったな?」

オリガは微笑んで、

「はい。以前にナターリアさまに手作りのケーキをいただいたこと
もござりますの。」

「手作りの…。オリガビのは食べたのか?」

アレクセイは身を乗り出してオリガに尋ねます。

オリガはちょっと驚いて、

「ええ。ナターリアさまに手土産にいただいて、一緒に食べました
の。それが、何か陛下?」

「羨ましいな…。私は妹のテオドラに食べられて食べてないのだ。」

残念そうにアレクセイが答えます。

「まあ、それは…。お元氣になられたらナターリアさまにお頼みな
さいませ。」

オリガは答えるながら、いつまでナターリアさまの話しがするつもり
かしら…。

と思いました。

「やうだな。ナターリアが手土産を持っていくのなら、そなたも手
土産に何か持つて行つたのであります?」

アレクセイが尋ねてきました。

「さあ、どうでしたかしら?よく覚えておりませんわ。なぜそのよ
うなことをお聞きになりますの?」

オリガが不審そうに尋ねます。

アレクセイは緊張氣味に、

「いや、オリガどのも何か作られたのかと思つてな…。」

オリガはアレクセイが照れてるのかと思い笑つて、

「いいえ。私はあいにく作れませんのよ。確か、お菓子が何かお持ちしたかと思いますわ。私が作ったものをご所望ですか？」

アレクセイは、

「ふう～。氣づかれなかつた。良かつた。
と思ひながら、

「もしかしたらと思つただけだ。氣にしないでくれ。」

オリガはその様子を見て、かわいいと思つて、

「でしたら、私も作りますわ。他ならぬ陛下のおためですもの。樂しみになさつて下さいませ。」

やつ言つてオリガはアレクセイにあまえぬよつてよつかりました。

そのとき、侍女がやつてきて、

「寝室のお支度が整いました。」

「やう、分かつたわ。もつ、さがつていいわ。」

オリガがそう言つて、侍女を下がらせます。

「陛下、今日はお泊り下さりますの？」

オリガはアレクセイにあまえるよつて尋ねます。

尋ねられたアレクセイは、困りながら、
疑われてはまづいし、

「そうだな。ここで休むとしよう。」

それを聞いたオリガはうれしそうに

「うれしうござります、陛下。またすぐお歸りにならるのでは
ないかと不安でしたの。いつも寂しうござりました。今日は一緒
にいらっしゃるのですね。」

その様子を見たアレクセイはなんだか悪いことをしたような気がして、

「すまなかつたな、オリガビの。では、参りつか?」

「はい、陛下…。」

オリガは顔を赤らめて、答えます。

その夜はアレクセイはオリガの部屋で過ごしました。

次の朝、オリガが目覚めたときにはアレクセイの姿はすでにありませんでした。

目覚めたオリガは、隣のシーツを探りましたが、すでに冷たくなっていました。

いつ、帰られたのです。陛下…。

抱きしめては下さるけど、何もして下さらないのですね。ナターリアさまにはお子がいるのに…。でも、きっといつかは…。

陸、オリガのもとへ（後書き）

たくさんの方にお読みいただき、ありがとうございます。
これからナターリアは大変な思いをしますが、応援して下さい。

公爵の病状

翌日、女官アンナと侍女アリスがロブーヒナ公爵家に見舞いに行くことになりました。

寝室から起き上がったナターリアが、アリスだけを呼んで、「お父さまにくれぐれもよろしく伝えてちょうだいね。」

「はい。旦那さまにお伝えいたします。でも、ナターリアさまを残して行くのは心配でござりますわ。」

遠慮がちに微笑んでアリスが答えます。

「心配というわりに顔が笑っているわよ、アリス。」
軽くアリスを睨んでナターリアが言います。

「『めんなさい、ナターリアさま。お屋敷に帰れるので、嬉しくて。ここはなんだか窮屈で…。』」

アリスは首をすくめて答えます。

「冗談よ、アリス。確かにここは窮屈よね。それに王子が出来たあたりから護衛や女官が仕えるようになつて…。わけを知つていて?..ナターリアがため息をつきながらアリスに尋ねます。

アリスは、ドキッとしたが、女官長から強く口止めされているので、「いえ、私は何も存じません…。やはり王子さまの母君であられると待遇も違うのでは?..」

「アリスも他の者と同じことを言つね。せひ、そつなかじら。」

あの、アリスにお願いがあるの。
ナターリアが俯いて言います。

「なんで『ごぞい』ますか？もしや、カールさまの『こと』で……？」

「違うの、アリス。あの、ただ、カールさまがどうしておられるか
聞いて欲しいの。ここでは何も分からなし、私も王子が出来て、
カールさまにはお幸せになつてほしいから……お願い。」
ナターリアが俯いたままアリスに頼みます。

アリスは、ため息をついて、

「どうしておられるか確認するだけで『ごぞい』ますね？よもや、お伝
えしたいことがあるのではないですね？」

「もちろんよ。もう、私には手の届かない人だもの……。でも、お幸
せかどうか知りたいの。お願ひ。」

ナターリアが顔を上げてアリスに頼みこみます。

「ナターリアさま、そういうことでしたらお引き受けいたします。
ただし、このたびだけで『ごぞい』ますよ。」

「ありがとうございます、アリス。」

そして、ナターリアの実家・ロブーヒナ公爵家にアリスたちが着き
ました。

公爵夫人エレナが出迎えました。

「ようこそおいで下さいました。」

「わざわざのお出迎え恐れ入ります。側妃ナターリアさまに代わり公爵さまのお見舞いに伺いました。女官のアンナでござります。」アンナが微笑んで挨拶をします。

「はじめまして、アンナどの。皇妃さまにお仕えいただいているとか、お世話になります。また、側妃さまにお気遣いいただき、恐れおおことでござります。」

「とんでもございません。公爵さまの『様子はいかが』でござりますか? 本田は陛下の『』指示で医師のラウル卿も参りましへどござります。」

「はじめてお目にかかります、公爵夫人。ラウル卿でござります。早速、公爵さまの診察をさせていただきたく存じます。『』様子はいかがで…。」

エレナは恐れ入っているのか、歯切れが悪く、

「はい。それは、恐れ入ります。まずは『あらく…。』

そう言つて、ラウル卿を公爵の寝室まで案内しました。

そして、診察が終わり、ラウル卿が寝室から応接間に青ざめた顔で入つてきました。

「公爵夫人、これはいつたいどうことなのですか…。公爵さまの『』様子はただごとではござこませんぞ。」

尋ねられたエレナは、沈痛な様子で、

「私にもわからないのです。いったいどうしてこうなったのか…あの、ラウル卿、あつていただきたい人があります。カールどの、こちらへ…。」

エレナがそう言つと隣室からカールが入つてきました。

「はじめまして、フレデリカ男爵家のカールでござります。」

「カールどの、こちらへお座り下さるませ。ラウル卿、こちらは田那さまが息子同様に可愛がつてゐる者にござります。この者の話、聞いてはいただけませんか？」

エレナが真剣な表情でラウル卿に言います。

「はい。どのようなことでござります？」

話しを聞いたラウル卿は言葉を失つてしましました。

公爵家のお抱え医師がハリス公爵に弱みを握られて、ハリス公爵の指示で公爵に毒を混ぜた薬を飲ませていたというのです。

「それは事実ですか…。大変なことですぞ。しかし、あの症状はかの国の薬・銀の毒に現れるもの…。誰もが手に入れられるものではないのですぞ。」

ラウル卿はカールに尋ねます。

「はい。私の調べましたところ、ハリス公爵さまはかの国との密貿易をしているようでござります。それからこれが証拠の書類、薬でござります。」

カールが驚くべき事実を伝え、薬も出してきました。

「聞いてもよろしいか、カールどの？」今まで調べておきながら、

なぜ訴えでないのだ？」

ラウル卿は不思議に思つて尋ねます。

「それは、握り潰されたことを恐れたからでござります。お優しい皇妃さまのことでござりますゆえ、使いを寄越して下されたときを待つておりました。」

カールは顔を上げてきつぱりと答えました。

「それから、私は罪を犯してしまいました。かの毒の解毒剤をわざほど手に入れました。それは闇のルートで…。許されぬことでござります。」

「何を言ひのです、カールジの…旦那さまのためにしたことでは…。」

エレナが慌てて庇います。

「カールジの、その解毒剤はどうなり…？」

ラウル卿は驚きながらも尋ねます。

「はい。ござりません。」

カールはやうやく言つてから解毒剤の入った瓶を出しました。

「では早速、公爵さまに差し上げなくては。手遅れになつては一大事でござります。」

ラウル卿はそう言つて、解毒剤を公爵に飲ませました。

するとビビりてしまつ。今にも危うかつたロブー・ヒナ公爵がみるみる回復して、血色も良くなつていきました。

「間に合つたようですが、カールジの。お気になさるな。罪は罪だ

けれど、公爵さまのお命を救われたのですからたいした罪にはなりませんまい。これでナターリアさまも救われます。」

ラウル卿もゐる（前書き）

お待たせしました。

ラウル卿もいる

公爵の寝室で衝撃の事実を知ったカールと公爵夫人エレナは驚きのあまり声も出ませんでした。

「それはどうじゅう」と…。側妃さま、いえナターリアさまの御身に何があつたのですか？」

公爵の枕元に立っていたエレナが震える声でラウル卿に尋ねます。

「それは、その…。これは内密のお話しながらも申し上げてよいものか…。」

ラウル卿は、しまつたという顔で答えます。

カールは、震えるエレナを支えながら、
「ラウル卿さま、恐れながら公爵夫人には聞く権利がござります。内密のことゆえ、口外はいたしませぬゆえ、どうかお話しいただきたく存じます。」

ラウル卿は仕方なく困惑しながらも話しがれました。

ナターリアが銀の毒によつて体を病んでいることを。

「そんな、ナターリアまでそんなことになつてしまつてしまつて…。」

エレナは絶句すると、ショックのあまり氣を失つてしまいました。

「公爵夫人！」

「奥さまー。」

ヘレナは隣室に運ばれました。

その一部始終を見ていたナターリアの妹のメアリーは憤慨するよつに尋ねます。

「どうしてなのですか？お父さまだけなく、お姉さままで…。」

「確かに、メアリー嬢でございましたな。申し上げにござることながら、後宮においてはこのたびのことを行き過ぎではござりますが、国王陛下の寵愛をめぐつて争い、とせ起きるのせよべあることなのでござります。」

ラウル卿は真面目そうに答えます。

「それは私にも分かりますけど、毒殺なんて…。お姉さまは我が家を立て直すために後宮に入つただけで、陛下のこの寵愛なんて望んでもおりません。」

メアリーは興奮して尋ねます。

ラウル卿はため息をつきながら、
「この事情はお察しいたしますが、姉君のナターリアさまは陛下のこの寵愛を独占されて第一王子をお産みになられました。その存在 자체、他のお妃にとつては脅威にござります。」

メアリーは怒りに震えながら、

「だからお姉さまのために私が宰相さまのご次男を婿養子に迎える決心をしましたの。陛下はお姉さまのために何もして下さらないのですか？カールどの方がよっぽど…。」

遠慮して部屋の片隅にいたカールがおもむろにメアリーに近づいて、「メアリーさま、それは国王陛下にもお立場がござりますゆえ、致し方ない」ともいいます。」

「分かっているわ、そんなこと…。」

メアリーは歯を噛み締めてつぶやきます。

「でも、ラウル卿、この解毒剤があればお姉さまは助かるんでしょう？」

「もちろんでござります。早速、王宮に戻りましてナターリアさまに捧げなくてはなりません。カールどの、恐れいりますがこのこと陛下にご報告する必要上、一緒におりでいただけますかな？」

ラウル卿は立ち上がり、カールに頼みます。

カールは緊張しながらも、

「はい。罰は覚悟しておりますゆえ、どうぞお連れ下さい。」

メアリーはそれを聞いて、

「それなら私も行きます。ラウル卿、カールどのに罪はありませんわ。すべては我が家のためにしたことです。」

ラウル卿はやれやれという顔をしながら、

「その心配はご無用にござりますよ。公爵さま、皇妃さまをお救いするためですから、たいした罪にはなりますまい。私からも陛下にとりかなしましょう。メアリー嬢、ご心配なさいませんよ。」

「そうですか。でも、お姉さまのお見舞いに伺いたいし、私もお連れ下さいまし。」

メアリーはなおもラウル卿に頼み込みます。

「仕方ありませんな。」一緒に参りましょう。ただ、公爵さまのことが気がかりですから私の助手を残させていただきます。よろしいですかな？」

ラウル卿は微笑んで提案します。

「ありがとうございます。ラウル卿、お父さまにもお気遣いいただき感謝いたします。」

メアリーはそつと淑女の礼をラウル卿に捧げました。

「おやおや、わきまえで憤慨しておられたのに現金なお方ですね。さあ、参りましょう。」

ラウル卿は笑って答えます。

「ラウル卿、そんなじわるおつしゃらないで下さいます。メアリーは少し拗ねたように言います。」

「冗談でござりますよ。失礼をいたしました。」

ラウル卿はお辞儀をして答えました。

こうして公爵家を辞して、ラウル卿や女官アンナたちは王宮へと戻りました。

大変なお土産とともに…。

王宮にもどるとアレクセイはナターリアのもとにいました。

女官アンナとラウル卿はナターリアの部屋に向かいました。

「ただいまもどりました。陛下、ナターリアさま。」

アンナが代表して挨拶をしました。

「もどつたか？」苦労であった。して、公爵の、様子はいかがであった？

アレクセイはラウル卿に尋ねます。

そばにいたナターリアは具合が悪いのか、顔色が悪く、横になつたまま心配そうにしています。

「恐れながらお答え申し上げます。ご心配には及びません、陛下、ナターリアさま。公爵さまのおかげんは快方に向かつておられます。念のため、助手を残してまいりましたが。」

ラウル卿は少し緊張しながら答えます。

「それは何よりだ。よかつたな、ナターリア。」

アレクセイはナターリアの髪を撫でながら答えます。

ナターリアはそれを聞いて微笑んで弱々しい声で、

「はい、陛下。安心しました。ありがとうございます、ラウル卿。」

「恐れ入ります。ところで、ナターリアさまのお体に良いお薬を手に入れました。どうぞお試し下さいますよ。」

ラウル卿はそつとあの解毒剤をナターリアに捧げました。

アレクセイはナターリアのためになるなりと、その薬を飲ませますと、公爵のときと回じよにみるみるつむに顔色が良くなつていきました。

アレクセイもこれには驚き、

「これは、なんといつ……。」

「効いたよつでござりますな。ナターリアさま、どうぞおつかれ

おやすみなさいませ。」

ラウル卿は微笑んでナターリアに話しかけます。

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

ナターリアはそう言つと寝息をたてて眠りはじめました。

「陛下、内密で逢つていただきたい方がござります。お時間をいた
だけませんでしょうか？」

ラウル卿は真剣な表情でアレクセイに頼み込みます。

ラウル卿もいる（後書き）

次はオリガの真実が明らかになるかも知れません。

「内密で、か…。それはどのよつた者なのだ？」

アレクセイは怪訝そうに尋ねます。

「恐れながら陛下、ロブーーヒナ公爵をまならびにナターリアをまに
関わることにござりますれば何卒お通りを願い上げます。
ラウル卿は声をひそめて窺つよつに答えます。

「公爵とナターリアに關わる……それは公爵家で何か起きてたとい
うことか？」

アレクセイは思わず椅子から立ち上がって尋ねます。

「はい。じこでは申し上げかねますが、お逢いいただければすべて
分かります。」

ラウル卿が平伏してアレクセイに答えます。

「分かつた。内密の話しなら、私室で聞いひ。アンナ、女官長と寢
相を呼んでくれ。」

アレクセイはそつとナターリアの部屋から出て行ひました。

そのとき、それまで黙つて部屋の片隅で控えていた侍女アリスが、

平伏しながら思いつめた表情でアレクセイに話しかけます。

「恐れながら、じ無礼を承知で申し上げます。」

それを見たアンナが慌てて始めます。

「アリスさん、じ下問もないのに陛下に申し上げるなんて…。」

「いや、よこ。何か話しがあるのであります。申してみよ。」

アレクセイは最愛の妃ナターリアの侍女だからと大目に見ます。

「感謝申し上げます、陛下。実は、先日皇妃オリガさまより紅茶をいただきました。」

アリスは緊張しながら話し始めました。

「何、紅茶を？それはこいつの話しだ…。」

「はい。先日、オリガさまがナターリアさまのお見舞いにおいでいたときドジョウいました。」

「アンナ、このこと報告を受けておらぬが？」

アレクセイは怪訝そうな顔で、そばに控えていたアンナに尋ねます。
聞かれたアンナもわけがわからない顔で、
「いえ、オリガさまからは何も受け取ってはおりません。アリスさん、どうぞことなんですっ。」

「申し訳ございません、マリアさま。お見送りのときにいただきましたので、私しか知らないことなんです。」

申し訳なさそうな様子でアリスが答えます。

「ではあのとおり…。でも、どうして何もお聞きてくれないので？アンナは咎めるように尋ねます。

「あの、オリガさまがナターリアさまのそばでお仕え出来ない私を気遣つて下さったからです。お見舞いに持つてきただけど、あなたからだと言ってナターリアさまに差し上げなさいとおっしゃって下さって、でも、私、ナターリアさまがこんな状態だとアンナさまから

伺つて、渡してよいかどうか分からぬので…。アリスは最後にはくちごもつてしましました。

それまで黙つて聞いていたアレクセイが、「いい判断だ、アリス！して、その紅茶はどこにある？」

「こひらにアリヤります。どうぞ陛下。」

アリスはおもむろにふとこりから包みを取り出しました。

「この紅茶、もうつてこゝへだ。よこな？」

アレクセイはそう言つてアリスから包みを受け取るとラウル卿に田配せしながら手渡しました。

「ラウル卿、分かつてこるな？その紅茶の成分を調べるのだ。では行くぞ。」

「かしこまつました、陛下。」

ラウル卿は受け取ると、陛下とともに部屋を出て陛下の私室に向かいました。

陛下の私室に着くとまもなく女官長と宰相が入つてきました。

「陛下、お呼びと伺いましたが何用で」やりますか？」

「ああ、呼び出しだすまない。実はロブーヒナ公爵の見舞いに遣わしたラウル卿が内密で話しがあるというのでな。そなたたちにも聞いてもらつた方がよいと思つてな。」

アレクセイがそう言つて一人を迎えます。

二人は顔を見合させてあと、女官長が、

「ラウル卿が……公爵さまに何かあつたのですか？」

コンコン

「ラウル卿でござります。お連れして参りましたので、お通通りを願い上げます。」

「来たようだ。入るがよい。」

アレクセイはそう言つて入室を許可します。

「失礼いたします、陛下。こちらは、ナターリアさまの妹のメアリ一嬢、そしてフレデリカ男爵家のカールどにござります。」

「お通通り感謝いたします。陛下におかれましては、ご機嫌麗しく恐悦至極に存じます。カール・フレデリカでござります。」

カールは緊張しながらアレクセイに挨拶をします。

「はじめてお目にかかります。ナタリー・ロブーヒナでござります。」

ナタリーも少し緊張しながらアレクセイを真つすぐ見つめます。

アレクセイは意外な人物が現れたので戸惑いがちに、

「よく参つた。さあ、こちらに座りなさい。ところでラウル卿、この者たちをひきあわせたわけを聞きたいのだが？」

「恐れ入りますが、まずはこちらをござんいただきたく存じます。」

ラウル卿が差し出したのはカールが苦労して手に入れたハリス伯爵

に関する資料でした。

そしてハリス伯爵がかの国と密貿易をしている事実と公爵がかの国の銀の毒に侵されたことを伝えました。そして解毒剤をカールが密貿易にて手に入れたことも…。

「何ということだ…やはりハリス伯爵の仕業だったのか？宰相、すぐにハリス伯爵を捕らえるのだ！罪状は密貿易のと公爵の毒殺未遂だ。」

アレクセイは怒りを抑え切れずに宰相に叫びながら命令を出しました。

メアリーの怒り

「陛下、落ち着いて下さい。密貿易の証拠はここにあります。口
ブーヒナ公爵どのに關することについては確証がありますぞ。」
宰相は驚きながらも陛下をなだめます。

「いや、証拠ならある。先日、オリガどののもとを訪ねていた者を
護衛につけさせた。その者はハリス公爵に金をもらつてロープーヒナ
公爵家に出入りしていた医者だ。分かつたか、宰相？」
アレクセイは宰相にたたみかけます。

「では、オリガさまもこの件に関わっているのですか？もしや、ナ
ターリアさまのことも…。何と言つことだ！」
宰相は愕然とします。

「残念ながらそういうことだ。ラウル卿、さきほど紅茶はいかが
であった？」

アレクセイは厳しい表情で尋ねます。

「恐れながら、さきほどの紅茶には銀の毒が入つておりました。オ
リガさまの関与は間違いないかと思われます。」

ラウル卿は汗をかきながら答えます。

それを聞いていたメアリーはわなわなと震え、怒りを抑え切れずに、
「陛下、そこまで分かつていながらなぜお姉さまを助けて下さいま
せんでしたのか？」

アレクセイは最愛の妃ナターリアそつくりの妹に責められて、動搖
を隠しきれず、苦しそうに、

「すまない。はつきりとした確証がなく動けなかつたのだ。決して、ナターリアを助けなかつたわけではないのだ。」

「そんな言い訳聞きたくありませんわ！」

メアリーはそつまつと、アレクセイを睨みつけます。

女官長は慌てて、

「メアリー嬢、あまりに陛下に対し無禮でござりますよ。許されないことですよ。また、陛下にはお立場もござりますゆえお察し下さいませ。」

「いや、よ。メアリー嬢の言つても一理ある。しかし、なぜこちらメアリー嬢まで来る必要が？」

アレクセイはふと躊躇に思つて尋ねます。

「恐れながら私から申し上げてもよろしいでしょうか？」

遠慮がちにカールが口を開きます。

「よい、許す。申してみよ。」

アレクセイは発言を許しました。

「感謝申し上げます、陛下。実は公爵さまをお救いするために解毒剤を手に入れるため、私も密貿易をいたしました。許されぬことで、罰は覚悟しております。メアリーさまは私を庇つておいでになりました。申し訳ないことでござります。」

カールは平伏したまま、苦しげに話します。

ラウル卿は慌てて平伏しながら、

「陛下、そのおかげでロブーヒナ公爵さまだけでなくナターリアさまも助かつたのでござります。どうか寛大な処置をお願い申し上げ

ます。」

続いてメアリーも、なおも陛下に厳しい視線をぶつけながら平伏します。

「そうなのです。この罪は我が家のためにしたことです。カールどのを厳罰にされるのは納得できませんわ。その罪はわたしが請け負います陛下。お願いたします。」

それまで黙つて聞いていたアレクセイは、微笑んでカールの手を取り、

「そんなことか…。心配いたすな。公爵や皇妃の命を救つたのだ。罪どころか礼をしたいところだ。ありがとうございます。そうであらう宰相？」

聞かれた宰相は苦々しい表情で、

「はっ。恐れ入りますが陛下、罪は罪でござります。そういうわけには参りません。公爵どの、皇妃さまをお救いしたことで、良くて謹慎ぐらいはしていただきませんと。周りに示しがつきません。よろしいかな、カールどの？」

それを聞いた陛下は眉をひそめて、

「なんとかならぬのか、宰相？」

「なりません、陛下。本来ならば、懲役刑や男爵家の浮沈に関わる罪にござりますぞ。」

宰相が厳しい表情で言います。

陛下はため息をついて、

「仕方ないか…。すまぬな、カールどの。」

それを聞いていたカールは、平伏して、
「とんでもないことだ」ぞこります。陛下におかれましては、寛容な
「配慮をいただき感謝申し上げます。」

「よのしづう」ぞこましたね、カールど。それにナタリー嬢もわ
ざわざこらした甲斐が「ぞこしましたな。」
女官長は安心したように一人に話しかけます。

「ありがとう」ぞこます、女官長さま。」

カールは安心したようにふうーと、息を吐いて答えます。

「ありがとう」ぞこます。女官長さま、お父さまもお姉さまも安心
しますわ。」

ナタリーはナタリーの怒りとせつてかわって微笑んで答えます。

それを聞いていたアレクセイは不審そうな顔をして、
「ひとつ聞いてもよいか、カールど。なぜそこまでして助けてく
れたのだ? わが家のことではなく、他家のことである?」

カールは平伏したまま遠慮がちに、

「恐れながら申し上げます。ロブーヒナ公爵さまは至らない私を、
幼いころよつ息子のよつにかわいがつて下せこました。その「恩」に
報いるために」ぞこります。」

「やつであつたか。それにしてもなかなかそこまでできないが…。
どちらにしても礼を申すぞ。といひで、幼い頃からとはナターリア
とも仲が良かつたのか?」
アレクセイはまだ不思議そうな顔をして尋ねます。

「恐れながら、何もわからない幼い頃の話でござります。皇妃になられたいま、親しいなどおこがましいことでござります。」
カールは恐縮しながら体を震わせて答えます。

「そう、かしこまるな。カールどのはおかしな人だな。皇妃と親しくなりたいとツテを頼つて繋がりを求める人が多いというのに、そのようなことを…。公爵がかわいがるのも分かる気がするな。」
アレクセイがそうカールに言って、ポンと肩を叩きました。

それを見ていたナタリーは、

「陛下、カールどのはいじめないで下さい。カールどのは私たちを助けて下さった恩人でございます。陛下よりもよっぽど頼りになります。お姉さまもカールどとの結婚なされば、あ…。」

周りの視線を感じたメアリーは
しまった！言い過ぎたかしら

と、気まずそうに、

「も、申し訳ございません。少し言い過ぎました。お許し下さいませ。」

しばらくの沈黙のあと、宰相が笑い出しました。

「クッ、クッ…。メアリー嬢はお気の強いお方であられるな。陛下にここまで言えるとは。頼もしい令嬢だ。レオンはいさか頼りないところがありますから、よろしく頼みますぞ。」

オリガの処罰

そう言つと宰相は、手を差し出して来たのでメアリーは遠慮がちに握手をしました。

「お、恐れ入ります。宰相さま…。お恥ずかしゅ「う」やれこます。」メアリーは急に恥ずかしくなり、冷や汗が出てきて俯いてしまいました。

「おや、かわいらしことにいもおありのようですね。」
宰相は微笑んで答えます。そして、陛下の方へ向き直り、「ところで陛下、オリガさまのことはいかがなされるおつもりですか?側妃とはいえ、こじまでのことをなされたお方です。」

「それは、こじまでは仕方ですから…。女官長、オリガどのをナターリアを害した罪で拘束せよ。ただちに行え。」

アレクセイは苦々しい表情で、躊躇しながらもそつ命令を出しました。

「承りました、陛下。ただちに兵士を引き連れて拘束して参ります。では、これにて失礼いたします。」

女官長は、お辞儀をして命令を受けると、部屋を辞すると兵士を連れて後宮に向かいました。

続いて宰相も部屋を出てオリガの父のハリス伯爵を捕らえました。

そこに残されたメアリーは、アレクセイに向かい、

「わわほじは」無礼をいたしました、陛下。お詫び申し上げます。お辞儀をして謝罪しました。

「いや、眞にしておらぬやえ。それより、せつかく来たのだ。ナターリアを見舞つてくれ。しばらくは王宮も騒がしいだらうから…。アレクセイはため息をついて、遠い田を見ながらメアリーに話しかけます。

メアリーは頭を上げると遠慮がちに、

「一つお聞をしてもよろしこですか、陛下？」

「何かな、メアリー嬢？」

アレクセイは微笑んで尋ねます。

「わわほじ女面に命令を出されるとモ、躊躇わざわらひやうでしたが、なぜでござりますか？」

メアリーはアレクセイの田を見据えて尋ねます。

「それは、このよつな不祥事は表にしたくなかったからだ。まして、オリガミのは、私が即位するにあたつて協力してくれた数少ない王族だからな。」

アレクセイは苦々しそうに答えます。

「たとえ、お姉さまやお父さまの命を危うくする」とをられてですか…？」

メアリーは眉をひそめて尋ねます。

「それは、やすがに許しておけぬ」とやえ、命令を出したのだ。わかつてくれ、メアリー嬢。私には、国王としての立場がある。けれど、ナターリアを大切に思う気持ちは嘘ではない…。」

アレクセイは困った顔をしながら答えます。

「そんなことは、私には分かりません。私はお姉さまのために婿養子のことをご承したのですよ。それなのに、陛下がこのさき、お姉さまを不幸にすることは許しません…。」

メアリーは最後には涙ぐみながら陛下に訴えます。

これにはアレクセイも驚き、「分かった。約束するから、安心してくれ。」そう言つて、メアリーの肩をポンと叩きました。

「本当にありがとうございますよ。お姉さまを幸せにして下さるかもしれません。お願い申し上げます。」

メアリーは涙を拭いながら、やつぱりお辞儀をしました。

メアリーも部屋から去つていき、アレクセイは私室で一人になりました。

「幸せに、か。肝心のナターリアは私を愛しているのか分からぬのにな…。」

アレクセイは寂しそうに呟きました。

後日、拘束されたハリス伯爵一家は罪を問われて爵位を失いました。オリガも側妃の位を剥奪されました。

ただ、王族ゆえ命は助けられ、遠く監獄に送られることになりました。

た。

オリガの処罰（後書き）

文才のない私の話しひをたくさんの方に、お読みいただきありがとうございます。

お気に入り登録ありがとうございます。
これから妹のメアリーも活躍します。
早くハッピーエンドにしたいです！

お待たせしました。

ナターリアの驚き

「お姉さま、具合はいかがでいらっしゃいますか？」
メアリーがベッドで休んでいた姉のナターリアに優しく話しかけます。

それに気づいたナターリアが、

「メアリー、どうしてここにいるの？」「これは夢なの？」
ぼんやりと尋ねます。

メアリーは姉の側にそっと近づいて、

「夢ではございませんわ、お姉さま。お見舞いに伺いましたのよ。」
そう言つて微笑みます。

「王宮までお見舞いに来てくれたの…。誰が起こしてちよつだい。」

ナターリアは、側に控えていた侍女に体を起こしてもらいます。

侍女はそれまで弱々しく微笑むだけだったナターリアが満面の笑顔で起き上がってきたのでとてもうれしくなつて、

「ナターリアさま、ご無理をなさいませんよう！」
お茶をご用意して参りましょうか？」

ナターリアに尋ねます。

「ええ。お願いするわ。」

ナターリアは上着を羽織つてベッドから起きると微笑んで答えました。

控えていた侍女たちがお茶の用意をするために寝室から出て行くと、ナターリアとメアリーの一人が残されました。

「それにしてもよく来てくれたわね、メアリー。みんなは元気なの？陛下がラウル卿を遣わしてくれたから、お父さまの具合も良くなつたのかしら？」

ナターリアが微笑んでメアリーに尋ねます。

「ええ、元気にしてありますわ。お父さまもカールどのお陰でもちなおしましたわ。お姉さまも良くなられたようで…。」

メアリーは含んだように姉に答えます。

「カールどの… – それはどうじうことなの、メアリー？お父さまはお加減は良くなられたとラウル卿から聞いたけれど、カールさまとどきのような関係があると言うの？」

ナターリアは久しぶりに聞く初恋の人の名前に動搖しながらも、怪訝そうに尋ねます。

「もしかして、お姉さまは何も」存知ないの？お父さまのことも、お姉さまがお加減が悪い理由も、ハ里斯伯爵のことも…？」

メアリーは驚きを隠し切れずに姉に聞き返します。

「それはどういう意味なの、メアリー？私はただ産後のひだりが悪いだけなのに…。ハ里斯伯爵さまが何をされたといつの？」

ナターリアは語氣も強く妹に尋ねます。

「陛下はお姉さまに何も伝えてないのね。もしかして、私が婿養子を迎えることも聞いてらつしゃらないの？」

メアリーは驚きを隠し切れずに答えます。

ナターリアはあまりのことに呆然としてしました。

顔色が変わり、いつたい何が起きているのか…。ガタガタと指先が震えてしまいました。

ナターリアは震えた指先でシーツをギュッと掴むと、深呼吸をしました。

「メ、メアリー、何が起きているのか教えてくれないかしら…。私にも関係あることなのでしょう?」

姉のただならぬ様子にメアリーは、なんと言つていいかわからなくなりました。

けれど、姉も知つておくべきことだと思い、意を決してメアリーは伝えることにしました。

「あ、あの…、お姉さま。私から伝えていいものかわからないのだけれど、お姉さまに関係する大変なことが起きたの。落ち着いて聞いていただけます?」

「分かつたわ。話してちょうだい。」

ナターリアは緊張しながらも、姉らしく鷹揚に答えます。

そして、メアリーが話すことを聞き漏らすまいと耳を傾けました。

「実は…。」

メアリーは驚きの事実を話しました。

「そんな、そんなことって……！」

ナターリアは、あまりのことにガタガタと体が震えてきました。

そのとき、侍女がお茶を持って入ってきました。

「失礼いたします。お茶をお持ちいたしました。」

侍女がそう言ってお茶をテーブルに置くと、ナターリアの様子がおかしいことに気がついて、

「ナターリアさま、いかがなされました？」気分がすぐれないのにござりますか？」

侍女がナターリアさまの側に近づいて 声をかけてきました。

「アレクセイさまを、陛下を、お越しにただくよりお願いしてきてちょうだい。」

ナターリアはシーツを握りしめて、俯いたまま侍女に震える声で言いました。

侍女はナターリアが陛下に何かを頼むことをしたことがあまりないのに、おかしいと思ふ、

「あの……、いかがなされました？何かおありになつたのでござりますか？」

ナターリアは顔を上げて、不機嫌そう、

「いいから、お話ししたいことがあるから陛下においで下すこと申しあげてっ！」

いつも穏やかで話すナターリアが不機嫌そつて言つて、侍女は驚いて、

「は、はい。側妃さま、ただいますぐこお伝えして参ります。」

あわててお辞儀をして、転げるよつて部屋を出て行きました。

「お姉さま…。」

メアリーはナターリアを氣遣つて話しかけます。

「メアリー、気にしなくていいのよ。あなたのせいじゃないんだから…。お茶を飲みましょう。」

ナターリアはふうとため息をついた後、スクッと立ち上がり、テーブルに着きました。メアリーも続いて席に着き、お茶を飲み始めました。

ビビが遠くをみるような顔をしてナターリアがお茶を一口飲んだあと、

「ビビしてなのかじらうね。なぜ私に何も言つてくれないのかじら…。」

「

「それは、私が折りを見て云ふと想つていていたからだ。」

音もなくアレクセイが現れました。

「陛下…。」

「アレクセイさま…。よくお越し下さりました。」

いつも笑顔で迎えるナターリアが、いつになく強張った顔で迎えました。

「ナターリア、話しがあるとのことだったが…。その様子では聞いたのだな？」

アレクセイが氣まずそつに話しかけます。

「メアリー嬢、すまない。しばらく席を外してくれるか？ナターリアと二人で話したいことがある。」

アレクセイはそばにいたメアリーにすまなそうに告げます。

メアリーは戸惑いながらも仕方なさそうに、

「恐れました。失礼いたします。」

そつと部屋を出て行きました。

ナターリアの驚き（後書き）

「これから一人は違うのでしょうか…。」

お気に入り登録して下さった方、閲覧して下さった方、ありがとうございます。

拙い小説ですが、皆様のおかげで頑張って書いてあります。

ナターリアと陛下の会話

ナターリアの部屋に一人だけが残されて、少しだけ重苦しい空気が漂っています。

テーブルに座っていたナターリアが何か言いたそうにアレクセイを見つめています。

アレクセイが氣まずそうにナターリアに話しかけます。

「ナターリア、座つてもよいか?」

「はい…。わざわざお越しただいて恐れ入ります、アレク、いえ、陛下。」

ナターリアは俯いたまま答えます。

アレクセイは悲しそうに、

「アレクセイとは呼んでくれないのだな。それほど、驚いたのだな…。そなたに話さずにすめば、話したくなかったのだが…。」

「あの、陛下…。私にこのような大事なことをお話し下せりぬのはなぜでござりますか?」

ナターリアは唇をかみ締めながらアレクセイに尋ねます。

「そんな顔をしないでくれないか。いつも穏やかな側妃さまに怒鳴られたと侍女が驚いていたぞ…。さて、そのわけは、ナターリアがきっとショックを受けるだろうから、体が良くなつてからと思つていたのだ。現に相当ショックを受けているようだし…。」

アレクセイはナターリアを窺つよつて話し始めました。

「や、それは、そうで『やこいましょうけい』。確かに驚きましたけど、私は他の者からではなく、陛下から伺いとひ『やこいました』。なぜ今まで私に何も知らせないので『やこいます』かの人はすでに処罰されたと、伺いました。私は陛下との間に王子までなしておりますのに、悲しゅう『やこります』。」

ナターリアは右手でドレスをぎゅっと握りしめながら、答えます。

「しかし、ナターリア、話しさ聞いたのだろう…？それで、よいではないか。ああ、でもこれでホツとした。何と、話したものかと、思つていたからな…。」

アレクセイは、ホツとしたよつて少年のような笑顔で言います。

それを聞いたナターリアは、怪訝そうな顔をして、「陛下…？なぜ、私の気持ちを分かつていただけないのですか？私は陛下から伺いたかったのですよ。」

「それは…、すまなかつたな。」

アレクセイは仕方なさそうに言います。

「あの、陛下、私はそんなお言葉を聞きたいわけでは…。」
ナターリアは落胆したようにため息をつきながら答えました。

「それでは、どうして欲しいのだ？」

アレクセイは、困惑したよつて尋ねます。

それを聞いたナターリアは何も言つ気がなくなりました。

「もういいですわ。それから、もう一つ伺いたいことが『やこります』。

妹のメアリーの結婚のことです。陛下のお指図と聞きました。」

「メアリー嬢の結婚のことか？あれば、そなたのためによかれと思つてしたことだ。」

「私の…？それはどういふことでござります？」

ナターリアは怪訝そう、「アレクセイに尋ねます。

「あのようなことが起つたのも、そなたに後ろ盾がないためだからな。宰相の次男が公爵の婿養子となれば宰相が後ろ盾になつてくれる。後宮での地位も安泰だ。王子のためもある。分かつてくれ。まあ、ナターリアの弟たちには悪いと思つたが…。」

アレクセイはナターリアの手をとり、話しかけます。

「そんな…。私のために妹や弟たちが犠牲になることなど、私は、私は望んでおりません。陛下、お願いでござります。どうぞお取下
げ下さいませ。」

ナターリアは哀願するようにアレクセイに言います。

アレクセイはそれを聞いて困つたよう、

「すまない、ナターリア。そなたの願いなら何でも聞いてやりたいのだが、もう決まつたことなのだ。もづ、もとに戻すことは出来ぬ。すでにロブーヒナ公爵も承知しておることゆえ、堪えてくれ。決して悪い話しではない。これでそなたの地位も公爵家も安泰なのだよ。もしかしたら、王妃にもしてやれるかもしれぬ。」

「そんな、私は、王妃など望んでもおつませんの…。」

ナターリアは困惑しきつて答えます。

それを聞いたアレクセイは少し微笑んで、

「ナターリアは王妃になりたくないのか？そなたに欲のないことは知っているが、第一王子の母なのだ。考えて見てくれ。」

「私には王妃など荷が重い…。私は後宮の片隅で生きていただけど、それ以上のこととは望んでおりません。お許し下さいませ。相応しい方になつていただくのが一番でござります。」
ナターリアはせらに哀願するよつにアレクセイに話します。

「それは、シャルロッテ伯爵のことを申しているのか？なるほど、そうすれば母君も喜ぶであろうが、私は愛する人を側妃のままにしあたくない…。父君もそのことで、苦労なさいていた。」
アレクセイは辛うじて話します。

「陛下の父君さまが…？」

「ああ、父君には最愛の妃がおられたが、後ろ盾がなかつたため王妃にすることが出来なかつた。王妃である母君に気を遣つて、苦労なさいていた。私の気持ちも察してくれ、ナターリア。」
アレクセイは真剣な表情でナターリアに話します。

「陛下いえアレクセイさま、私は…。あの、お気持ちは嬉しうれこますが…。」

ナターリアはアレクセイの気持ちを知つてびくびくしてよいか、わからなくなくなりました。

そんなナターリアの様子を見たアレクセイは、ナターリアを優しく抱き寄せて、

「急なことであろうが、考えておいてくれ。」

そう言ひとアレクセイはナターリアの頬にキスをしました。
そして、ナターリアから体を離して立ち上りました。

「そろそろ行かねば…。執務を抜けて来たからな。」

「そうでしたの？」

ナターリアがぼんやりと尋ねます。

「じゃあ、また来る。」

アレクセイは執務のため、部屋を去つて行きました。

アレクセイが行つてしまつと、残されたナターリアは、ため息をついて、

「私は何のために後宮に来たのかしら…。」

ぽつりと呟きました。

ナターリアとメアリーの会話

アレクセイが去ってからどのくらい時間がたつたのでしょうか。日が陰り、夕食の時間にならうとしていました。

ナターリアは人を寄せつけず、夕食も食べずに一人寝室に籠ります。

乳母に抱かれた王子がお休みの挨拶をするためにナターリアのもとを訪れましたが、いつもと違つて複雑な顔をしていました。それでも、何も知らずきやつきやと笑う王子の笑顔をながめて、頭を優しくを撫でて、おやすみの挨拶をしました。

その夜は、アレクセイは多忙のため、ナターリアの部屋を訪れることはありませんでした。

それを伝えられたナターリアは心のどこかでホッとしていました。

そして翌日、ナターリアは妹のメアリーと朝食後、話をしていました。

「いろいろ苦労をかけるわね、メアリー。」

ナターリアは、複雑なそつた顔で微笑みを浮かべながら話しかけます。

「お姉さま、じつは苦労なされているのでは？」

メアリーは姉を気遣つひとつに答えます。

「そんなことは…。でも、私だけですむと思つたのに、メアリーに苦労かけることになるなんてね。弟たちも公爵家を継げなくなつてしまつて…。」

ナターリアは少し俯いて悲しそうに話します。

「お姉さま、お気になさらないで。私ね、お姉さまだけに苦労をかけるのは心苦しかつたんですね…。でもこれで、お姉さまのために私が役に立つますわ。かえつて嬉しきぐらゐです。」

メアリーは姉を元気づけるように答えます。

「メアリー、ありがと…。頼りにならない姉でごめんなさい。」

ナターリアは少しだけ微笑んで言いました。

「お姉さま、謝らないで下わせませ。私たち、きっと世間から羨まれてゐるわ。だつて、お姉さまは第一王子の母君、そして私は宰相の「ご子息を婿に迎えるんですもの。我が家もこれで安泰ですわ。」

メアリーは姉を元気づけるように話しかけます。

「確かにやうかも知れないわね。そこまで望んでなかつたけれど…。」

ナターリアは陰りのある表情で答えます。

しばらくの沈黙のあと、ナターリアはメアリーに尋ねます。

「ねえ、もしも…、なのだけれど、私が王妃になつたり…？」

それを聞いたメアリーはさすがに驚いて、

「え、お、お姉さま…！そんなお話しがあるんですの？」

「も、もしものことよ…。そんな話しあるわけないわ。でも、そつなつたら私に務まると思ひ？」

ナターリアは上田遣にメアリーに尋ねます。

メアリーは少し考えて、

「そうですね。第一王子の母君だからそうなつてもおかしくはないんですけど…。王妃となると、外交や公務がありますから…。お姉さまは家庭的な方ですから、苦労なさるかも知れませんね。」

それを聞いたナターリアはため息をついて、苦笑いをしながら、「そうよね。私には王妃なんて、無理に決まっているわよね…。おかしなことを聞いて」「めんなさいね。」

その普段とは違つ姉の様子を不思議に思つたメアリーは、

「お姉さま、あの、何かおありになつたのではないですか？こんなことをお尋ねになるなんて…。」

「や、そんなことはないわ。あまりこいりんなことがあつたから…、あつと混乱してこらのよ。」

ナターリアは慌てて取り繕つよつて答えます。

「ねえ、お姉さま。お聞きしてもいいかしら？」

「何かしり？」

「あの、お姉さまは陛下のことを愛していらっしゃいますか？」

ナターリアは妹の突然の質問に戸惑いながら、複雑な表情で、「あ、それは…、あの、お慕い申し上げてこるところべきなのじょうけど、私、よくわからないのよ。」

「そり、なのですか…？」

メアリーは怪訝そうな表情で言います。

「あ、でも、まだお若いのに国王をおいれる方だから尊敬はしているのよ。ただ、愛しているかどうかは…。」
ナターリアは困ったように答えます。

「お姉さま、もしや、まだカールさまのこと…？」
メアリーは、ナターリアに対して核心を突くよつた質問をします。

「そ、それは…。側妃である私にはもつ、許されないことだわ。でも、カールどのにはお幸せになつていただきたいと思つていて。このたびも助けていただいて…。」

ナターリアは言葉を詰まらせながら答えます。

それを聞いたメアリーはやつぱりと思ひ、

「お姉さま…。もしかして、後宮に入られたことを後悔なさっています?」

「それは何とも言えないわ…。でも、もう王室もいるし、もう戻れないから。」

寂しそうにナターリアは呟きました。

「心配しないでね、メアリー。王子のことはどうでも愛おしい存在なのよ。だから、もう少し頑張ってみるから、メアリーもお父さんたちのことをお願いね。」

そつまつてナターリアは、メアリーの手を握つて頼みこみます。

メアリーは姉のことを哀れに感じたものの、

「分かりましたわ。でも、あまりにも無理なさらないでくださいませ。私に出来ることは致しますから。」

「ありがとうございます、メアリー。あなただけが頼りよ。お願ひね。」

ナターリアは少し涙ぐんで言いました。

そして、心配そうな表情をしながらメアリーは後宮を出で、ロブ・ヒナ公爵邸に帰つていきました。

その夜、アレクセイがナターリアのもとを訪れるよつとしましたが、ナターリアは体調不良を理由に拒みました。

ナターリアは、なぜか逢いたくなかったのでした。逃げているのは分かつているのですが…。

それからしばらくして、意を決したように、ナターリアは王太后に面会を申し込みました。

それは許されて、午後のお茶の時間に来るよいことの返事をいただきました。

「久しぶりですね、ナターリアさんの。」

王太后がにこやかに話しかけてきました。

少し緊張しながらナターリアは、

「王太后さまには」無沙汰を致しまして、失礼を申し上げました。
「機嫌ゆるわしくあられで、何よりでござります。」

王太后は少し微笑んで、

「ほきげんよう、ナターリアさんの。まあ、いらっしゃりにおいでなさいませ。お茶の支度をさせましたゆえ。」

そう言つて王太后は庭園にしつらえたテーブルにナターリアを誘います。

ナターリアとメトニーの会話（後書き）

お読み頂きましたありがとうございます。

ナターリアには可哀想ですが、もう少し幸せになるには時間がかかりそうです。頑張って書いていきます。

王太后との会話？（前書き）

更新が遅くなりまして、すみません。

王太后との会話？

王太后の居室にある庭園には、軽やかな風が吹いて、美しい花たちが咲き乱れていました。

ナターリアはずっと寝室に籠つてばかりでしたので、ついほんやりと立ち止まり花を眺めてしまいました。

そのほんやりとした様子を見た王太后は、

「綺麗でしょ？これは亡き人が好きだつた花なのよ。」

その声を聞いたナターリアは、ハッと我に返り、

「あ、申し訳ございません。ほんやりしてしまつて…。あの、王太后さま、亡き人とはどなたのことですぞ？」

「それは、お茶でも飲みながら話しましょう。あ、お座りなさい。」

王太后は微笑んで話しかけます。

ナターリアは恐縮しながら、席に座り、
「恐れ入ります、王太后さま。」

テーブルの上には香ばしい紅茶とアップルパイが用意されていました。

「美味しい…。」

ナターリアは紅茶を一口、口にすると微笑んで呟きました。

「気に入つてもらえて良かつたわ。ああ、といひで王子は元氣かしら…？」

王太后がにこやかに尋ねます。

ナターリアは、しまつたという表情でバツが悪そうに、
そういうえば王太后さまにしばらく王子を預かってもらつていたのだ
わ…。アレクセイさまの指示とはとはいえ…。

「あ、あの…。その節は大変お世話になりました、ありがとうございます」
いました。お礼も申し上げずに失礼を致しました。おかげさまにて、
王子も元氣にしております。」

申し訳なさそうに深々とお辞儀をしながら答えます。

「気にしなくていいのよ。陛下の指示だつたのでしょうか？」
王太后は優しく微笑んで言います。

「あ、いえ、その…。申し訳ございません。王太后さま。」
ナターリアは冷や汗をかきながら、うつむいて答えます。

「気にしないで、申していいでしょう？ナターリアどの。顔を上
げてちょうだい。」

王太后が穏やかに話しかけます。

それを聞いたナターリアが恐る恐る顔を上げますと、王太后がにこ
やかに微笑んで話しかけてきました。

王太后が紅茶をゆっくり飲んでからカップを置きますと、そばに控
えていた侍女に何か話しかけました。
侍女はそれを聞くと下がつていきました。

「ナターリアジの、やつきの話しその続きだけれど、あの亡き人と言うのは先帝陛下の寵妃で、テオドラの母君なの。」

王太后が懐かしそうに話しざめました。

「王女さまの母君で、『ゼコ』ましたか…。」

顔を上げたナターリアは記憶をたどりながらなんともいえない表情で答えます。

「ふふ…。おかしいでしょ。寵妃、クララジのとはいわばライバル関係。そのライバルが生んだ子を先帝陛下に頼まれたからと言つて育てるなんて…。」

王太后は笑いながら話しざめました。

「あ、いえ、そのよつなこと…。王太后さまのおやせしい心遣いかと存じます。」

ナターリアが戸惑いながら答えます。

「お世辞はいいわよ。ナターリアジのには似合わないわ。私は、クララジのテオドラを残して亡くなつたとき、正直ホッとしたの。王妃とはいえ、先帝陛下の寵愛はクララジのもの。これで先帝陛下は私を見てくれると期待したの。だから、テオドラを育てて欲しいと頼まれたとき、一もなく飛びついたわ。ナターリアジの公爵令嬢だから分かるでしょ。けど、王子や王女は王宮で育つものと定められているけれど後ろ盾のないものほど惨めなものはないわ。侍女にも劣るわ。クララジの『実家はすでに王女の後ろ盾になれるほどの力はない存在だったもの。だから、先帝陛下はテオドラを王妃の養女にして安心したかったのでしょうか。愛する人との子供ですもの、ね。』

王太后は昔を懐かしむように話します。

「王太后さま…。ですけれど、王女さまと王太后さまは本当に仲の良い親子のように見えますわ。」

遠慮がちにナターリアが答えます。

王太后との会話？

「当たり前ですよ。これでもかなりの努力をしたのよ。あの憎らし
いクララどのの好きな花をここに植えてまでね…。いまでは、敵の
娘がかけがえのかい大事な娘になつていてるわ。」

王太后が皮肉そうにふふっと、笑つて話します。

「王太后さま…。」

ナターリアは、何と返事をしていいか分からず複雑そうな表情で王
太后を見つめています。

「ああ…、ナターリアどの。『めんなさい、つい昔話をしてしまつ
たわね。ところで、今日は何か話しがあつたのかしら?』

王太后がふと気がついたように言います。

「あ、はい。あの…、何と話してよいか分かりかねますが…。」
ナターリアは口ごもりながらも、アレクセイが王妃にと考えている
ことを伝えました。

「な、なんですって…。」

王太后はあまりのことに絶句してしまいました。

恐れていたことが起きて…。
いかに王子の母とはいえ…。

あら、なぜこのことをナターリアどのはわざわざ伝えたのかし
ら? 」

「王太后さま、私は王妃にはなることは望んでおりません。」

ナターリアは顔を上げて、はつきりと王太后に伝えました。

遠慮がちなナターリアにしては珍しいことでした。

「そして、王太后さまが私ではなく、シャルロッテさまを王妃になさりたいことも存じております。」

「…だから、私に伝えたのですか？」

王太后が窺うようにナターリアに尋ねます。

ナターリアはそれを聞いて目を伏せて、言いにくそうに、「申し訳ございません。私の気持ちを分かっていただきたくて申し上げました。ご無礼、お許し下さいませ。」

そう言うとナターリアは深々とお辞儀をしました。

王太后さまは、私の気持ちを分かつて下さるかしら…。

ナターリアはそれを聞いて目を伏せて、言いにくそうに、

「ナターリアどの、もういいから顔をお上げなさい。あの、一つ聞いても言いかしら？」

ナターリアは恐る恐る顔を上げると、少し緊張しながら答えました。

「何なりとお尋ね下せませ。」

「なぜ王妃になりたくないのかしら？王妃といえば、貴族の令嬢に生まれたからには憧れの地位なのにどうして…？」

王太后は不思議そうにナターリアに尋ねます。

ナターリアはそれを聞いてため息をついて、

「それは、私が変わつていてるからでしょうか。私は王妃になりたい

などと思つたことは「ございません。ただ、後宮の片隅で生きていければと思つてゐるだけでござります。」

「それは答えになつていないわね。本心を聞かせていただけるかしら？」

王太后はさすがの迫力で、ナターリアに置み掛けます。

それを聞いたナターリアは困つてしまい、

「そんな王太后さま、私は本心から申し上げておりますのに…。」

「そもそもナターリアど、あなたはなぜ後宮に来たのかしら？」
王太后はさらにナターリアを追い詰めるように尋ねます。

ナターリアは、実家のためと言いたいといふでしたが、それを言つのはなんだかとてもためらわれました。

どうしたものかと、黙つていると王太后が代わつて答えます。

「実家のためでしょ？ナターリアどのが後宮が入られたころは公爵が病氣に倒れたころでしたし。」

それを聞いたナターリアは凶星を刺されて、動搖しながら、
「（）ご存知でいらっしゃいましたか…。」

「やつぱりね。夜会にもめつたに来ないナターリアどのが後宮に入られるには、それしか理由がないでしょ？」
王太后がふうとため息をはきながら言います。

「仰せのとおりでござります。私も父のように愛する人と結婚して幸せになりたいと願つておりました。後宮に入るなど、思いもよらぬことでござります。」

ナターリアはもう仕方ないと想い、思つてゐることを告げました。

「そうでしたか。でも、実家のために後宮に入つたのなら、王妃になれば側妃よりもっと実家に援助が出来ると思うのだけれど、それをお望まないのはなぜかしら？」

王太后がさらに尋ねます。

「それは、私には重荷だからでござります。私はシャルロッテさまと違つて、妃としての教育を何も受けておりませんし。私はただ、後宮の片隅で静かに生きていければと思つていてるだけでござります。」

ナターリアは戸惑いながらも、必死に言い募ります。

そんなナターリアの様子を見ていると、王太后はなんだか昔の自分を思い出しました。

「ねえ、ナターリアどの。もしかして、後宮に入る前に好きな人がいたの……？」

「な、なぜ……、そのことをご存知でいらっしゃりますの？」

ナターリアはすっかり驚いて動搖してしまいました。

「あ、あの……、王太后さま、わたくしは……。」

王太后はくすっと笑つて、

「心配しなくともいいわよ。私だって、結婚前はあなたの父君に憧

れていたもの…。でも、父に言われて後宮に入つて、いまは王太后になつているわ。」

「お父さまに憧れて…、王太后さまがそんな恐れおおいことを…。ナターリアは初めて聞くことに困惑しながら言いました。

「若いころの話ですよ。あなたの父君は、私だけでなく令嬢方の憧れの存在でしたのよ。でも、あなたの母君にとられてしまいましてけど。」

王太后がちょっと笑つて言いました。

お待たせしました。

王太后との会話？

王太后の庭園には一人の重苦しい雰囲気と違い、風がそよぎ、美しい花が咲き誇っていました。

ナターリアもここにたどり着いたときには美しい花に見惚れています。
しかし、今は…。

ナターリアは蛇に睨まれた蛙のようにびりびりすることも出来ないでいるのでした。

それもそのはず、ナターリア自身も自分の気持ちがよくわかつていないのでした。

すっかり押し黙ってしまったナターリアをビリフしたものがと、王太后は考えていたとき、さきほど使いをやつた侍女が戻つてきました。
「王太后さま、テオドラ王女さまが参られました。」

その声にナターリアはふと、顔を上げました。

「お母さま、お呼びでいらっしゃいますか？」
明るい笑顔でテオドラ王女がやってきました。

王女の登場に王太后は顔をほころばせ、
「テオドラ、よく参りましたね。まあ、これからお座りなさいませ。」

そう言つと王太后は侍女に王女のお茶を用意させました。

「はい、お母さま。あら、ナターリアさんの…久しぶりね。もう、体の具合はいいの…？」

テオドラがナターリアを気遣うように話しかけました。

ナターリアは柔らかく微笑んで、

「おかげさまで、すっかりよくなつたよつでござります。テオドラ王女さまには」機嫌麗しく、おめでとうござります。」

「いきげんよ、ナターリアさんの。それは何よりだわー。お兄さまもそれは、心配していらしたのよ。」

テオドラは久しぶりに逢つたナターリアに微笑みながら話しました。

二人の会話を聞いていた王太后は、含むよつな笑顔で、

「ナターリアさんの、テオドラは今度結婚することになりましたの。

「まあ、それはおめでたいことで…。心よつお祝い申し上げます、

テオドラ王女さま。」

ナターリアは嬉しそうに言います。

「ありがと、ナターリアさんの。私も内外にお母さまの娘に認められたよう嬉しく思つてますのよ。」

テオドラはさきほどとは違つて少し緊張氣味に答えます。

それを聞いたナターリアは怪訝そうに、「

「テオドラ王女さま、なぜ、そのようなことを…？」

テオドラは少し悲しそうな微笑をして、

「それは、私がお母さまの本当の娘ではなく、側妃の娘だからしかし…。」

少しの沈黙が続いた後、顔を曇らせた王太后が口を開きました。

「テ、テオドラ、何を言つのです？確かに産んだのはクララどのか
も知れなけれど、あなたは間違いなく私の娘ですよ。」

王太后が悲痛な声でテオドラ王女に言います。

「ありがとうございます、お母さま。同じ側妃の娘と言つのに、お
姉さま方は小国や国内の貴族に嫁ぎました。私が大国に嫁げるのは、
お母さまにお育ていただいたおかげで」やがて、
「だから、嬉しい
のです。」

テオドラは少しはにかんで王太后に話しかけました。

「テオドラ…、あなたは私の娘。大国の王妃になるのは当然のこと
よ。」

王太后はなんともいえない表情をしながら、テオドラを励ますよう
にその手を握りました。

「お母さま、だからお母さまの娘で嬉しいと申し上げているのです
わ。皇妃の娘の分際でなどといつ者たちを見返してやりたいと思
います。」

テオドラは少し強い口調で答えます。

「テオドラ、あなたにそのようなことを言つ者か…。誰ですか、そ
の者は…？」

王太后は少し憤り、テオドラに尋ねます。

テオドラは優しく微笑んで、王太后の方を向いて、

「お母さま、人の口に戸はたてられませんわ。その者の口を塞いで
もきりがありません。お気になさらず、ね？」

王太后はため息をついて、

「確かにそうね…。テオドラ、あなたに苦労をかけるわね。」

「苦労だなんて、お母さま。私、この国の王女として、立派に御役目を果たしますわ。見ていてくださいませ。」

テオドラはニッコリ笑つて王太后を元気づけます。

まだ子供だと思っていたテオドラに励まされ、王太后はすっかり目頭を潤させました。

「テオドラ、あちらに行つてしまつたらお母さまはもうあなたを守つてあげられないわ。」

「大丈夫ですわ、だつて私はお母さまの娘ですもの。」

テオドラは王太后の手をそつと握つて話しかけます。

そんなテオドラの姿に王太后はすっかり目をほそめて、ここに来たときは泣くばかりの少女だったのに、よく成長してくれたと内心喜んでいました。

王太后は、ふと目をやると、なんともいえない表情をしているナターリアの姿が目につきました。

「ああ、『めんなさいね。ナターリアどの、さきほどの話しだれども場合によつては協力してあげることも可能ですよ。』

王太后はふつと微笑みを浮かべて、ナターリアに言いました。

「え、あつ、あの…、それはどのよつな」とピジがこますか。」

ナターリアは明らかに動搖しながら答えるのでした。

「それは、このたびの事件で活躍されたカールとか申したかしら、その者をテオドーラの側近として随行することを取り計らつて欲しいのですよ。出来るかしら?」

王太后はナターリアを窺うように尋ねました。

ナターリアは思ひもよらないことを王太后がおっしゃるの何と云つていいか分からずすつかり、感つてしましました。

「あ、あの、それはいつたこどつこつ」とピジがこますか?」

「分からぬかしら? それは、ああ、テオドーラ、申し訳ないけれど、母はナターリアのと少し話しがありますから席を外してもらえるかしら?」

王太后はふつとテオドーラの方を向いて言いました。

「テオドーラは怪訝そうに、

「お母さま、何をなれるおつもつですか? 私のことなり、心配は無用でござります。」

「何も心配はいらないわ、テオドーラ。少しだけ話しこするだけよ。まあ、王女を部屋にお連れなさい。」

そう言つと王太后はテオドラを侍女に命じて部屋に案内させました。

そうして、庭園には王太后とナターリアの二人だけになりました。

ナターリアは王太后と二人だけになり、どんなことになるのだろうと、緊張のあまり少し震えが出てきました。

何と言つても王太后は、先代の国王陛下が崩御されてからまだ幼いアレクセイを抱えて、この国を支えてきたのですから大変な力があります。

そんなナターリアの姿を見て、王太后はくすっと笑い、

「ナターリアどの、別にとつて食いはしないから楽にしてちょうだい。ただ、少しばかり話しがあるだけよ。」

そう言つて王太后は話しをし始めました。

急に決まつたテオドラ王女の結婚は、あの事件の黒幕ともいえるかの国を牽制するために、かの国とライバル関係にある大国の王太子との縁組なのでした。

大国の妃となるに相応しい身分の王族となると、先代に何人か王女はいましたがどの王女も王妃の産んだ王女ではありませんでした。唯一の候補として上がつたのは、王太后が養女として大切に育ててきたテオドラ王女ただ一人でした。

といつても、隣国とは友好関係にある仲ではありません。むしろ利害が一致しただけの仲です。

何かあればどうなるか分かりません。

テオドラを本当の娘のように大切に思う王太后が、娘のためにカーリを側近に望みました。

万一のときには、王女の頼もしい力になるだろうと期待したことでした。

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

お待たせしました。
ついに後宮の恐さが…

王太后との会話？

「いかがかしら、ナターリアどの？この話、あなたにとつて悪い話ではないはずよ。ナターリアどのは望みどおり王妃にならずに妃の一人として後宮で過ごす代わりに幼なじみのカールとか申す者をテオドラの側近に説得をするだけでいいのよ。」

王太后は微笑んでナターリアに語りかけます。

しかし、ナターリアにとつてはそれは悪魔のような微笑みに感じられました。

それというのも、隣国に嫁ぐ王女の側近といえど、出世街道のようですがそれは友好関係にある間柄だけのこと。利害関係が一致しただけのこの場合、万一千のがあれば我が身はおろか王女の命さえ危ういのです。いわばていのいい左遷とも言えます。そんなところに誰が喜んで行くと言つのでしょうか。

たとえ王太后のたつての願いであつたとしても…。

ナターリアは冷や汗をかきながら、言葉をふりしぼりながら答えました。

「そ、それは…。王太后さま、私にはとてもそのようなことは出来かねます。」

そんなナターリアの姿を見た王太后はくつと笑いながら、「おや、出来ないと？ならば、王妃になるつもりですか？」

「いえ、それは…。」

ナターリアは困ったように口を開けて答えます。

「ナターリアの、あなたは少し覚悟が足りないよね。望みを叶えたいのなら、それ相応のことをすべきでしょうね。」

鼻先でふつと皮肉そうに笑いながら、王太后が真剣なまなざしで尋ねます。

ナターリアは、言わることはそのままのとおりなので、返す言葉もありません。

王太后がシャルロッテを王妃に望んでいたのは周知のことでしたので、王太后に伝えればなんとかなると思つた我が身のあまさを感じていました。

「え、
ちょっと待つて…。」

王太后さまにとつて、私が王妃になりたくないのは渡りに船のはず。それならばどうしてこんな交換条件を…。

もしや、私を試しているのかしら…？

それならば…。

ナターリアは意を決したように、

「王太后さま、恐れながらお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何か気になることでも？ よい。申してみよ。」

王太后がおもじりやうに答えます。

「有り難う存じます。恐れながら王太后さまは、かねてよりシャルロッテさまを王妃にお望みと伺つております。なにゆえ私にこのようなことを申されますのでしょつか？」

ナターリアは一つ一つ言葉を選びながら窺うよつて王太后に尋ねます。

それを聞いた王太后はニヤリと笑い、

「なるほど、そこに気がつきましたか。そうね、確かにシャルロッテどのを後宮にお迎えしたときはその心づもりでしたよ。ですが、今はナターリアどのでも構わないとも思つております。」

王太后の思わぬ答えにナターリアは思わず絶句してしまいました。

「や、それはどういふことかお聞きしても…、よ、よろしいでしょうか？」

しどりもどりになりながらナターリアは王太后に尋ねます。

「ええ。聞きたいのでしょう？それは、ナターリアどのの実家ローピーヒナ公爵家に我が兄の息子が婿養子に入るからよ。」

「それが理由で、『ござりますか…？』
ナターリアは訝し気に尋ねます。

「ええ、そう。そもそも、我が兄の宰相に娘がいないのは『存知かしら？』
ナターリアを試すよつて王太后は尋ねます。

「そ、それは以前、そのようなことを耳にしたことはござりますが……。」

ナターリアはわけが分かりませんでしたが後宮に入る前に聞いた話しを思い出しました。

「そう。知っていたのなら分かるでしょう? 我が実家の繁栄のためにシャルロッテどのを王妃に望んでいたと……。シャルロッテどのの姉はお兄さまの跡取り息子に嫁いでいるわ。だからよ。」

王太后は微笑んで答えます。

「あ、はい……。でも、え、あの、もしや……。メアリーとの結婚で? ナターリアは、まさかと思いながら、恐る恐る王太后に尋ねます。

王太后は含み笑いをして、

「気がついたのね? そう、ロプーヒナ公爵家と縁続きになつた以上、シャルロッテどのでもナターリアどのでも我が実家はどちらに転んでも安泰ということなの。だから、私はあなたが王妃になつても構わないのよ。お分かりいただけたかしら?」

王太后と大臣の会話

「さ、さよひでござりますか…。よ、よく分かりました、王太后さま。」

ナターリアは驚きのあまり顔面蒼白になつてしましました。

そんなナターリアの姿を見ながら、王太后はゆっくりと紅茶を飲み始めました。

そして、飲み干したカップをテーブルにカチャリと置きました。

「ナターリアどの、お顔の色が良くないようですが…？」
王太后がいかにも心配そうに尋ねます。

「あ、いえ…。大丈夫でござります。申し訳ございませんが、本日はこれで失礼させていただきたく存じます。また、日を改めてお伺いさせて致しますので、お許し願いますでしょうか？」

ナターリアは震える声で王太后に尋ねます。

「ええ、お加減が良くなさそうですから、お大事になさいませ。侍女に送らせましょう、誰かおらぬか？」

王太后が眉をひそめて心配そうに言つと、侍女を呼びつけました。

ナターリアは椅子から立ち上ると、

「いえ、大丈夫でござりますから。どうぞお気遣いなさいませんよう」

うに。」

王太后はナターリアの体を支えながら、小声で囁きました。

「何を言われます。王妃になられるかも知れない大事なお体でござ

いましょう？」

それを聞いたナターリアは、また顔色を失いながらも、言葉をふりしぶりました。

「あの、王太后さま。まだ、はっきり決まつたわけではござりますので。」

「そうでしたわね。ナターリアどの、いいお返事を期待していますよ。」

ニヤリと王太后は笑つて、ナターリアを侍女に託して見送りました。

傍から見ると体調の優れない皇妃を気遣う優しい王太后の姿でした。

ナターリアは複雑そうな顔をして侍女に支えらながら、

「お気遣い恐れ入ります、王太后さま。また、よく考えましてお返事させていただきたく存じます。失礼いたします。」

そう言つて深々とお辞儀をして去つて行きました。

ナターリアが王太后の居室から去つていくのを見計らつたように庭園の隣室からシャルロッテの父の大臣が現れました。

「失礼いたします。王太后さまにはご機嫌麗しくおめでとうござります。」

「（）きげんよう、大臣。いつからおいででしたの？」

王太后は振り向きました、にこやかに大臣に話しかけました。

「少し前に（）ざいます。それよりも水臭いですなあ、王太后さま。

何もナターリアさまに頼まれずとも、私にご命じいただければよろしくうござりますものを。」

大臣は微笑んで王太后に話しかけます。

「大臣、せつかくいらしたのです。紅茶を飲んでいかれませ。いま、したくさせましょ。」

王太后はそう言つと、侍女に命じて大臣をテーブルに案内させました。

「恐れ入ります、王太后さま。」

大臣が会釈をして、席につきました。

「それで、いつから聞いていたのですか？」

王太后が皮肉そうに笑つて大臣に尋ねます。

「申し訳ございません、王太后さま。聞こえてしまいまして、一通りのことは…。」

大臣はいかにも申し訳なさそうな様子で答えます。

それを聞いた王太后はふつと笑い、

このタヌキが！

聞き耳をたてていたのでしょに。まあ、いいわ…。

「そうでしたか。壁が薄いのかしら。少し手を入れなくてはならなかしら？」

含み笑いをしながら王太后は大臣を試すように尋ねます。

大臣もそれを聞いて眉をひそめて、

まつたく…。

食えないお方だ。

「いえ、私はあまりここに参りませんので何とも申し上げかねますな。」

大臣も素知らぬ様子で答えます。

「そう…ならそう思ふことにしましょうか。ところで、大臣にはなぜこちらにおいでになりましたの？ただの『機嫌伺い』とは思えませんが…。」

王太后はチクリと警告しながら、大臣に尋ねました。

「いえいえ、『機嫌伺い』に『ぞぞこ』ますよ。至らぬ娘がお世話になつておりますからな…。」

大臣はそう言って王太后を窺います。

王太后は無言で大臣にふつと笑いかけます。

「…と申しても、信じていただけないようですね。王太后さまには、かないません。どうぞ『容赦を願い上げます。』

大臣はそう言って頭をかきました。

王太后は、ふつと笑い出しました。

「ほほほ…。大臣、私は鬼でも蛇でもありませんよ。ん、申してみなさい？」

大臣は心中で、

蛇の方がかわいいがな…。

まったく勘の鋭い方だ！

「恐れ入ります。では申し上げます。実は、ナターリアさまが王妃になられるという噂を耳にしたものですから、気になりましてこちらに参った次第で」「ぞいります。」

大臣はそう言うと王太后の様子を窺います。

王太后はそれを聞くと眉をひそめて、紅茶を飲んでいた手を止めて、カップをテーブルに置きました。

「そう、もうそんな噂があるのでですか。」

「はい。しかし、噂の真偽を確かめるまでもなく、真実のようござりますな…。」

大臣はそう言うとため息をつきました。

王太后は少し困った顔をして、

「ええ、残念ながらそのようだ」「ぞいります。ナターリアどのが嘘をつくとも思えませんし、ね。」

「そうですか、困りましたな。しかし、それよりも王太后さま、さあほどのお言葉は」「本心に」「ぞいりますか…？」

「ああほどの言葉とは…？」

王太后は気まずそうな顔で尋ねます。

大臣は皮肉そうに笑い、

分かつてゐるくせに、このタヌキが…。

「恐れおおこ」とながら、どうやらが王妃になつてもかまわないといつてこひるで「ござりますよ。そつこつお気持ちであられるのでござりますかな?」

大臣は真剣な表情で尋ねます。

さすがの王太后も少し怯んで、

「大臣、誤解なさらないで下さいね。ナターリアどのを王妃になどと考へてこるわけではありませんのよ。」

「なれば、あのようなことを仰せられたのでござります?」

大臣はさうに追及するよつと尋ねます。

「それは、考えがあつたからです。大臣、私が反対したとしても陛下はナターリアどのを王妃にするでしょう。第一王子の母でもありますし…。」

王太后は苦々しい表情で答えます。

「それは、確かに…。しかし、どうなさるおつもりで?」

大臣も眉をひそめて尋ねます。

「しばし、ナターリアどのがどうするか、様子を見ましょ。テオ

「は、やよいでのことでも気になりますし…。」

「は、やよいでのこと…。しかし、テオドリ王女やおのじとがじ心配でし
たら、私がかの者をなんとかいたしましょ。」

大臣が王太后にまた恩を売るつもりで提案します。

「いや、まだよい。ナターリアどのがダメだったときにも頼みましょ
う。…あの者、何が不満なのか。陛下に愛され、第一王子の母でも
あるのに…。」

王太后はやつて言つたあと、何か思い出したように舌を噛み締めます。

王太后と大臣の会話（後書き）

なかなか話しが進まず、すみません。

そろそろ佳境に進んできました。
どうなつていくのか見ていていただけるとうれしいです。

登場人物紹介（前書き）

そろそろこのへんで登場人物の紹介をしたいと思います。

一部ネタバレになる人物もいますので、先を知りたくない方はスルーしていただければと思います。

登場人物紹介

ナターリア

この物語の主人公。公爵令嬢。初恋の人力ールと結婚したいと思つていましたが、傾きかけた家のために後宮に入れます。

カール

ナターリアの初恋の人で、男爵家の跡継ぎ。

アレクセイ

国王陛下。父を早くに亡くしたため母の王太后に溺愛されて育つ。初恋の人ナターリアを後宮に迎える。

エレナ

ロブー・ヒナ公爵夫人
でナターリアの母。

商家の娘で公爵家の侍女でしたが、遠縁の男爵家の養女となつて公爵に嫁ぐ。公爵とは恋愛結婚。

ロブー・ヒナ公爵

ナターリアの父。娘とカールを結婚させようと思っていたが病氣になり、妻に後ろ盾がないため傾きかけた家のために後宮に娘を入れる。

王太后

先代の王妃で国王アレクセイの母。
夫を早くに亡くしたため息子を溺愛している。
夫の寵妃が生んだ王女を引き取つて育てる一面もある。

女官長マーヤ

王宮の女官長。陛下の乳母をつとめた。

女官アンナ

陛下付きの女官。マーヤの娘。

侍女アリス

ナターリアの侍女。

シャルロッテ

大臣兼公爵令嬢。

父の期待を背負つて後宮入り王妃の座を狙う。王太后のお気に入り。

オリガ

伯爵令嬢で母は王女。後宮に入り、王太后では頼りにならないと見て、ナターリアに近づく。

大臣

ペトロヴィチ公爵。シャルロッテの父。陛下の即位に力を貸して、王太后の信頼を得る。

テオドラ王女

アレクセイの異母妹。母が早くに亡くなつたため王太后に育てられる。

ルイス

カールの異母弟。大臣に利用される。

宰相

王太后の兄。

ラウル卿

王宮お抱え医師。

レオン

宰相の次男。メアリーと結婚してロプーヒナ公爵家の婿養子となる。

ナターラニアとアコスの会話? (前書き)

更新が遅くなりました。あまり進んでません…。

ナターリアとアリスの会話？

「ナターリアさま一びつなさいました…。」

ようようと王太后に仕える侍女に支えられて王太后の居室から戻つてきたナターリアに驚いて、アリスが叫び声を上げました。

「…」めんなさい、マリア。急に気分が悪くなつて、王太后さまが侍女どを遣わして下さつたの。」

ナターリアが弱々しく答えます。

「大丈夫でござりますか、ナターリアさま？それにしても、王太后さまがこのようなお気遣いを…。おそれおおいことござります。お世話をおかげいたしまして、感謝申し上げます。」

アリスは心配しながらも、送つてくれた侍女にお礼を言います。

「いえ、王太后さまの仰せにござりますれば、お気になさいません
ように。」

王太后に仕える侍女が無表情に答えます。

「さよひでござりますか。王太后さまに感謝申し上げておりますと
お伝え下さいますようにお願ひ申し上げます。あとはこちらにお任せ
くださいませ。」

アリスはそう言つとナターリアを侍女から受け取りました。

そのとき、ナターリアもか細い声で侍女にお礼を伝えました。

「それでは私はこれにて失礼します。」

侍女は窺つようこそいつまつと王太后のもとへ帰つて行きました。

ナターリアはアリスに支えられて、寝室に横になりました。

「大丈夫でござりますか、ナターリアさま？」
アリスが心配そうにナターリアに尋ねます。

「ええ、もう大丈夫。ありがとうございます。」ナターリアが安心しましたように微笑んで答えます。

「出かけられるときはお元気そうでしたのに、もしや、あちらで何かおありになつたのですか？」

アリスが眉をひそめて尋ねます。

ナターリアはすつと体を起こして、すぐそばに控えていた侍女に、「お水を持ってきてもらえる？」

そう言うと侍女は下がつていきました。

そして、一人だけになるとナターリアは先程の出来事を話し始めた。

「私の考えが少しあまかつたようです。シャルロッテさまを応援なさつてゐる王太后さまに申し上げれば、王妃になることはないと思つたのだけれど……。やはりここは後宮、見返りがないと動かないのですね。」

ナターリアはそう言つと、ため息をつきました。

「ナターリアさま…。」

アリスは何と言つていいか分からず佇んでいましたと、わざわざの侍女がお水を持ってきました。

「ありがとうございます。後は私が致しますから、下がつていてちょうどいい。取り繕つたようにアリスはそう言つと、侍女を下がらせました。

アリスは微笑みながら、お水をナターリアに差し出しました。

「ナターリアさま、お水をどうぞ。」

「ありがとうございます。」

ナターリアは虚ろな様子でそう言つとお水をゆっくり飲みました。

276

「落ち着かれました?」

アリスは心配そうな様子で尋ねます。

「ええ。」

「あの、ナターリアさま…。お伺いしてもよろしいでしょうか?」

アリスが遠慮がちに切り出します。

「何かしら?」

「ナターリアさま、いえお嬢さまはなぜ王妃になりたくないのです」

ぞこますか？ロブー・ヒナ公爵家のためにここの後宮に入られたはずで
「じぞこましょ。」

ナターリアは驚いて、

「アリスまでそんなことを言つて……？」

「申し訳」じぞこません、お嬢さま。ですが、後宮に入られたばかりとはじぞぞ知らず、もつお嬢さまは国王陛下の寵妃で第一王子の母君であります。」

アリスは恐縮しながらも言つます。

「分かつてゐるわ、そんなこと。だから、王太子さまのもとに行つたんじゃない！」

穏やかなナターリアが珍しく声を荒げます。

「いいえ、分かつておられませんわ。もつすでに、後戻りは出来ないでじぞこますよ。」

アリスが苦痛に満ちた顔で言つます。

「では、私にじぞしると言つのです？まさかアリスまで王妃になれと……！」

ナターリアは唇を噛み締めながら言つ返します。

ナターリアとアコスの会話? (後書き)

読んでいただきありがとうございました。

次はもう少し早く更新できるよう頑張ります。

ナターリアにとつてつらい時期がやつてきました。よければお付き合
い下さい。

ナターリアとアコスの会話? (前書き)

お待たせしました。
続きをどうぞ。

ナターリアとアリスの会話？

「申し訳ございません、ナターリアさま…。そのような意味ではなく、お覺悟をなさいませと申しているだけにござります。」

アリスはすっと膝をついて、ナターリアに向かってそう言いました。

「アリス、覚悟とは…！」

ナターリアは何かショックを受けたように言っています。

「はい、覚悟でござります。もう後戻りは出来ない以上、王妃になられるか、もしくは王妃になりたくないからと王女さまに仕えて欲しいとカールさまにお頼みするか、一一に一つでござります。」

アリスが辛そうにナターリアに進言します。

「そ、そのようなことは私には…。」

ナターリアは思わず絶句してしまいました。

「お嬢さま、お許しを…。アリスに出来ることは何でも致しますので。」

アリスは少し涙ぐみながら訴えます。

「アリス…。」

しばらくの沈黙のあと、ナターリアがアリスに抱きついてきました。

「お、お嬢さま… 一ぞうなれこました?」
アリスが戸惑いがちに尋ねます。

「アリス、『じめんなれこ。しざりく』のままで…。」
ナターリアはそういうと、子供のときのようにアリスにあまえてきました。

アリスは少し驚きましたが、やがて微笑んでナターリアの頭をなでながら、
「お嬢さま、いえナターリアさま…。まるで、幼い頃に戻ったよう
でござりますね。」

ナターリアはいたずらっぽく微笑んで、
「クスッ、ホントにそつね。王宮に来てからいろいろあつたから…。」

「

ナターリアはアリスからそつと体を離して、心細そうに尋ねました。
「ねえ、アリス…。私に王妃が務まるかしら? 何の教育も受けてな
い私に…。」

「ナターリアさま、『じ決心なされたのでござりますか?』
アリスは少し緊張したように微笑んで尋ねます。

「ええ…。カールさまに『これ以上』迷惑はかけられないし、王子の、
アルバートのためにも私が頑張らないと…。」

ナターリアも少し緊張したように答えます。

「『立派でござりますわ、ナターリアさま。ですがれど、務まるかどうかは私ではなく、恐れながら、陛下にお聞きになるべきではございませんか?』

アリスはにっこり笑って、そう進言します。

ナターリアはふっと緊張からとけたように笑って、

「それもそうね。アレクセイさまに私に王妃が務まるかどうかお聞きしてみるわ。」

「その方がよろしく『立派でござりますわ。陛下もきっとお力になつて下さいます。』

アリスは微笑んで答えます。

「ありがとうございます、アリス。頼りない主人だけど、これからもよろしくね。」

ナターリアにアリスに言います。

「とんでもございません。こちらこそよろしくお願ひいたします。ナターリアさまにお仕えしたおかげで、私も公爵家の侍女からもしかすると王妃さまの侍女になれるのですもの。光栄の極みでござります。」

アリスは少し興奮したように答えます。

「まあ、アリスつたら。相変わらずね。」

ナターリアはクスクスと笑いながら言いました。

「ナターリアさまの笑い声は久しぶりですわ。これからはカールさまのことはよい思い出になさいませ。」

アリスはふっと声をひそめてナターリアに言います。

「ええ、分かつてゐるわ。カールさまは、きっと私の初恋だつた方。これからは、王妃として生きるのだから……。」

ナターリアは少し遠い表情をしてポツリと呟きました。

初恋…、

ナターリアの？

ナターリアを驚かそうと突然訪ねてきたアレクセイが扉の前で我が耳を疑いました。

側に控えていた侍女がアレクセイの様子が少しおかしいと感じ、「陛下、いかがなさいました？」と尋ねました。

「いや、なんでもない。そちはもう下がつてよい。」

アレクセイは少し難しい顔をして、部屋に入つて行きました。

「ナターリア、体の具合は大丈夫か？」

アレクセイは少し複雑そうに尋ねました。

ナターリアは突然、アレクセイが部屋に入ってきたので少し驚き、「まあ、アレクセイさまー突然、どうなさいましたの？」

「いや、少し驚かそうと思つてな。それに、体の具合が悪いのに母君のところに伺つたと聞いたが…。」

アレクセイが少し疑わしそうに尋ねます。

ナターリアは少しアレクセイの様子が少しおかしいとは思いましたが、気まずそうに、

「ええ、王太后さまに少しお話しさしたい」とが、『『『』』』

「…」

「どうか、どんな話をしてしたの？」

アレクセイは窺うように尋ねます。

ナターリアは、そう聞かれても、まさか王妃にしないで欲しいと頼みに行つたとは言えず、

「いえ、あの、たいした話ではありませんので…。」

戸惑つたように答えます。

「余には言えぬことなのか？」

アレクセイは不機嫌そうに尋ねます。

「いえ、そのようなことは…。お話しするよくなことではないものの

ですか。」

ナターリアは困ったように答えます。

側に控えていたアリスは助け舟を出すよつこ、
「恐れながら陛下、ナターリアさまがお話ししたいことがおありになることで、」
なるとのことで、

アレクセイはさういふ不機嫌そつこ、

「アリスとやう、無礼ではないか！余はこま皇妃と話しているのだぞ。」

アリスは申し訳なさそうにピクッと怯えて震えながら、
「も、申し訳ございません…。」無礼を致しました。
か細い声で答えます。

ナターリアは、慌ててアリスを庇いました。

「お許し下さいませ、アレクセイさま。アリスの無礼は主人である
私の責任だござります。どうぞ責めは私におしつけを…。」

吐き捨てるようにアリスに向かって言いました。

「まあ、よい…。」たびはナターリアに免じて許そつ。アリス、側
妃に感謝するのだな。」

アリスはすっかり恐縮しながら、
「恐れ入ります、陛下。感謝申し上げます、ナターリアさま…。」

やつまつと深々とお辞儀をしました。

「 もへ、下がれ。ナターリアと話しがあるゆえ…。」

アレクセイは近くの椅子に座りながらアリスに言い放ります。

「 は、はいっ…。」無礼を致しました。」

アリスはすっかり小さくなりながら、即ちに部屋を出て行きました。

ナターリアの決心

「ナターリア…。立つてないで座つたらどうだ?」
アレクセイが気遣つようにナターリアに言いました。

「あ、はい…。失礼いたします。」

ナターリアはこんな不機嫌そうなアレクセイを見るのは初めてのことでしたので、びくびくしながら近くの席にそっと座りました。

ナターリアが座つたのを確認すると同時に、アレクセイがぶつきりぽうに尋ねました。

「それで話したいことはなんだ?」

「はい、アレクセイちゃん…。先日の王妃にとのお話しで『なぜ』が、私に務まるのなら『せひ』お受けしたいと存じます。」
ナターリアは少し緊張しながら答えました。

アレクセイは喜ぶべきところでしたが、先ほどの話しが聞いたばかりでしたので素直にその言葉を聞くことが出来ずに、

「そうか。無理にとは言わないぞ。ナターリアが嫌なら、なかつたことにしてもいいのだが…。」

アレクセイのあまりの変わつよつにナターリアは、どうしていいかわからなくなり、心細そつに、

「あの、陛下…。私では務まつませんでしょつか？」

アレクセイはそのナターリアの言葉を拒否と受け取り、試すよつて、
「いや、そうは思わぬがな…。ま、王妃になるのなら、先ほどの侍
女は実家に返した方がいいだうつな。」

それを聞いたナターリアは、愕然としてしまいました。

「それは、なぜで」「さこますか？先ほどのことはお許しをいただい
たのでは…。」

「まあ、そうだが…。しかし、あのよつな侍女は王妃付きにはふさ
わしくないと思うぞ。ナターリアが苦労をするだけだ…。代わりの
侍女なら余が遣わせよ。」

アレクセイは少し念みをもたせたように話します。

「そ、それは…、私が王妃になるためにはアリスは邪魔なのですか
？で、ですがアレクセイさま、アリスは私にはかけがえのない大切
な侍女でござります。」

ナターリアはアレクセイに哀願するように答えます。

「いや、まあ…。あの侍女もよく仕えているのだうが、これまで
とは違い、王妃付きともなれば気苦労も多い。実家に返した方が幸
せではないかと思ってな。」

アレクセイは取り繕つように答えます。

「それは、そうかも知れませんね。アリスのためになるのなら、仕方ありません。そのように致しましょう。」
ナターリアは思いつめたように答えます。

アレクセイは少し驚いて、

「よいのか？大切な侍女のだらつ、いなくなつては…。」

「はい…、アレクセイさま。私にはアレクセイさまやアルバートがおりますからきっと大丈夫でござります。」
ナターリアは健気に決心して答えます。

それを聞いたアレクセイは急に機嫌が良くなり、

「もちろんだとも。きっとナターリアを守つてみせる。」

そう言つとアレクセイはナターリアの側に寄つて抱きしめました。

「アレクセイさま…？」

ナターリアは戸惑いがちに問いかかけました。

「いや、ちょっと嬉しくてな…。今日はここに泊まつてもよいかな？」

アレクセイは少しばにかみながら尋ねました。

「は…。うれしゅうびやります。」

ナターリアはアレクセイがいつもの様子になつたことに安心したの

か、ふつと安心して微笑みました。

笑ったナターリアを見て、アレクセイも嬉しくなって、その夜はいつになく、仲良いい時間を過ごしました。

翌日、アレクセイが戻つてから、ナターリアはしばらく泣き伏してしまいました。

それはアリスとの別れを悲しんでいるのか、それとも王妃への重圧に苦しんでいるのか…。果たしてそのどちらか、その両方だったのかも知れません。

ナターリアの決心（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

このお話しを書き始めたときは一人でも読んでくださる方がいればと思つていたのですが思いがけなくたくさんの人々に読んでいただきて感謝するばかりです。

そのためか、私の思うように書いていいのか悩んでいましたが、思うように書いてみるとしました。

よろしければどうぞお付き合いいただければ幸いです。

王太后の企み（前書き）

じわじわと意地悪が始まります。
苦手な方はスルーして下さい。

王太后の企み

ナターリアが決心してから数日たち、アリスも間もなく公爵家に下がつて行きました。

その代わりに遣わされた侍女とは、あの事件の折、仕えてくれた女官のアンナでした。

「ナターリアさま、お久しぶりでござります。これからどうぞよろしくお願ひいたします。」

アンナは深々とお辞儀をして挨拶をしました。

ナターリアは見知った者でしたので、少し安心したよつゝ、「まあ、アンナ…。これからよろしく頼みます。」

「ふつつかではござりますが、精一杯務めます。」

アンナは微笑んで答えます。

「ありがとうございます。頼りにしているわ。早速だけれど、王太后さまのまことに伺いたいの。お願いしてもいいかしら？」

少し複雑そうな顔をしてナターリアはアンナに言いました。

「は、はい。早速手配いたします。ではこれにて…。」

アンナは少しナターリアの表情が曇っているのが気にかかりましたが、王妃になられるからかしらと、思い直し、王太后さまへの訪問の手配にとりかかりました。

「そう…。私の頼みが聞けないって言うことね、ナターリアビの？」
不機嫌そうに王太后がナターリアに言い放ちました。

「は、はい…。」期待に応えられずに申し訳ござりません、王太后
さま。」

ナターリアは俯いて申し訳なさうに答えます。

「それでは王妃になられるのかしら？」
王太后が窺つよに尋ねます。

「は、はい。恐れながら、陛下にそのよに申し上げました。
ナターリアは言ござらせてに答えました。

王太后は眉をひそめて、

「それはおめでとうと言つべきかしら、ね。だからナターリアビの
の侍女にアンナが付いたのね。」

そう言つと王太后は側に控えていたアンナに視線を向けました。

「恐れ入ります。」

ナターリアは恐縮しながら答えます。

「そうですか…。あの侍女もよく仕えていたと思つたのだけれど、

ね。」

王太后は皮肉そうに微笑みました。

ナターリアはその言葉を聞いたときには、本当にそうだわと、辛い表情で俯くばかりでした。

王太后はそんなナターリアを見て、ふつと笑い、

「ナターリアどの、あなたがそんなに利己的な人だったなんてね……。ずっと仕えてくれた侍女を切り捨てて王妃になるなんて思わなかつたわ。」

それを聞いたナターリアは、あまりの言ひょうにふるふると体が震えが止まりませんでしたが、ふつと顔を上げて言い返しました。

「王太后さま、アリスは私にはもつたいくらいの侍女でございました。」

「あら、それならなぜ実家に返したのかしら？」

王太后が意外そうに聞き返しました。

「私のために苦労させてはと、思いまして。」
勇気をふりしぼり、ナターリアは答えます。

その答えを聞いた王太后ははつとしました。

強くなつたものだわ……。後宮に入つたことは大違ひだわ。

「そう、誤解してたようですね。失礼を許してちょうだい。ナターリアどのは優しい方ね。いい王妃になりそだこと。」

王太后は軽くお辞儀をして、謝罪しました。

「いえ、とんでもございません。これからこそ失礼をいたしました。」
ナターリアは静かに答えます。

これでは、シャルロッテどのを王妃にするのは難しそうね。

王太后は難しい顔をして、

「ナターリアどの、準備でお忙しいでしようからもうお帰りなさいませ。」

取り繕つように提案します。

「あ、これはお気遣いをいただきまして、ありがとうございます。
それでは、お言葉に甘えまして失礼させていただきます。」

遠慮がちにナターリアはそう言つと、アンナとともに部屋へ戻つていきました。

二人が王太后の居室から去ると同時に王太后は大臣へ使いを出しました。

それはもちろん今後のためでした。

それから一ヶ月もしないうちに大臣の暗躍によりカールがテオドラ王女付きとして仕えることになりました。

「さすがは大臣ですね。どんな手を使ったのかしら？」

王太后は満足そうに大臣に話しかけます。

大臣は思わず、くつと笑い、

「それはお知りにならない方がよろしいかと存じますが。それより、お約束の件、よろしくお願ひします。」

「分かっておりますわ。もつ手配済みだから期待していくちょうどいい。」

王太后は心得たように答えます。

「それはそれは、楽しみでござります。して、お披露目はいつ頃になりそうですかな？」

大臣は期待に満ちた表情で王太后に尋ねます。

「そうね、次の夜会でお披露目となるでしょうね。」

王太后はそう言つと紅茶を飲み干しました。

「それは楽しみでござりますな。我が娘は幸せ者でござりますよ。大臣も満足そうに紅茶を飲みました。

王太后は、

夜会でナターリアビのはどんな顔をするかしら……。

楽しみだわ。

ふふつと意味ありげにほくそ笑みました。

そして運命の夜会の日がやつて「よつとしていました。

この日は表面上テオドリ王女の婚約祝いでしたが、アレクセイはナターリアを王妃候補としてお披露目するつもりでした。

王太后は王太后で、大臣の娘の祝いのお披露目をしよつと計画をしていました。

「ナターリアさま、お聞き及びに」、「ぞこにますか？」

アンナが夜会の支度を整えたナターリアに尋ねます。

「何を？」

ナターリアが不思議そつに尋ねました。

「あの、以前」、実家のロアーハン公爵家をお救い下さいましたカールさまがテオドリ王女さまのお付きになられたとのことで、」、「ぞいます。」

アンナがナターリアを気遣つよつに答えます。

それを聞いたナターリアは、驚きのあまり、手にしていた扇を取り落としました。

「そ、それは…。いつたいびりして?」

「ああ、詳しこことは存じませんが、王太后さまはその者がテオドラ王女さまのお付きになると、たいせつお喜びになられておられることがあります。」

アンナが聞いたばかりの噂をナターリアに告げます。

「そ、そんな…。では私が王妃になることには、何の意味もなかつたの?」

ナターリアはすっかり放心したように呟きました。

アンナはナターリアが落とした扇を拾い上げて渡しながら、

「そ、それはどうじつことじごぞいますか?ナターリアさま。」

アンナは聞き捨てならない様子で尋ねます。

ナターリアは、動搖したように、

「いえ、あの…。私、以前に王太后さまに私を王妃にしないで欲しいとお願いしに行つたことがあるの。でも、その代わりにカールどの王女さまのお付きこと望まれたのです。」

「そ、そのようなことが…。それでナターリアさまは何となされたのでござります?」

アンナが先を促すよつて震える声で尋ねました。

「あの…、その件はお断りしました。カールどのじつ迷惑をおかけするわけにはいかないですもの。だから、私が王妃になればと思つたのだけれど…。」

ナターリアが力無く答えました。

「そんなことがあつたのですね。 経緯は分かりませんが、 カー
ルさまのことはもう止められますまい。」
アンナが仕方なさそうに言います。

王太后の企み（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
読んでいただけの方がいらっしゃると思つと励みになります。

いまは苦しいですが、早くハッピーハンドが迎えられるように頑張ります。

夜会？（前書き）

すみません。つらく述じです。

「そんな……。」

ナターリアは呆然として立だけてぬけでしてしまいました。

アンナは急にこんな話しさ聞いたものですから、何と呴つていいか分からず困つてしましました。

アレクセイ付きの女官としてずっと仕えていたアンナは、アレクセイにナターリアの侍女が急に辞めたから代わりに仕えて欲しいと言われて来たら、こんなことになつてしまつたのでした。

今にして思つて、アレクセイの様子もナターリアの様子も少しおかしいなとは思つてつでした。

それによく考へるとおかしなことでした。

皇妃の侍女が辞めたからといって、国王陛下付きの女官を仕えさせられるなんて聞いたことがありません。皇妃が新しく侍女を雇えればする話しながら。

これはいったい何が起つていいのか…。

「あの、恐れ入りますが、ナターリアさま…。このまま夜会にで出席なさつてもよろしいのでしょうか？」

アンナは思わずナターリアに確認するみつて話しかけました。

「え、あの…。私は…。」

ナターリアは口^いわつてしまふました。

カールのために王妃にならうと、アリストまで手放したのに、それなのにカールは王女に仕えることになつてしまつました。

でも、

じこじまだれに…。

こまむらやめぬじとも…。

私はえ我慢すれば実家は安泰なんだし。
メアリーも結婚したのだから。

ふう〜。

ナターリアは目を閉じてため息をひとつしました。

そして、アンナに向かつて言いました。

「こまま出席するわ。いまさらやめるわけにはいかないでしょ〜。」

「

「それはやうでいざれこましそうが…。」

アンナが少し心配そうに答えました。

「…。

「失礼いたします。夜会のお時間でいざれこます。」

「もうやう時間のよつですね。参りましょ〜、アンナ。」

ナターリアが姿勢をただして言います。

「は、はい。」案内申し上げます。」

アンナが部屋の扉を開けて夜会の会場へ向かおひとしました。

そのとき、迎えに来た侍女が遠慮がちに

「あの、恐れ入りますが陛下から緊急のお手紙を預かっております。

」

「緊急のお手紙で」「なぜこなすか？」これから夜会でお逢いになりますのに…。ナターリア わも、びつわ。」

アンナが不思議そうに侍女から手紙を受け取り、ナターリアに手渡しました。

「ありがとうございます。何かしら…。」

そう言いながらナターリアが手紙を読むと驚きの内容が書かれていました。

「アンナ…。参りましょつ。」

ナターリアは唇を噛み締めて、震える声で言いました。

「どうなさいました？陛下は、何と…。」

アンナは心配そうに尋ねました。

「いいえ、いいの。急ぎましょつ。」

そう言つとナターリアは会場へ急ぎました。
ため息を一つ残して…。

王宮の広間では、それはにぎやかに夜会が行われていました。
上段にアレクセイと王太后が鎮座していました。

そして、その近くに当然のようにシャルロッテも控えておりました。

「あら、ナターリアさまよ。珍しいわね。夜会にいらっしゃるのは……。」

「本当ね。出られるつてことは何があるのかしら？？」

「もしかしたら、もしかするかもよ……。」

ざわざわとナターリアの噂話が飛び交います。

ナターリアは、決意はしたものの初めてのことに思わず、足がすく
んでしました。

「ナターリアさま、大丈夫でござりますか？」
心配そうにアンナが声をかけます。

「あ、いえ……。大丈夫、ありがとうございます。」
ナターリアがハッと したよつて答えます。

「では参りましょつか。陛下もお待ちでござりますわ。」

アンナは微笑んでそう言つて、アレクセイのもとへ案内します。

ナターリアは少し暗い顔で、アレクセイのもとへ行きました。

アンナは王妃候補として紹介されるものとして張り切っていますが、恐らく歓迎されないのはナターリアは分かりきっていました。それにさきほどの手紙で無理だと分かりましたし…。

「側妃ナターリアさま、ご到着でござります。」
アンナは誇らしげに告げました。

ナターリアの姿を見たアレクセイは嬉しそうでしたが、すまなそうな顔をして、当たり障りのない挨拶を交わしました。

側にいた王太后が微笑んで声をかけてきました。

「ナターリアどの、夜会でお見かけするのは初めてですね。今日は楽しんでらしてね。」

「恐れ入ります、王太后さま。」
ナターリアが俯いて答えます。

「そういう、おめでたいことがありましたね。シャルロッテどの、こちらへおいでなさい。」

王太后は楽しそうにそう言つと側にいたシャルロッテを呼び寄せました。

「はい、王太后さま。ナターリアさま、お久しぶりです。」
にっこり笑つたシャルロッテが現れました。

「実はね、シャルロッテどのの妹のルイーズ嬢が結婚することにな
りましてね。」

「や、それはおめでと「ハヤカワ」
ナターリアは戸惑つたよつに答えます。

「ありがとうございます、ナターリアさま。王太后さまのお計らい
で素晴らしい方をお迎え出来て、我がペトロヴィチ公爵家にとつて
も名誉なことですわ。」

シャルロッテは皿邊づに話します。

「やうなによ。ペトロヴィチ公爵家は女の子ばかりで男子がない
からいい婿養子をと頼まれていたのだけれど、テオドラ王女が嫁ぐ
隣国の王太子殿下の従兄弟にあたられる方なのよ。素晴らしい縁
でしよう?」

含むような笑顔で王太后が話します。

「まあ、それはそれは…。誠におめでたいことで「ハヤカワ」
りお祝い申し上げます。テオドラ王女さまも「縁のある方が我が国
においてになられると、やぞ心強いことだ」ございましょう。」
ナターリアは感情を押し殺して、微笑んで言います。

「ありがとう、ナターリアさんの。本当にこれで王女を安心して、嫁
がされますわ。頼もしい側近もついておりますし。あとは陛下に早
く王妃を決めていただければ私も安心なのですけれどね。」
少し含み笑いをしながら、話しかけます。

ふふ…。

どうかしら、ナターリアさんの。

私の頼みを断るからよ。これで王妃は難しくなったわね。

あなたに恨みはないのだけれど、悪く思わないでちょうどいいね。

それを聞いたナターリアは、暗い気持ちになりましたが、
ああ、やっぱりカールさまは隣国に行ってしまわれるのね。
もうどうでもいい…
けど、せめて実家だけは守らなくては…

「わよひうぢ」わざますね。早く王妃さまを迎えられますようにお祈
り申し上げます。」

「ほほ…。陛下、ナターリアーディのも薦めてくれたことですしお早く
王妃をお決めなさいませ。」

王太后は横に座っているアレクセイに含んだ笑顔で話しかけました。
「母君、まだ王妃を迎えるには早によりますので。」
アレクセイは苦々しい様子で答えます。

母君、ナターリアを王妃に迎えたいと思つていたのに、邪魔をした
張本人がそんなことを言つとは…。

「あら、そうですか。もういいことだと思ったのですけれど、ね。
王太后は怯むことなく、答えます。

「まあ、いづれはお考え方をさせまし。ではどうぞゆるつとお過ご
しなさいませ、ナターリアーディ。」

「ありがとうございます。では御前失礼いたします。」
ナターリアはそう言つと淑女の礼をしました。

アレクセイからは、申し訳なさそうな表情で、楽しんでくれと声をかけました。

しかし、ナターリアは堅い表情で会釈をして去つて行きました。

もつ愛想笑いをする気分にもなれなかつたからです。

アレクセイはもつ、不安な気持ちでいっぱいになりました。

しかし、国王であるのに席を離れるわけにもいきません。

ただ、黙つて見守ることしか出来ませんでした。

ナターリアが挨拶を終えると、その様子を見守つていた周りの人々が囁きました。

「あら、どうやら王妃はナターリアさまじゃなさうね。」

「やうよね。隣国の王族を婿に迎えた大臣の息女が側妃で、別の妃を王妃に迎えるわけにもいかないですものね。」

「王妃さまの母君でいらっしゃるのにお氣の毒なこと…。」

ナターリアはそんな人たちの中にいることが耐え切れずに走り出していると、遠慮がちに声をかけてきた人がいました。

夜会？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

書いててどっちつかずの陛下が憎たらしくなつてきました。
頑張つてナターリアをなんとかしたいです。

メアリーとの再会

「お姉さまー」

呼び止めたのは妹のメアリーでした。

結婚したばかりの夫で、宰相の次男のレオンも一緒に

「メアリー、来ていたの？」

嬉しそうにナターリアは妹のもとに駆け寄ります。

「ええ、陛下にご招待いただいたので、お姉さまにお逢いしたくて
…。」

メアリーも嬉しそうに姉に話しかけます。

「やうだつたの、陛下が…。あら、ご一緒にいるのはもしかしてレ
オンどのかしら？」

ふと気づいたナターリアがレオンに話しかけます。

レオンは微笑んで会釈すると、

「初めてお目にかかります、ナターリアさま。父から話しが聞いて
おりましたが、お美しい側妃さまでいらっしゃいますな。恐れ多い
ことながら、ご実家に婿養子に入りましたレオンと申します。以後
お見知りおきを願い上げます。」

「はじめまして、レオンどの。堅苦しい挨拶はいいのですよ。私た
ちは身内なのですから。どうか妹をよろしくお願ひしますね。」
ナターリアはレオンの手をとつて、にこやかに話しかけます。

レオンは、側妃といえば美人だけれど、気位の高い方と思っていたので、あさくなナターリアに驚きました。ましてや、第一王子の母です。

やや恐縮しながらもレオンは、答えました。

「恐れ入ります、ナターリアさま。第一王子の母君であられる側妃さまのご実家に相応しくなりますように務めます。」

それを聞いたナターリアは悲しそうに微笑みました。

「ナターリアさま…。」

遠慮がちにアンナが話しかけます。

「何かしら?」

「恐れながら、差し出がましいと存じますが別室でゆっくりお話しなされはいかがで?」
「ますか?」

それを聞いたナターリアは、パッと顔色が変わり嬉しそうに、「い、いいのですか…?」

「はい、もちろんで!」
「じります。」
「このよつなこともあらうかと?」
「用意しておりました。ああ、」
「案内申し上げます。」
「アンナが心得たようにそつ言つて案内をします。」

「ありがとうございます、アンナ。メアリー、レオンども、よろしいかしら?」
「嬉しいにナターリアが提案します。」

「ええ、お姉さま…。でも…。」
メアリーが言ひにくそうに夫であるレオンをちらりと見つめました。

それに気づいたレオンが、
「どうした、メアリー？まさか…。」

「だんなさま、申し訳ないのですけれど、お姉さまと一緒に話
したいので席を外していただけないでしょうか？」

メアリーが苦々しい表情でレオンに頼みます。

「あ、それは…、そうだな。」

レオンは少し傷ついたようにボソリと答えます。

「メアリー、ちょっとそれは失礼ではなくて？」
さすがにナターリアがメアリーをたしなめます。

「あ、あの、お姉さま…。一人だけで話したい」とがあるので、お
許しを…。だんなさまも…。」

メアリーが申し訳なさそうに言います。

ナターリアは困った顔をしながらも仕方なさそうに、
「仕方ないわね…。レオンどの、どうか妹のご無礼お許し下さいま
せ。」

そつとつて申し訳なさそうに礼をします。

その様子にあわてふためいたレオンが、

「お止め下さいませ。側妃さまにそのようなことをされましては、立つ瀬がございません。」姉妹でお話になりたいこともござこましょ「。眞にしておりませんので、お気遣いなさいませんよつ」。」
やつ言つて禮を返します。

「レオンどの、感謝します。このお詫びはいざれいたしますので。ナターリアはやつ言つてレオンの手をとつて感謝の意を伝えます。

そしてナターリアとメアリーは別室へと向かいました。

残されたレオンは、美しいナターリアに手を握られたので少しドキドキして、ほんのり顔を赤くしてぼんやりしながらも、やはり叔母の王太后のしたことがひつかかるのだらうかと立ち去っていました。

その様子をナターリアのことが氣になつて追いかけてきたアレクセイが目のあたりにして、少し恐い顔をしてレオンを問い合わせました。
「側妃と何を話していた？」

「これは陛下、お皿にかかれて光栄でござります。恐れながら、側妃さまにござ挨拶申し上げただけにござります。」

レオンは従兄弟とはいえ国王陛下に礼を取ります。

アレクセイは眉間にシワを寄せて不機嫌そうに、

「それだけか？それにしては、手を握つて、親しげであつたではな
いか！？」

「恐れながら申し上げます。ナターリアさまは私の妻の姉君に『レオン』といいます。妹のことによろしく頼むと仰せられただけで『レオン』といいます。レオンは不機嫌な国王陛下にいたせか緊張しながらも答えました。

「そ、そりであつたな…。して、皇妃はどうぞ？」

アレクセイは力を落とし、ナターリアの行方を尋ねます。

「恐れながら、ナターリアさまは我が妻メアリーと別室にて歎談中でござります。」

「そうで、あつたか…。しかし、レオンいやロブーヒナ公爵、誤解する行動は慎んで欲しい。ナターリアは義姉かも知れないが、皇妃で第一王子の母だ。」

アレクセイは嫉妬で歪んだ顔でレオンに言います。

「恐れ入ります。以後気をつけます。」

レオンは礼をして答えながらも心の中で冷笑していました。

母に頭が上がらず女一人守れないのに、嫉妬だけは一人前だな…。

さて、そのころナターリアたちは王宮の客間におりました。

「お姉さま、いつたいどういづ」となのですか？陛下よりはお姉さまを王妃にと聞いておりましたのに…。」

メアリーは心配そうに尋ねました。

「や、その話しさはもうなくなつたの…。」
ナターリアは悲しそうに答えました。

「それは、やはりシャルロッテさまの妹君の縁談のことですか？」
メアリーは苦々しい表情で確認するように尋ねます。

「ええ…、仕方ないの。気にしないで、メアリー。でも私、実はホ
ツとしているのよ。王妃なんて重荷だし、これで後宮の片隅で気楽
に生きて行けるもの。」
ナターリアは微笑んで答えます。

しかし、その姿は強がつてゐるようでは、メアリーには痛々しく感じ
ました。

「お姉さま、もういいですわ…。もう後宮を辞して下さいまじ。お
姉さまを不幸にしてまで、公爵家を存続させてなんになります。

」

メアリーは姉に取り繕ひながら涙声で訴えます。

メアリーとの懇話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これから、ナターリアのまわりが少しずつ変わっていくかもしれません。
よろしければお付き合いくつてもせ。

ナターリアは抱きついてきた妹を複雑そうな表情で、ただ抱きしめていました。

「メアリー、変わらないわね。幼いときから何があつたら泣きじやくつて、私のところにやつて来たわね。」

メアリーはそれを聞くとすつと、ナターリアから体を離して、慌てて涙をぬぐいました。

「お姉さま、私のことではござりませんわーお姉さまを案じてのことでござります。」

「せつ、だつたわね…。でも気にしないでいいのよ。私はローブーハナ公爵家の長女ですもの、これは義務だわ。」

ナターリアは悲しげな微笑みをたたえながら、きつぱつと言います。

部屋の隅に控えていたアンナはそれを聞いて何とも言えない気持ちになりました。

幼いときからアレクセイに仕えていたアンナでしたから、そんなナターリアの言葉を聞くと、

やはり、ナターリアさまは実家のために後宮に入れただけなの…？
愛してはいないのだろうか…。

陛下は本当に愛しておこでだけれど。

「お姉さま、何をおっしゃります。もう十分に義務は果たされましたわ。後は私が引き受けます。」

メアリーは勢いづいてそつ姉に訴えます。

ナターリアは驚いて、

「何を言つて、メアリー・レオンジの『縁は私が第一王子の母なればこそ。側妃でなくなれば、その『縁も消えます。分かっているでしょ?』」

「分かつておっますわ…。でも、このままではお姉さまはどうなります?」

メアリーは、力なく答えます。

「メアリー、私のことには気にしないでいいのですよ。それよりもお父さまはお元気なの?」

ナターリアは一番気になつていていたことを尋ねます。

「ええ、お姉さま。だいぶお元気になられて、だんなさまに公爵位を譲られたあと、お母さまと一緒に別荘に静養に行かれましたわ。メアリーはナターリアを安心させるように微笑んで答えました。

「そう…。レオンジのに気を遣つたのね。別荘って、もしかして、あの菜の花の綺麗な…?」

「ええ、あの綺麗な菜の花畑が近くにある別荘ですわ。よくお姉さんたちと花畑に遊びに行きましたわね。」

「そうだったわね。懐かしいわ。綺麗な菜の花が一面に広がっていて…。あの頃に戻れたらいいのに…。」
ナターリアは思わず懐かしそうに遠くを見るような表情で呟きました。

「お姉さま、やはり私が…。」

メアリーが思わず身を乗り出しつてナターリアに問いかけます。

それに気づいたナターリアは寂しそうに笑つて、
「メアリー、ちょっと言つただけよ。まあ、もう行きましょう。レ
オンビのにお待ちですよ。」

セツヨウヒナターリアは立ち上がり、アンナに皿配せをしました。

アンナは言つてくやうに遠慮がちに、
「あの、ナターリアさま…。恐れながらこのまま後宮に戻られては
いかがでござりますか?お疲れでしょう?」

「いえ、疲れてなどおりませんわ。夜会にもどります。まあ、メア
リーまいりましょ。」
ナターリアは微笑んで答えます。

「でも、お姉さまーあのよつなところに戻られる必要などあつませ
んわ。」
メアリーは不満そうに言つています。

「何を言つのです、メアリー？ 今夜は公爵を継いだレオンどのお披露目ではありますか？ それに私も王子の将来のために頑張らなくてはいけませんし。」

ナターリアはしつかりとした口ぶりで言います。

それは国王の側妃とは思えない立派な態度でした。

その迫力に気圧されたのかメアリーもアンナもナターリアに従つて、夜会の会場に戻りました。

夜会に戻つたナターリアたちはレオンのもとに向かいました。

「レオンどの、お待たせいたしました。公爵夫人をお返しいたしますわね。よろしければ、ご一緒に挨拶回りをさせて下さいませ。」ナターリアは微笑んでレオンに話しかけます。

それを聞いたレオンは、えつとういう表情をして、

「あ、あの…、それは恐れ多いことではござりますので。」

そんなレオンの戸惑いの様子を気遣つたメアリーが、
「だんなさま、お姉さまはだんなさまのお披露目をなさりたいおつ
もりなのです。」意向に従つて下さるまし。」

それを聞いたレオンは、ホッとしたのか、嬉しいのか分かりません

が安心した表情で有り難くその申し出を受けて、優雅に挨拶回りを始めました。

ナターリアは一歩踏み出します前にため息をひとつして、呼吸を整えました。

そして、顔を上げて微笑んで歩き始めました。

「「きげんよう、オルティス公爵夫人。」

「これは、もしや、側妃のナターリアさまでいらっしゃいますか？お逢い出来て光栄でござります。」

突然声をかけられた中立派の公爵夫人は戸惑いながら挨拶を交わしました。

「「こちら」お逢い出来て嬉しゅうござります。父から公爵さまのお話しさ聞いておりましたので。」

含みをもたすようにナターリアはにこやかに話しかけました。

「まあ、ロブーヒナ公爵さまがだんなさまのこと…？」公爵夫人は少し驚いて聞き返します。

中立派でしたから妃とはあまり関わりたくないと思っていたのですが、若いときに憧れたロブーヒナ公爵の話しが出たのでつい答えてしまいました。

それにナターリアは女ながらも若い頃のロブーヒナ公爵によく似ていました。

微笑まれると息をのむような美しさでした。

「はい。以前父のお見舞いに戻りました折に伺いました。ですが公爵夫人、父はもう公爵ではございませんのよ。」

「え、戻られたときですか……？」

公爵夫人は怪訝そうに尋ねました。

そもそものはずです。後宮に入った妃たちは規則により、よほどのことがない限り後宮から出ることが出来ません。外出する時は国王の許可が必要となります。

「あの……、恐れながらナターリアさまが公爵さまのお見舞いに伺いたいと陛下にお頼みなされたのでござりますか？ご寵愛深い側妃でありますゆえ、許可なされたの、ございましょうねえ。」

遠慮がちに公爵夫人が尋ねます。

その規則のことを知らないナターリアが不思議そうに、

「いえ、王太后さまのご配慮で馬車まで用意していただいて父のお見舞いに戻りましたの。それが何か？」

それを聞いた公爵夫人は信じられない気持ちでした。

王太后がもう一人の側妃を臚原にしているのは、周知の事実でした
が父の見舞いの口実があるとはいえ帰らせるとは……。

帰るときは実家から迎えが来るのが慣例だから、これは国王陛下の許可があつてのことではなさそうね……。

「そ、そのようなことがおありになられたのですね……。それは公爵

さまもお喜びでしたでしょうね？」

公爵夫人はややひきつりつつ答えました。

「ええ、私も帰れると思つておりませんでしたので父に逢えて良かつたですわ。」

それを聞いていた周りの人々が思わずざわめきました。

夜会？（後書き）

知らないといふことは恐いかも知れないです。

ちょっと王太后に不利な展開になつていきます。
ふつ…、楽しみです。作者ですが、一番の読者です。

夜会？（前書き）

すみません。更新が遅くなりました。

「まあ、さよう『ござ』りますか…。もし、ナターリアさま、お困りのこと『ござ』いましたらおつしゃつて下さいまし。私に出来るごとでしたら、ご支援させていただきますので。」

中立派のオルティス公爵夫人が気の毒そうにナターリアに支援を約束します。

ナターリアはそれを聞いて、

嫌味など言われこそすれ、支援の申し出を言われるとは思つてもいませんでしたので、こんなことは社交辞令ではないかしらと思い、戸惑いながらも丁重に断りました。

「ありがとうございます、オルティス公爵夫人。ありがとうございます、オルティス公爵夫人。ありがとうございます、オルティス公爵夫人。ありがとうございます、オルティス公爵夫人。」
出ではございますが、私は側妃の一人にすぎない身にござります。ご支援いただきましても、何のお返しも出来ませんので、お気持ちだけ頂戴いたします。」

「まあ、『遠慮』には及びませんわ。ナターリアさまは『謙遜』されておられます、側妃とは申しても第一王子さまの『生母』ではございませんか！それなのに、このようなお扱いを受けておられるなんて、黙つておられませんわ。ねえ、皆様方？」

オルティス公爵夫人が周りの貴族たちに呼びかけました。

周りにいた貴族たちは、あまりのことに憤慨する者、大臣に遠慮する者、いろいろでしたが中立派のオルティス公爵夫人の言葉は人望もありましたから無視出来るものではありません。

周りの人々が何人か、ナターリアに同情して次々と支援を申し出ま

した。

その様子に驚きを隠しきれないナターリアとロブーヒナ公爵夫妻がありました。

あまりの展開に驚いて、どうしてよいかわからないナターリアに代わつて公爵を継いだばかりのレオンが答えました。

「ありがとうございます、皆様方。ナターリアさまには、あまりの嬉しいお申し出に声も出ないようだございます。のちほど私の方からお返事させていただきたく存じます。」

「それもやうね。」

「ヨリでは人も多いことだし…。」

「では、お返事お待ちしておりますわ。」

オルティス公爵夫人がにこやかに答えます。

「ありがとうございます、オルティス公爵夫人。何分にも公爵位を継いだばかりの若輩者にございますれば、ご支援いただきますればナターリアさまや王子さまをお支えできるやも知れません。」
レオンが信じられない表情で緊張気味に受け答えします。

オルティス公爵夫人は、その様子を見て
訝し気に、

「確かにレオンどのは、宰相さまの「子息であられましたな。父君から」支援はないのですか?」

それを聞いたレオンは、困り顔で、

「いえ、それはここではちょっと…。また改めてお話をいたしますねえ、『ご容赦下りますよ』。」

「そうですか…。ではお返事をお待ちすることにいたしましたが。

オルテイスク爵夫人は、王太后の圧力でもあるのかしらと解釈して同情に満ちた顔で答えます。

それは支援を申し出た人々も同じことでした。

それを隣で聞いていたナターリアが何と思つたのか、執り成すように、

「レオンどの、誤解する言い方はしない方がよろしいのでは？」

「ナターリアさま、お気遣い恐れりますが、ここは私にお任せ下さいますよ。」

レオンがニヤツと笑つて答えます。

レオンは、父に何かと兄と比べられてきましたので、次男であるがゆえに養子に出された恨みもあり父に復讐というか見返すチャンスとほくそ笑んでいました。

「そう? レオンどのがよろしいのならいいのだけど…。」

ナターリアは心配そうに答えます。

ナターリアは公爵家に育つたわりには政略結婚ではない仲の良い両親のもとで育ちましたので、そんなレオンの思いなど知る由もなく、ただ父君との仲がおかしなことにならないかしらと心配しているの

でした。

「お姉さま、」心配には及びませんわ。私の夫ですもの、なんとかいたしますわ。」

メアリーも心配せつな姉に向かつて話しかけます。

「そうね……。」

ナターリアは少し疲れた表情で咳きました。

「それよりもお姉さま、お疲れではございませんの？少しお顔の色が優れないようですが……？」

メアリーは心配そうに姉を気遣います。

「いえ、だいじょうぶよ。夜会が慣れないものだから、疲れただけだわ。」

ナターリアは少し弱々しい表情で微笑みながら答えます。

「ナターリアさま、本当にお顔の色が優れないようではござりますよ。もう下がられた方がよろしいのではございませんか？」

オルテイス公爵夫人も気遣うように尋ねます。

「ありがとうございます。それではお言葉にあまえまして失礼をいたします。」

そつと立ち去りましたその時でした。

「ナターリアさま、お帰りでございますか？」

取り巻きをつれた大臣が現れました。

夜会？（後書き）

次は大臣とナターリアとの初対面です。
どんなことになるやう…。

今回もお読みいただきましてありがとうございます。
こんな拙いお話しを読んで下さるお心の広い皆様に感謝しております。

お読みになる前にお伝えしたいことがあります。

大臣の敬称についてですが、何としたらいいか考えましたが、「さま」で統一することにしました。

閣下は閣僚や将軍、貴族に対する敬称ですが、外交上で利用することが多いものだそうです。

さまは何か感覚的に違うような気がするのですが、さまに相手に敬意を現して使う一般的なものなので、これを使うことにしました。もし、いい敬称があれば教えて下さるとありがたいです。

ヘタレな作者で申し訳ありません。

夜会？

「これは、大臣さま…。」機嫌ゆるわしく存じます。」

オルティス公爵夫人がスッと大臣の前に現れて、にこやかに挨拶を交わします。

それを聞いた大臣が、意外そうな表情で、

「ごきげんよう、オルティス公爵夫人。思わぬところでお目にかかりますな。」

「意外でござりますか？ それはそうと、このたびのご令嬢のご婚約、お祝い申し上げます。」

オルティス公爵夫人が微笑んで、祝いの言葉を述べます。

「ありがとうございます。オルティス公爵夫人からも祝われるとは、娘も幸せものです。ところで、公爵はいざれにおいてで？」
大臣は顔は目は笑つてないものの、にこやかに答えました。

「あちらにおりますわ。呼んで参りましょ。」

オルティス公爵夫人はそう言つと、名残惜しげに公爵を呼びに行きました。

そこに残された大臣は、邪魔者は去つたといわんばかりに、ナターリアに近づき話しかけました。

「お初にお目にかかります、ナターリアさま。側妃シャルロッテさまの父でござります。」

ナターリアは少し緊張気味に、

「はじめまして、大臣さま。お田にかかるてうれしゅ「ハジマリ」です。このたびの「ハジマリ」令嬢のご婚約、お祝い申し上げます。」

「これは、側妃さまにまでお祝いいただくとは、些か面映ゆいですな。ところで、お帰りとお見受けいたしましたが?」

「ええ、少し気分がすぐれないもので失礼させていただけつかと思いまして。」

ナターリアは少し疲れたように答えます。

「それは残念ですね。お美しいナターリアさまがおいでになりますとこの夜会も華やぎますものを…。」

大臣はいかにも残念そうに言います。

「いえ…。他にもお美しい方々がおいでになりますのに、そのようなことは「ハジマリ」ですまい。」

ナターリアは俯き加減にそう言います。

「ハジマリ」謙遜を、ナターリアさま。お帰りになられる前に、お近づきのしるしに乾杯をいたしましょう。」

大臣はそう言うと側に控えていた侍女からワイングラスを受け取ると、ナターリアに渡すとします。

その様子を見たメアリーはスッと前に出で、

「恐れ入りますが、姉は気分が悪ついでであります。私は代わりにいただきたく存じます。」

それを聞いた大臣は少し不機嫌そうな様子です。

側にいた取り巻きの貴族の一人が心得たように、メアリーに向かっ

て咎めます。

「大臣さまが側妃さまこと話しておられるのに、無礼ではないか！」

普通の女性ならこれで怯むはずですが、そんなことで怯むメアリーではあります。

「申し訳ございません、大臣さま。側妃さまを思つがゆえで『じゃりますので、』『容赦を。』

そう言ってメアリーは、お辞儀をします。

そんなメアリーの様子を見た大臣は、なんだか咎められてるような気がしました。メアリーを咎めた貴族に向かつて、

「いや、もうよい。気にしておらぬゆえ…。」

大臣は形ばかりそう言って、制します。

そして、ナターリアに向かつて、

「姉思いの妹君をお持ちですな、ナターリアさま。」

「恐れ入ります、大臣さま。妹は私を思つてのことゆえ、『無礼は私が代わつてお詫びいたします。どうぞお許し下さいませ。』

ナターリアはそう言って、大臣に向かつてお辞儀をします。

それを見た大臣や取り巻きたちは、満足そうに微笑みました。

周りのいる貴族たちがざわつき始めたので、大臣が仕方なく、ナターリアを制しました。

「お止め下さいませ、ナターリアさま。私には何も氣にしておりませんので。」

そんなときにもルテイス公爵夫人が公爵を連れて戻つてきました。

その姿を見たオルテイス公爵夫人は驚いて、

「まあ、ナターリアさま！何をなさつておいでなのです？」

ナターリアは頭を上げると、何ともいえない表情で、
「いえ、妹が大臣さまに無礼をいたしましたので、代わりに謝罪を
していたところです。」

「まあ、そのようなことが？大臣さま、側妃さまに頭を下げさせる
なんて…。」

オルテイス公爵夫人が眉をひそめて尋ねます。

隣にいたオルテイス公爵も怪訝そうな表情で見つめます。

「いえ、私が勝手にしたことでもありますので。大臣さまは何も
おっしゃってはおりませんわ。」

ナターリアは遠慮がちに答えます。

「そうなのですよ、オルテイス公爵夫人。
大臣が少しだけ申し訳なさそうに言います。

「そうですか…。メアリーどのと申されましたな？公爵夫人になら
れたのですから、あまり姉君にご苦労をおかけしないようになさい
ませ。」

オルテイス公爵がメアリーに注意をします。

メアリーは、話しが大きくなり申し訳なさそうに、

「はい…。申し訳ございません。」

と言つて頭を下げます。

大臣は微笑んで、

「さあ、もうよろしいでしよう、オルティス公爵？ 皆でお近づきの
しるしに乾杯でもいたしましょ。」

そう言つと大臣は侍女に命じてグラスを配らせました。

そして、大臣、ナターリア、ロブーヒナ公爵夫妻、オルティス公爵
夫妻で乾杯をしました。

少しやつれ氣味のナターリアがグラスを傾けて飲み干そうとしたそ
の時です。

ナターリアの手からワイングラスが落ちて、その場に倒れていきました。

「ナターリアさま！」

「お姉さま！」

「側妃さまが倒れられた！」

「誰か、医師を！」

メアリーが姉の側に寄り添い、泣きながら、

「だから私が申したのですわ、お姉さま！ お飲みにならない方がよ
ろしかつたのに…。」

「それはどうこう」とだ…?」「

黙^黙を聞きつけたアレクセイが暗い低い声で問い合わせます。

「陛下…」

「陛下…」

アレクセイの登場にざわめきました。

「何をしてのです。すぐに側妃さまを部屋にお連れしなさい。ラウル卿をすぐ呼び、診察させるのです。」

後からついてきた女官長^{女官長}が指示をとばします。

ナターリアが部屋に移されて、その場にメアリーたちが残されました。

「して、どうこうとなのだ?」

アレクセイが怒りに満ちた表情でメアリーに尋ねます。

「は、はい。大臣さまがお姉さまにワインをすすめられましたが、お姉さまがご気分が優れないようでしたので、私が代わりにと申し上げたのです。でも、でも…、お姉さまは私の代わりに謝罪なさつてお飲みに…。ヒクッ…。」

メアリーは途切れ途切れに答えます。

それを聞いたアレクセイは怒りのあまり、顔色が変わり、

「大臣、しばらく王宮に留まるよう。密室を用意させる。」

低い地を這つよつた声で言い捨てると奥へ引き上げていきました。

「陛下……」

「お待ち下さい、陛下！私は何もしておりませんぞ。」

大臣が必死で言い募ります。

「どうぞ」とだ？」

「訳が分からぬが、どうやら大臣さまが無理にワインをお勧めになられて、ナターリアさまがお倒れになられたらしいぞ。」

「まさか、大臣さまが……。」

「いや、有り得るぞ。ナターリアさまは第一王子の『生母だからな。いなくなれば……。』

その場にいたたまれなくなつた大臣は呆然と立ち尽くしていました。

その大臣を侍女たちが密室に案内をしました。

侍女たちに密室に案内をさせたのは、王太后への配慮だったのかも知れません。

女官長が泣き崩れるメアリーに声をかけました。

「ロプーヒナ公爵夫人、さあ、お立ち下せませ。ナターリアさまのもとに参りましよう。」

「え、私が側にいてもいいのですか？」

メアリーが戸惑いがちに答えます。

「もちろんでござりますよ。ナターリアさまも妹君がお側にいれば心強いことでしょう。」

女官長が優しく微笑んで言います。

「はい、そうですわね。女官長、お姉さまのもとへお連れ下下さいまし。」

メアリーはそう言つて立ち上りました。

それを聞くと女官長は、側にいたレオンとオルティス公爵夫妻たちにも声をかけました。

「恐れ入りますが、ロプーヒナ公爵さま、オルティス公爵ご夫妻にも本日は客室にお泊り願えますでしょうか？」

レオンは少し驚きつつ、

「私たちもですか？」

「ええ、申し訳ございませんが。公爵夫人は興奮しておられる様子にて、もう少しお話しを伺いたく思いますので、付き添いをお願いいたしたく存じます。」

女官長が申し訳なさそうに言います。

「はい。そういうとしたら…。」

レオンとオルティス公爵夫妻もそう言つと、客室へ向かって行きました。

その日はそのまま夜会が行われましたが、大変なことになつたと噂でもちきりで普段の夜会とは違つたものとなりました。

夜会？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

いよいよ佳境に入つていきます。

反撃というか、立場逆転？していく予定です。

よろしければ、またお読みいただければ嬉しいです。

お待たせしました。
お気に入り登録が増えて嬉しい限りです。

密室にて？

「つぶふ…。」

「ナターリア、こっち来てー。」

誰？

私を呼ぶのは…

カールさま？

いえ、違うかしら。

誰なの…？

「お田覚めで、」ぞこますか？」

王宮お抱え医師・ラウル卿が心配そうに話しかけます。

王宮の大広間の近くの密室に運ばれたナターリアがゆっくりと皿を開けました。

「こは…？」

「王宮の密室で、」ぞいります。覚えておこでになられますか？夜会でお倒れになられましたので、こちりに案内させていただいたので

「いやーこます。」

ラウル卿が静かに答えます。

ナターリアはうつづなのか、ぼんやりした表情で、
「そうですの……。」

夢だったの……。

きれいな菜の花だった……。

あれは誰だったのかしら。

ああ、いけない。
もう起きないと。

ナターリアはそう思ふと、行動が早いのか、寝台から体を起しきつ
としました。

ラウル卿は驚いて、

「いけません、ナターリアさま。まだお体の具合がすぐれぬのです
から、おやすみ下さいますよつ。」
と言つてあわてて制します。

「いえ、もうだいじょぶですわ。」

ナターリアはだるそうな体を起こします。

「ナターリアさま、大事なお体なのですからどうかお休みトセ。」
ラウル卿はなおも押し止めます。

「大事な体…？私などいてもいなくても…。」
ナターリアはそう言つと皮肉そつに、フツと笑いました。

それを聞いたラウル卿は、いつも穏やかなナターリアがこんなことを言つなんて

と、驚きつつも、

「何を仰せられます。ナターリアさまは国王陛下の寵妃であり、またお子をみじもつておいでなので、」と、まことにまわよ。」

しばらくの沈黙のち、

「みじもつた、と…？」

ナターリアは眉をひそめてつぶやきました。

「さよひでござります。誠におめでたき」と、心懐妊心よりお祝い申し上げます。ナターリアさま、陛下も心配なされておいでござりますし、この嬉しい報告をせねばなりませんので、こちらで少しお待ち下さりますでしょつか？」ラウル卿はそう言つと、ナターリアに礼をしました。

「いえ、ラウル卿、この報告はしなくてよい。祝つよつな」とではない…。
ナターリアは不機嫌そうに吐き捨てるよつて言つてます。

ラウル卿は、なぜナターリアがそんなことを言つのか、信じられま

せんでした。

いろいろあるとは、思つてはいましたが…。

「な、なぜ、そのようなことを仰せられます…。それに陛下もですが、妹君のメアリー嬢いや今はロブーヒナ公爵夫人でしたな、ご心配なされて別室に控えておられます。せめてご無事をお伝えすれば、さぞ安心なされますでしょう。」

ラウル卿はわけが分からぬまま、なんとか説得しようとした。

ナターリアはため息をついて、暗い表情のまま、

「そうですね。分かりましたわ。お伝えしてきて下さい、ラウル卿。」

そう言つとナターリアは寝台に横になりました。

「かしこまりました。ではのちほどうかがいます。御前、失礼いたします。」

ラウル卿は礼をして客室を後にしました。

さて、ここは王宮の客室の一つで、アレクセイと女官長、ロブーヒナ公爵夫妻、オルテイス公爵夫妻がイライラしながらラウル卿の訪れを待つていました。

「はあ…、まだなのかしら。お姉さまはどうなつているの…。」

メアリーがいてもたつてもいられず立ち上りました。

そんな時です。

「ンンン…。

「ラウル卿でござります。側妃さまの診察結果の報告に参りました。アレクセイは思わず立ち上がり、ラウル卿の報告を求めました。

「おお、ラウル卿…。待っていたぞ。これへ参れ。して、ナターリアの様子は?」

アレクセイは思わず立ち上がり、ラウル卿の報告を求めました。

その様子を見た女官長は思わず眉をしかめました。

一医師を立つて迎えるなど国王の威儀にかかるからです。

もちろん女官長もナターリアのことは心配でしたが…。

「では、恐れながら」報告いたします。ナターリアさまは、少し心労がありの」様子ではございますが、ご病気ではございません。それに陛下が」心配の毒が入っている可能性でござりますが、一切そのようなことはございませんでした。」

ラウル卿はアレクセイの様子を窺いながら報告します。

それを聞いたアレクセイは、安心しながらも説し氣に、「…しかし、それだけでのよつなこと?」

横で聞いていたメアリーは、姉が無事だと聞いて安心したもの、「そんなことじと眞アレクセイの言つようがひつかかりました。

「はつ、それが、その…、ナターリアさまはこの報告はお望みではござりますが、じ報告させていただきます。」

ラウル卿は冷や汗をかきながら言います。

「どんなことだ、申して見よ。」

その場にいた全員が固唾をのんで、ラウル卿の報告に耳を傾けました。

「おめでとうござります。側妃ナターリアさま、じ懷妊でござります。」

ラウル卿が礼をして、報告します。

「懷妊…。」

「お姉さまが…。」

その場にいた誰もが驚きつつも嬉しそうな笑みを浮かべました。

「それは間違いなのか、ラウル卿！」

アレクセイは嬉しそうにラウル卿に尋ねます。

「はい、間違いございません。おそらくお倒れになられたのはご心労のせいもござりますが、つわりもせいいもあったのやも知れません。」

ラウル卿はにこやかではありますが、少々複雑な表情で答えます。

「そうか、めでたいことだ！」

アレクセイは満足そうな表情で言います。

その場にいた者たちもお決まりのよう、「陛下、側妃さまのご懷妊心よりお祝い申し上げます。」

と言い、礼をしました。

「皆、ありがとうございます。」

アレクセイが嬉しそうに答えます。

しかし…。

罪のない大臣を牢ではあります、客室に押し込めたのは事実です。

果たしてどうすべきか…。

女官長は複雑そうな表情でアレクセイの前に進み出で、

「陛下、ナターリアさまのご懐妊は誠におめでたいことではござりますが、大臣のことはいかがなされるおつもりでござりますか？」

「そ、それは…！」

アレクセイはうつと、答えにつまりました。

「陛下、恐れながら申し上げます。確かに大臣さまは、罪はございませんがロプーヒナ公爵夫人が止められたにもかかわらず、無理にワインを薦められたことは決して褒められたことではございません。疑われる行為をなさつたのですから、あまり気にされる必要はないのではないか」と。

オルテイス公爵が冷静に進言します。

アレクセイは少しホッとしたように、「そうか…。それもそうだな。しかし、大臣に礼は尽くさねばならぬかも知れぬな。」

それを聞いたメアリーは嫌な予感がしました。
まさか姉に大臣に頭を下げるつもりなのかしらと、思いました。

メアリーは思いつめた表情でアレクセイに尋ねました。
「陛下、恐れながらお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何かな、ロプーヒナ公爵夫人？」

「恐れながら陛下、よもやとは思いますがお姉さまに頭を下げさせようとお考えではござりますまいな。」

メアリーはふと、静かな怒りを感じさせぬよつと尋ねます。

アレクセイは、図星をされたよつと動搖しながら、
「や、そのようなことがあるわけがないだらつ。ナターリアは何も
していないのだから。」

セレジヤリに置み掛けようとして、レオンが、

「メアリー、失礼なことを申し上げるものではない。つわりで、」
分の優れぬ側妃さまを大臣に謝罪されることなどあるはずないでは
ないか。ましてや大臣を密室にと命じられたのは陛下「」自身でいら
っしゃるのですから。セレジヤリおもしおつ、陛下へ、
含み笑いをしながらレオンが言います。

「…や、そのとおりだ。これは余が解決すべきことだ。何も気にす
る必要はない。」

アレクセイが少しレオンを睨みつけながら答えます。

「恐れ入ります、陛下。妻もナターリアさまも安心なされる」と
「」

レオンはそつぬつと慇懃無礼のよつと礼をしました。

アレクセイは、

相変わらず食えない奴だな…。

とレオンを憤りしく思いましたが、自分が勝手にしたことをナター

リアに頭を下げる必要はないのは事実でした。

「ところでナターリアさまには、お加減はよろしいのですか？さきほど、ラウル卿は妙なことを言われましたが…。」
オルティス公爵夫人が心配そうに尋ねます。

お読みいただきありがとうございます。

今回はいれられませんでしたが、少しずつ大臣へのお仕置きが始ま
ります。

それにしても、陛下は…。

審査にて？（前書き）

お待たせしました。

アレクセイはそれを聞いて、えつとう表情をしました。

「え…、あ…、ラウル卿。それはどうにいことなのだ？」

アレクセイは動搖を隠しきれない様子で、ラウル卿に尋ねました。

ラウル卿は尋ねられて、些か困惑しながら答えます。

「は、それがその…。側妃さまには、始めは報告しなくてもよいとの意向でしたが、私の立場を申し上げますと、あるがまま報告するようなことのことでござります。」

「なぜ、そのようなことを…？」

アレクセイは顔色を変えて呆然としながら、ラウル卿に尋ねます。

「そ、それは、私には分かりかねます。恐れながら、側妃さまには何かお悩みがおありがあつてのことと存じます。」

ラウル卿は、

まさかナターリアが「祝うようなことではない」と言つていたとは言ひ出せないので、遠回しに言葉を濁して答えました。

アレクセイはそれを聞くと、ショックだったのか暗い表情で、座っていた席のひじ掛けに倚ってしまいました。

しばらくの沈黙のあと、虚ろな顔をしたアレクセイが尋ねます。

「ラウル卿、ナターリアに逢うことは出来るのか…？」

「え、はい、陛下…。わたくし、お田代めになられましたゆえ、少しのお時間でしたら可能でござります。」」案内申し上げましょうか?

ラウル卿は、虚ろな様子のアレクセイを気遣いながら答えます。

「頼む…。」

アレクセイはそう言つと、立ち上がってトボトボとラウル卿と一緒に密室を出て行きました。

その様子はまるで捨てられた子犬のようでした。
ビリモ国王陛下としての威儀はあつませんでした。

「ちよつと、何なの!私だつてお姉さまを心配しているの…。ほつたらかし!…?」

アレクセイとラウル卿が何も言わずに部屋を出てナターリアのものに向かつてから、あまりのことにメアリーが思わず叫びだしました。

「落ち着いて、メアリー。すぐ陛下も戻られるよ。」

レオンがポンと肩を叩いて、メアリーを慰めます。

そして、ちらつと女官長の方を向いて、

「やつだよね、女官長…?」

女官長は少し気まずそうに、頭を下げて、

「申し訳ございません、ロプーヒナ公爵さま。陛下には、側妃さまを心配のあまり出て行かれたものと存じます。私が様子を伺つて参りますので。」

「そう、悪いね？でも僕だけに謝られても困るなあ……。他にも、ね？」

レオンがニヤリと笑つて女官長に追い討ちをかけます。

女官長は、

「イツは……！」

いくら陛下のいとことはいえ……。

なんだかレオンが憎たらしくなりましたが、他に人がいなければと思いましたが致し方ありません。

ふううと、ため息をついて心を落ち着けて、また頭を下げました。

「誠に申し訳ございません、ロプーヒナ公爵夫人ならびにオルティス公爵ご夫妻。陛下に成り代わりましてお詫び申し上げます。ただいま様子を伺つてまいりますので、こちらで少しお待ちいただけますでしょうか？」

「いや、女官長。私どもは気にしておりませんので。」ひかりで待ちましよう。」

オルティス公爵が穏やかに話しかけます。

「ありがとうございます、オルティス公爵さま。」

女官長は少しホッとしたように答えます。

「まあ、私もそのようにしていただけたのでしたら、お待ちしますわ。でも、女官長みずからなんて、なんだか申し訳ないですわ。」
メアリーも少し機嫌をなおしたのか、女官長を気遣います。

「ありがとうございます、ロブー・ヒナ公爵夫人。私の役目でござりますから、どうぞお気になさいませんよ。」

女官長が微笑んで答えます。

「やうだよ、メアリー。気にすることないよ。だいたい女官長がまやかして育てたからこんなことになつたんだから。」

微笑んでレオンが軽口を言います。

その場にいた女官長以外の人間は、危うく吹き出しそうになりましたが女官長の前ですから、なんともいえない表情で、お互いの顔を見合わせました。

氣まずそうな表情で女官長は、

「レオンさまにはかないませんわ。では、私は様子を見てまいりますので失礼いたします。」

そつと置いて部屋を出て行きました。

ふふふ…
ふつ！

「だんな様たゞりつ…。ちょっと聞こすがじやないの…」

メアリーは女官長が部屋を出ていくと、たまらずに吹き出してしまいました。

「そんなことないよ。あのくらい言つたほうがいいんだよ。義姉君がお優しいのをいいことにあまえすぎてるんだし。」

レオンが少し憤慨したように言います。

「うーん、それは否定しないけどね。」

メアリーもそつまつと、微笑みながら、お茶を飲みました。

「ククッ…、ロプーヒナ公爵夫人、私どももそつ思ひますぞ。少し耳にはいつただけですが、王妃ではないにせよ、第一王子の母たる側妃にたいしてあまりのお扱いに存じます。」

オルティス公爵が少し笑いながら言います。

「あ、これは…。オルティス公爵、ありがたいお言葉にござります。」

メアリーは、姉ナターリアの敵ならいぐらでもいましたが、味方になつてくれた人は初めてでしたので少し戸惑いながら答えます。

「少し、警戒しておられますかな? ご心配には及びませんぞ。私は、大臣とはつきあいはありませんぞ。ただ、知らぬことはいえ、申しげることをしたと思いまして。中立の立場をとつていたとはいえ、王子の母たる妃にたいしてこのよつなお扱いとは…。何か出来ることがありましたら、何でもお申し付け下さいますよ。」

姉君さまにお伝え下さい。」

オルティス公爵が真摯な態度で、メアリーに話しかけます。

それを聞いたメアリーが少し信じられないような面持ちで、レオンを顔を見ます。

レオンははにこり微笑んで、

「心配ないよ、メアリー。公爵は大臣と違つてたぬきじゃないから信用できるよ。」

それを聞いたメアリーは少し安心したように笑つて、

「だんなさまたらつ！あの…、オルティス公爵、頼みにしてありますので、よろしくお願ひします。」

そういうとメアリーがペロリと頭を下げました。

「お仲のよひしこ」とね。ロブーヒナ公爵「夫妻は…。お任せ下下さい。出来るこことはいたしますので。それしても陛下はナターリアさまをもう少し庇つておしあげなくては、身の置き所がないでしょうに。」

オルティス公爵夫人が同情したよびにしんみりと話しかけます。

お詫びして？（前書き）

少し短いです。すみません。

さて、こちちは場所変わってナターリアのいる客室です。ほんやりとベットに横になつていたナターリアのもとにアレクセイとラウル卿がやってきました。

「失礼いたします。ナターリアさま、陛下があいだござります。」ラウル卿がナターリアに告げました。

「……。」

ナターリアは何と言つていいかわからず、顔を何ともいえない表情をしたままベットに横になつっていました。

「あの、ナターリアさま…。」

遠慮がちにラウル卿がナターリアに促します。

ナターリアは返事をしなければならないとは思いつつ、いま一番逢いたくない人、でも一番逢わなければならぬ人、それがアレクセイでした。

「あの、ラウル卿…。申し訳ないけれど、気分が優れないでお帰りいたくように伝えていただけないかしら？」

「あの、ラウル卿…。申し訳ないけれど、気分が優れないでお帰りいたくように伝えていただけないかしら？」

無駄だとは思いつつ、ナターリアはため息をつきながら、ラウル卿に頼みます。

「さよひでござりますか…。ですが、一日なりともお逢いになれませんでしょつか？」

ラウル卿は申し訳ない思いでしたが、隣室に控えるしょんぼりとしたアレクセイのことを思い浮かべて、ナターリアに頼み込みます。

「それは…。あの、ラウル卿、お願ひできないといふこと…」

ナターリアは唇をかみ締めながら、ラウル卿に尋ねます。

「いえ、そのよつな」とは…。かしこまつました。やのよひかのお伝えいたします。」

そつまつとラウル卿はナターリアのいる隣室を出て、隣室のアレクセイにそのことを伝えに行きました。

「…。でも、その…。側妃さまの意向でござりますので…。」

「…。しかし、一日だけでも逢いたい。」

アレクセイは、恨みがましい田つきでラウル卿に言います。

「ですが、その…。側妃さまの意向でござりますので…。」

ラウル卿は国王陛下の意向は絶対だとは思いつつ、ナターリアのような姿はじめてなので、どうしてよいかわからず困惑つて

おつました。

「あの、ラウル卿…。悪いが、一目だけでいいからとナターリアに伝えてもらえないだらうか？話したいこともあるし…。」
アレクセイは思いつめたようにラウル卿に命じます。

誤りたい…。

本当なら王妃候補としてのお披露目のはずだったのに…。

ラウル卿は、困った顔をしながら、

「かしこまりました。お伝えしてまいります。」

そう言つて、ナターリアのもとへ行きました。

弱りきつたラウル卿がナターリアのもとへやつてきました。

「あの、ナターリアさま…。」

言ひづらそうにラウル卿がナターリアに話しかけます。

「無理でしたの、ラウル卿？」

ナターリアがベットから身を起こして、不機嫌そうにラウル卿に尋ねます。

「申し訳ございません、ナターリアさま。一寸なりと陛下が仰せられまして。お話しになりたいことがおありの様子にござります。」
ラウル卿は平謝りをして、ビクビクしながらナターリアに答えます。

「分かりました。私は話すことはないのだけれど…。」
はき捨てるよにナターリアはそつまつと、側にいた侍女に身支度を整えさせました。

「ナターリア…。」

アレクセイがこわいわと部屋に入つてきました。

「アレクセイさま、よつこそおいでくださいました。
ナターリアがいつもと違つて、冷淡な様子でアレクセイを迎えました。

「あの、ナターリア…。今日はすまなかつた。」

アレクセイが申し訳なさそうにナターリアに話しかけます。

「いえ…。お話とは、そのことじょつか?」

ナターリアが少し顔を強張らせて、アレクセイに尋ねます。

「それと…、ラウル卿から子ができたと報告を受けた。大事にして
くれ。私にできることはなんでもするから。」

アレクセイが少しうれしそうでしたが、腫れ物に触るよつこナターリアに話しかけます。

「何でも、でござりますか?」

ナターリアは眉をひそめてアレクセイに尋ねます。

「ああ…、今日のじとのお詫びもかねて、出来ることとする。」

アレクセイは力強く言いました。

なんでも…。

それならば…。

「では、私をいいますぐ王妃にして下せこませ。」

ナターリアはアレクセイを試すように言い放ちました。

「そ、それは…、ナターリア。申し訳ないが出来ない。」
アレクセイは力なく答えました。

「分かっていますわ。でも、なんでもと、仰せられましたの…。」

ナターリアは自嘲気味に言いました。

「すまない。でも、ナターリアを王妃にしたいとこの気持ちは本當なんだ。そのうちなんとか…。」

「アレクセイは、苦しそうにナターリアに言います。

分かってくれるだらうか…。

あの大臣の娘と隣国の王族との縁談さえなかつたら、今頃は…。
ナターリア。

「やうですか…。でも、出来ない約束はなさない方がいいのでは
ないですか?」

ナターリアは、分かつてはいてもつこ言つたくなつてしまい、辛らつな言葉がでてしましました。

ナターリアのその的をついたよつた答えに、アレクセイは返す言葉もありませんでした。

「あの、アレクセイも…。その代わりと言つてはなんですが、お願いが」」ぞいますの？聞いていただけますか？」
ナターリアが少しあまえるよつてアレクセイに尋ねます。

「何だ？私に出来ることなのが…？」

少し怯えるよつてアレクセイが尋ねます。

「ええ。たいしたことではありませんわ。わたくし、しばりく里下
がりをさせていただきたいのです。王子を連れて。」
「ひりと笑つてナターリアが言いました。

審査にて？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
拙い話でお恥ずかしいです。

ついにナターリアも陛下を見限るのかな…。

ナターリアの旅立ち

夜会も終わり、静まりかえった王宮の客室の一つで、側妃ナターリアの発した言葉によつて国王アレクセイは、目の前が真つ暗になつてしまい、呆然としてしまいました。

え…。

実家に、

里下がりつて…

ナターリア…

それは、

もしかして…

「なんで…？」

それを言つたアレクセイの様子はまるで捨てられた子犬のようでした。

こんな日が来るなんて思いもしなかつた…。

ナターリアがいなくなる？

そんな…。

ナターリアは、そんなアレクセイを見て思わず初めて出逢つた菜の花畠のときのことを思い出していました。

あのときもひどい表情をしていた。

確か母君の束縛が…なんて言つてたかしり…。

国王として逢つてからはその面影もなくなつていたけれど。

「…リア、ナターリア？」

いまにも泣きそうな顔をして、アレクセイが問いかけます。

ハツと我に返つたナターリアは、そんなアレクセイの姿を見ると氣の毒になり、ここにいようかしらとも思いましたが、でも、後宮に入つてからというものあまりいろいろありすぎて、すっかり疲れてしまいどこか遠くに行つてしまいたい気持ちが出てきました。

それに、お父さまに逢いたい…！

ナターリアは気づいていませんでしたが、心のどこかにカールに逢いたいという思いもありました。

父はいまあの、菜の花畠のある別荘で療養をしています。

隣国に王女について行つてしまつてはいるので、いるはずもないのに…。

それでも、あそこは幼い頃、カールと遊んだ思い出のつまつたところです。

そして、アレクセイと初めて出逢つたところです。

ナターリアはため息をついて、
「じめんなさい。私、少し疲れたの。少しお父さまの側で休ませて
欲しいの。」

「疲れた、の……？でも、父君の側でじめんなからこなくなるん
だよね……？」

「ええ……でも、何でも出来ることはあると仰せられたでしょ？」「
ナターリアは少し唇を噛み締めて、アレクセイに言います。

こんなことも叶えてもらえないの？

「それはそうだが……帰つてくるよね？」

アレクセイが少し不安そうな顔をして尋ねます。

アレクセイはなんだかナターリアがこのままじきに行つてしまつ
戻つてこないような気がしたのでした。
それは予感のようなものでした。

あの会話を聞いてしまつたアレクセイはとつては……。

「はい……」

ナターリアは複雑そうな顔で答えます。

「それなら、ナターリアの父君の前公爵は確かに別荘に静養のため滞在いると聞いた。その近くに離宮がある。そこで、静養という形にしてもらえないだろうか？」

アレクセイが窺うように尋ねます。

「どうこういとどすか？私は里下がりをと、申し上げたはずですが…。」

ナターリアが怪訝そうに聞き返します。

「いや、形だけでよいのだ…。いろいろ申すものもあるゆえ、あちらに着くまでの間そういうことにして欲しい。ダメか…？」
アレクセイが苦しそうにナターリアに頼み込みます。

「アレクセイさまはこんな時にも私の気持ちを優先して下さらないのですね…。」

ナターリアは寂しそうにうつぶやきました。

「ナターリア、すまない。だが、あちらに着いたら父君のもとに行けばよい。ナターリアのためなのだ…。」

アレクセイは申し訳なさそうに答えます。

ナターリアはまた唇を噛み締めて、

「分かりましたわ。陛下のお心遣い感謝いたします。では、もう疲れましたので休みます…。」

言葉は丁寧でしたが冷ややかな声でそう言つとナターリアは、アレクセイに背を向けて横になつてしましました。

それはアレクセイにとつて、初めてナターリアの冷たい態度でした。本来は不敬なのでしょうが、あまりのことに呆然としてしまいました。

二人の間にまた子供が生まれるというのに…。

「分かった。じゃあ、大事にしてくれ。手配はしておぐ。」
アレクセイはそう言つと、寂しそうに密室を出て行きました。

パタン…。

行つてしまつた…。

悪いことをしてしまつたかしら。

ナターリアは少し後悔しながらも、後宮を出でなつかしいお父さまに逢える…！

そのことを考えるだけで心が弾みました。

アレクセイは密室を出ると、そわそわと待つ女官長がいました。

「女官長、どうしたのだ？」

アレクセイが少し驚いて尋ねます。

「あ、はい…。皆様方が「心配なわれじめうれましげ、お迎えに参りました。」

女官長が複雑そうな表情で答えます。

「ああ…。そうだったな。戻るか。」

アレクセイは、気のない返事をしつつ、ナターリアのこの密室を振り向いてドアを眺めました。

「陛下…？」

女官長が心配そうに尋ねます。

「いや、なんでもない。行くぞ。」

アレクセイは何かを振り切るよつて、女官長を連れてメアリーたちのこの密室へ戻りました。

「陛下、ナターリアさまの「」様子はいががで「」ぞひこましたか？」
歩きながら女官長が心配そうに尋ねます。

「ああ、少し気分が優れない「」だが、大丈夫な「」だ。ちょうど女官長に頼みたいことがある。」

少し暗い表情でアレクセイが答えます。

「「」のよつな」と「」ぞひこますか？」

「いや、それは公爵たちのもとで話が「」。ここでは誰が聞いてるか、

分からぬ……。」

「かしこまりました……。」

女官長は思わず周りを見渡しました。

そのまま一人は黙つたままメアリーたちの待つ姫室に向かいました。

「失礼いたします。陛下がお戻りでござります。」

女官長はそう言つてアレクセイと共に部屋に入つて行きました。

「待たせたな、公爵方。」

アレクセイが無理に微笑んで言います。

「いいえ、陛下。それよりお姉さまの、様子はいかがなのですか？」
メアリーは姉のことがよほど心配なのか、勢い込んで尋ねます。

「ああ……、心配はいらぬ。気分が優れぬようすで、もう休んでいるが
……。」
少し暗い表情でアレクセイが答えます。

「まあ、お姉さまは大丈夫なのですか？」
メアリーが不安そうに尋ねます。

「ああ、大丈夫だ。しかし、静養が必要のようだからじばらく離宮

に移そつと思つ。」

アレクセイが意を決したよつて聞こます。

「え…一陛下、ナターリアさまを離宮にお連れになるのだけれどもすか？」

女官長が少し驚いたよつて尋ねます。

「ああ、だかそれは表向きのこと。ナターリアは父君にお逢いしたいゆえ、近くの離宮に静養にいく形をとる。ロブーヒナ公爵いやレオンさまぬが、里下がりをお願いしたい。」

「里下がりですか？しかし、なぜそのよつなややこしさをなさるのです？」

レオンが怪訝そうな顔で尋ねます。

「それは…ここにはいろいろ申すものも多い。そつこつとこしておいた方がいいと判断したためだ。」

アレクセイは少し気まずい表情で答えます。

レオンはそれを聞いて、呆れたよつたため息をついて、

「やれやれ、世間では国王陛下の寵妃にして第一王子の母君であるナターリアさまを羨む者も多いといつて。現実はこんなものですか…。」

アレクセイは、事実ですので返す言葉もなく暗い表情で押し黙つて

しました。

確かに何もしてやれてない…。

はあ…。

王子を生んでくれたのに。
王妃の地位も与えてやれず。

側に控えていた女官長がさすがに、

「公爵さま、それは少しお言葉が過ぎるのでござりませんか？」

そう言ってレオンをたしなめます。

「無礼であると申すのか、女官長？謝罪が必要なら謝罪もしよう。
しかし、義姉君に対してあまりのお扱いで黙つてはおられなかつた。」

「

レオンは憤慨したように言い募ります。

その瞬間、客室の空気は一変しました。

その空気を打ち破つたのはオルテイス公爵夫人でした。

「おほほ…。レオンどのは、ロブーヒナ公爵になられても怖いもの
知らずでいらっしゃること。さすがは宰相さまの秘蔵つ子ですわ。
さあ、レオンどの…。」

オルテイス公爵夫人はさつまつと、レオンに田配せをしました。

「申し訳ございました、陛下。」

レオンはしぶしぶでしたが、頭を下げて謝罪をしました。

アレクセイもそれを見て苦々しい顔から少し顔が和らぎました。

その様子を横田でちらりと見たオルティス公爵夫人は、にこやかに微笑んで、

「陛下、こうしてレオンどのも謝罪なされたことですし、私に免じてお許し下さいまし、ね？」

アレクセイはホッとしたよう、

「オルティス公爵夫人にはかないませんね。内々のことですし、何も気にしておりませんよ。では、もう遅いですし公爵方にはゆっくりお休み下さい。女官長、後を頼むぞ。」

そう言うとアレクセイは客室を出て私室に戻つて行きました。

その夜は、ロプーヒナ公爵夫妻、オルティス夫妻は客室に泊まり翌日に屋敷に帰つて行きました。

そして、ナターリアも翌日には何かに追われるようになり王子とともに離宮へと旅立つて行きました。

王子の母といふこともあり、何台もの馬車で護衛に囲まれての旅立ちでした。

「行つたか…。」

王宮の一室の窓際で涙をこぼして見送るアレクセイの姿がいました。

「陛下、大臣をまととのお約束の時間でござります。」

侍従が王宮の客室に泊まつた大臣との謁見時間を知らせてきました。

ナターリアの旅立ち（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これからアレクセイに頑張つてもらひ予定です。
。

大臣との謁見（前書き）

対決です。

大臣との謁見

「やうか…。」

侍従に後ろ姿を向けたままアレクセイが鷹揚に答えます。

侍従に分からぬようにそつと涙を拭つと、

「では参らう。」

やつぱりアレクセイは正面を向いて部屋を出ていきました。

部屋を出していく寸前、ふと思いついたように侍従に尋ねます。

「ところで母君はいかがなされておる?」

侍従は陛下付きのせいか後宮のことまでは分からぬのか、といったことで答えられず恐縮しながら、

「も、申し訳ございません。私には分かりかねますので、謁見の間にて女官長がお待ちですのでそちらでお聞きいただけませんでしょうか?」

それを聞いたアレクセイは思わず眉をひそめて、

「大臣に逢う前に確認したかったのだが…?」
不機嫌そうに答えました。

「も、申し訳ございません、陛下。」

侍従は恐縮のあまり床に頭をつけんばかりに謝罪します。

「陛下、私ならここに控えております。」

部屋のドアの前で女官長が現れました。

「女官長、謁見の間ではなかつたのか？」

アレクセイが少し驚いたように答えます。

「その予定でしたが、陛下が王太后さまのことをお気にかけている
かと存じまして、こうして参りました。」

女官長は何か心得たようにゆつたりと答えます。

アレクセイはこつこつと笑つて、

「さすがマーヤだな。して母君にはいかがなされておられる？」

「恐れ入ります。王太后さまには、大臣さまが面会を申し出があつ
たようだ」じりじりしましたがお許しにならなかつたようだ」じりじります。
女官長は何か腑に落ちないようになります。

「はい、なぜお許しにならなかつたのか？母君なら謁見の間にも押
しかけて来るのではないかと思ったが……？」

アレクセイも腑に落ちないようになります。

「はい。私もそのように思いましたが、王太后さまには謁見の間に

もお越しになら「様子は」わざとせん。陛下にも「お前が」も向つておりません。何かおありになつたのでじょうか。」

女官長は何か考え込むよつて言います。

「へ、うか…。何か企んでおられるよつて不気味だな。」

アレクセイは我が母ながら、何を考えているか分からずと考え込んでしまいました。

母は私を国王にすることだけを生きがいにしている方だと思つていつたが、父君の寵妃の子であるテオドーラを父君の頼みとはいえ、我が子同様に育てた方…。

何か別の思いがあるのか…。

「なんとも申し上げかねますが…。しかし、謁見の時間が迫つております、陛下。」

女官長はなんとも言えない表情で言います。

「わうだな。しかし、母君が来ぬとなればやりやすいやもしれぬな…。」

アレクセイは些か困惑しながらも、前向きに言えます。

「その意氣でいざこりますよ、陛下。さあ、お時間が迫つてあります。

参りましょ。」

女官長がアレクセイを元気づけるよつて言います。

「行くか…。」

アレクセイはふう~と深呼吸をしてから、女官長とともに大臣の待つ謁見の間に向きました。

「陛下、しつかりなわつて下せこまし。ナターリアさまのおためで
『じぞこますよ。』

謁見の間にたどり着いた女官長がアレクセイに囁きました。

「分かっている…。」

少し緊張気味にアレクセイが答えました。

中にはタヌキかキツネか…。

「陛下の御成りで『じぞこます。』

侍従がアレクセイの訪れを告げました。

中で待つ大臣、ロブー・ヒナ公爵夫妻、オルティス公爵夫妻らが一斉に頭を下げました。

「大臣を始め公爵夫妻方、待たせたな。」

アレクセイが声をかけながら、玉座に座りました。

「とんでもございません、陛下。」

「恐れ入ります、陛下。」

口々に大臣や公爵たちが答えます。

ひときしり答えた後、沈黙が謁見の間を支配します。

アレクセイの側に控えていた女官長がわざとらしく、コホンと咳をしてアレクセイの方をちらつと見ます。

アレクセイはたらりと冷や汗をかく思いで、大臣に謝罪の言葉を述べます。

「ところで大臣、昨夜のことは申し訳なかつた。許せ。」

「陛下、恐れ多いことではござります。私はよろしいのですが、この
ような疑いをかけられて我が娘の婚約者が何とお思いになるか考
るだけで身震いがいたします。」

大臣はニヤリと笑つて、恐れ入る様子をしながらもチクリと嫌味を
言います。

アレクセイはうつと、つまりながら、

「そ、そのことは誠に申し訳ない。しかし、側妃がいきなり倒れた
のだ。関係者に話を聞く必要上、致し方なかつたのだ。察して欲
しい。」

苦しそうにアレクセイが大臣に証明します。

「それはそうかも知れませぬが、他にも方法があつたように思いま
すが、いかがでございましょう？」

大臣は丁重な言い方をしていますが、尚も不満を言い募ります。

さすがにその様子に見かねたのか、オルティス公爵が言い咎めます。
「大臣、もうよろしいのではないか？陛下も謝罪なさつておられる
ようですし、大臣だけがこの王宮に留まられたわけではありますま
い。」

「これは、オルティス公爵。ずいぶんと寛大なお心をお持ちでいら
つしゃいますな。」

眉をひそめて大臣はオルティス公爵に言い返します。

「大臣は何を言われておられるのやら…。我々は陛下にお仕えする臣下ではありませぬか。陛下が謝罪なさつていてる以上、それを受け入れるのが臣下としての勤めと言つもの。」

微笑んでオルティス公爵が嫌味のように大臣に語りかけます。

「それはそれは…。オルティス公爵は臣下の鏡でいらっしゃいますな。私のような者には、到底真似できませぬな。しかし、私が疑いをかけるということはシャルロッテさまや我が娘の婚約者を軽視していることに他ならぬことゆえ、到底容認いたしかねます。」大臣も怯むことなく言い返します。

タヌキめ…。

「ここに叔母君もおりぬのに叔母君を傘に着るつもりか…。」

「大臣もなかなかおっしゃいますな。しかし、陛下の御前でそこまでおっしゃつてもよろしいものでしうかね。」
含みを持たせたようにレオンが割り込んできました。

大臣はこの若僧がと思いながら、

「これはレオンどのいや、ロブーヒナ公爵。聞き捨てならぬことを…！」

少し睨みつけながら言います。

「おお、怖い…。そんなに睨まないで下さいよ。」
レオンがその場の空気を読まないような軽口をたたきます。

その様子を見たメアリーが大丈夫かしらと、不安そうに見守っています。

その側にオルティス公爵夫人が、大丈夫よと言うように微笑みました。

「大臣、ロプー・ヒナ公爵はまだお若いのですから…。」

オルティス公爵は執り成すように大臣に言います。

「それもそうですが…。」

大臣は些か不満そうに言い募ります。

「ロプー・ヒナ公爵、もしや何かおっしゃりたいことがおありなのは？」

オルティス公爵がレオンにアイコンタクトをして、尋ねます。

「そうですね。大臣は昨夜、我が義姉のナターリアさまに頭を下げさせておられましたよね？メアリーがたかがワインを断つたぐらいで…。」

ニヤリと笑つて、ちらりとアレクセイの方を見ます。

それを聞いたアレクセイは、わなわなと奮えながら、
「それは本当か、大臣……！」

さすがの大臣も少し怯んで、

「「」、誤解なさらないで下へこ、陛下。側にいた者が申したことです、
私は止めたのですぞ。」

「おやおや、都合のいいことをおっしゃる。公衆の面前でしつかり
頭を下げさせた後で止めたくせに……。」
レオンが涼しい顔で痛いところをつきます。

大臣は痛いところをつかれて、
少しあり過ぎたかと思いながら、
「な、何をおっしゃいますのやう……。突然のことで驚いていただけ
に「」といいますぞ、陛下。」

「謝罪する必要はなかつたかも知れぬな……。」
アレクセイが暗い表情で大臣につぶやきます。

「誤解で「」といいます、陛下。ナターリアさまにお聞きになれば分か

ることにござりますぞ。私はナターリアさまに謝罪を要求したことなどありませぬ。」

大臣は少し焦りながら訴えます。

「大臣さま、恐れながらナターリアさまは静養のため離宮へと出發なさいましてもう王宮にはおいでではございません。」

女官長が冷ややかに大臣に言います。

「え…！離宮に行かれたと…？」

大臣は残念そうなしかし、少し嬉しそうな表情で答えます。

「大臣、心なしか嬉しそうですね？」

嫌がらせのようにレオンが大臣に尋ねます。

「冗談が過ぎますぞ、ロブーヒナ公爵。私はただ、ご懐妊のお祝いを申し上げたかつただけですぞ。」

大臣はその場を取り繕つように、言い返します。

「それは失礼をしたな。ナターリアも大臣の気持ちは有り難く思つてゐることであろう。」

アレクセイは微笑んで大臣に話しかけます。

「恐れ入ります、陛下。このたびのこと、私にも手落ちがあつたことですし、謝罪を受け入れなかつたことに致しましよう。」大臣は丁重にアレクセイに答えます。

まあ、今回は謝罪も引き出せたし、何よりも我が娘の最大のライバルが王宮から消えてくれたのだから良しとするか。また子供が出来たのは些か気になるが…。

「そうか。感謝するぞ、大臣。では今日は執務には及ばぬ。もう下がつて休むが良い。」

アレクセイがホツとしたように大臣にそういって、下がらせました。

ふう~。

なんとか乗り切つたな…。
しかし、大臣め、なんてことを…。

アレクセイはふつふつと湧き出る怒りを抑え切れませんでした。

ハカルの暴言（詛讐言）

お待たせしました。
すみません、あまり進んでません。

パタン…

「しつかし、たぬきじじいのものだな。よくしゃあしゃあと…。大臣が去った後、レオンがおもむろに口を開きました。

「だんなさま、陛下の御前ですよ。」

メアリーが少し笑いを含みながら、レオンをたしなめます。

席に座っていたアレクセイがなんとも言えない表情でため息をつきました。

「はあ…。大臣はああいつ人間だからな。」

「分かつていてるのなら、何か手を打つべきではありますか?」レオンが辛らつな言葉をアレクセイに投げかけました。

アレクセイはうつ、と言葉に詰まりながら、

「分かつていてるが、今のところ手がないのだ。」 うつうつと、思わず顔をしかめました。

「何とこい」とですか。だから、義姉君は王室を出されたのでしょうか。お氣の毒に…。」

レオンはアレクセイのいとこであるせいか、遠慮のない言葉をいいます。

その直後、謁見の間の空氣が緊張につつまれました。

「…レ、レオンさま、いえロブーヒナ公爵さま! それはあまりに無礼ではありませんか?」

女官長がわなわなと震えながらレオンに注意を促します。

メアリーはさすがに心配そうにレオンの様子を窺い、レオンが心配ないからと言いつつに微笑みました。

レオンは悪びれもせず、

「これは、失礼を致しました。陛下に對して誠に無禮で、」ぞごました。お許しを願います。」

そつ言つて神妙そうに平伏しました。

「ロブーヒナ公爵、許すゆえ頭を上げよ。」

アレクセイはレオンの言葉によつて傷つきましたが、事実なので、反論するわけにもいきません。

それに、頭を下げて誤つてはいる以上許さないわけにもいきません。それに何より、愛するナターリアの実家の人間でもあります。処罰したとなれば、ナターリアがどんなに悲しむことでしょう。

まったく、こいつは自由に発言してから…。処罰しにくいうつことを分かつてはいるのか。国王の立場にもなれ…。

「ははっ。寛大なお心に感謝致します。」

レオンは何か含むような笑みを浮かべて頭を上げました。

そばにいたメアリーもホッとしたように、「感謝申し上げます、陛

下。」

モツアレクセイにお礼を申し述べました。

「ふふ…。まったくロプーヒナ公爵は怖いもの知らずですな…。」

オルティス公爵が笑つてレオンに話しかけます。

「恐れ入ります。」

アレクセイには、いとこの気安さと義姉のナターリアのあまりの扱いに憤慨していたせいもあり、些か言葉が辛辣でしたが、人望のあるオルティス公爵にかかるては恐縮して、レオンはうつむき加減で答えます。

「さすがのロプーヒナ公爵さまも、オルティス公爵さまには弱いと見えますね。」

女官長はレオンをからかつよう言ひます。

「女官長、ロプーヒナ公爵をあまりからかうものではない。」

アレクセイが少し機嫌をよくしたのか、笑いながら女官長をたしなめます。

「これは、失礼を致しました、陛下。ロプーヒナ公爵さま、申し訳ございません。」

女官長がしまつたと言つよひにレオンに謝罪しました。

レオンは謝られて、なんとも言えない表情でアレクセイの方を見ます。

「もうよろしいではございませんか？それよりこれからのことを考えせんと…。」

オルティス公爵夫人が遠慮がちに割り込んで入りました。

「そうだな。レオンが余計なことを申すからな。」

アレクセイが自由に生きていることにレオンを睨みつけました。

「も、申し訳ございません。」

レオンがしぶしぶ答えました。

「恐れながら陛下、これからどうなさるおつもりでござりますか？」
オルティス公爵夫人が遠慮がちにアレクセイに尋ねます。

「どうするとは…？」

アレクセイは少し緊張しながら言いました。

「もちろんナターリアさまのことどうぞいます。たとえシャルロッテさまが王妃になられるとしても第一王子の母君に相応しい待遇にして差し上げなくてはなりません。私どももいままで知らぬこととはいえ、何も出来ずに申し訳なく思つております。」

オルティス公爵夫人が沈痛な表情でアレクセイに訴えます。

「陛下、及ばずながら私に出来ることは協力させていただきますので…。」

続いて慎重なオルティス公爵もアレクセイにたたみかけます。

「あ、ありがとうございます。オルティス公爵夫妻、その言葉嬉しく思つづ。

「アレクセイも今までナターリアに對して好意的な貴族たちに出逢うことがなかつたので、少しまどつてしまつたが、国王としての偉ぶつた返事を返しながらもなんだか嬉しくなつて表情がゆるんでしまうのを隠し切れませんでした。

父が早くに亡くなつたため、若くして国王に即位してからといつも、アレクセイはいつしか国王の仮面を被るようになつていていたのでした。

その仮面が外せるのはナターリアだけだったのですが……。

その年季の入つたアレクセイが表情を隠しきれないとは、よほど嬉しかつたのでしよう。

「感謝申し上げます、オルティス公爵さま。陛下が謁見の間でのように喜ばれたのは久しぶりでござります。」

女官長も乳母として育てたアレクセイが喜んでいる姿が嬉しいのか、妃に対して公平であらなければならぬ立場を忘れて感謝の言葉を伝えます。

「恐れ入ります、陛下。しかし、臣下として当然のことではござりますゆえ、礼には及びませぬ。」

オルティス公爵が臣下の礼をじつに、ここやかに答えます。

「それにしておかしいな？あの叔母君が何にも言つてこないなんて…。陛下はどう思われます？」

レオンが不思議そうにアレクセイに尋ねます。

「うーん、実は僕もそれが謎なんだけど、ね…。そうだ！レオン、母君のところに行つて何か聞き出して来てくれ。」
アレクセイはポンといふことを思いついたようにいたずらっぽくレオンに頼みます。

「な、何言つてるんですか？嫌ですよー。あの叔母君ですよ。また、ぐだぐだと説教受けるだけでなんにも聞き出せませんよ。」
レオンが本当に嫌そうに首をぶんぶんと振つて拒否します。

「くつ…。レオンにも怖いものがあつたのか？」

笑いを含みながらアレクセイが尋ねます。

「からかわないで下せりよ。ただ、ちょっと苦手なだけですよ。あ、それより、陛下が聞き出して来られてはいかがですか？かわいい一
人息子だからすぐに何でも教えてくれますよ、きっとー。」

アレクセイはそれを聞いた瞬間、目が泳いでしまいました。

「いや、たぶん無理だ！最近は、ナターリアのことで仲が良くないんだ…。」

弱り切つたようにアレクセイが答えます。

「あの…。」

何か言いたそうにメアリーが田で訴えます。

「何、メアリー。どうしたの？」

レオンが振り向いて、メアリーの顔を覗き込んで尋ねます。

「あの、だんなさま…。どちらでもいいんですけど、お姉さまのために王太后さまの『』意向を聞いて来ていただけませんか？」
あまるようにメアリーがレオンにお願いをします。

それを見たレオンは、蕩けるような表情なり、

「まいったなあ…。メアリーに頼まれると嫌とは言えないな。」

「じゃあ、だんなさま…。」

メアリーが期待に満ちた顔でレオンに話しかけます。

「うん。そういうわけだから、陛下よりじくお願ひしますね。レオンが事もなげにアレクセイに頼みます。」

「「えー」」

その場にいたレオン以外の全員が見事にハモりました。

「おい、レオンー違ひだろ？おまえが頼まれたんじやないか！？」
アレクセイがレオンにツッコみます。

レオンが頭をかきながら、

「いやー、よく考えたらさあ…。ナターリアさまが離宮に行かれたから、うちの別荘にいる義父君たちに使いを出したり、召し使いの手配や何やうとすることが多いから、ね。だから、陛下よりじくお願ひします。」

「確かに、それはそうだな…。」

アレクセイは何か腑に落ちないようでしたが、自分が行かなければいけないような気がしてきました。

「そうでしょう？夫が妻の幸せのために働くのは当然のことですよ。それに、ナターリアさまの妹に嫌われたくないでしょ？」

レオンがニヤリと笑つてアレクセイに尋ねます。

「う、ここは…。

「分かったよ。夫は妻の幸せのために働くよ。女官長、行くぞ。」
アレクセイはすっかりお手上げとばかりに、席をたちあがりました。

「よろしくお願ひします、陛下。」

ペコと頭を下げて、メアリーが頼みます。

「分かった。」

アレクセイはこつこつ微笑んで出て行きました。

バタン。

同じ姉妹でも違うのだな…。

ナターリアはあまえることなどなかつたが。

しかし、頑張つてなんとか状況を変えねば…。
ナターリアのために！

アポもなく王太后の居室に向かうアレクセイでしたが、そこにはある人物が王太后に驚く報告をしておりました。

レオノの帰郷（前書き）

すみません。王太后の登場はありません。次回はきっと…。

レオンの帰郷

「… だんなさま、陛下にお願いしてようしかったのですか?」
メアリーが心配せずにレオンに尋ねます。

「… ここんだよ。あのくらこしないとね、義姉君もこいに戻つてきてもつらいだけだからね。」

レオンはそう言つとメアリーにいたずらっぽくウインクしました。

「ま、確かにそつですけど…。」

メアリーも同意するよつに答えます。

「… そつだろ? それより、もう今日はもつ邸に帰らないといろいろ手配しないといけないし…。ねえ、もう帰つていいんでしょう?」

側に控えていた侍従にレオンが尋ねます。

「… はい。大臣さまとの謁見が終了後、公爵さま方にはお帰りいただくよつに陛下から申しつかつております。お帰りでございましたら、馬車を…用意いたしますので少しお待ち願えますでしょ? うか?」
侍従が少し緊張気味に答えます。

「… いや、馬車はよい。待たせておるゆえな…。」
オルテイス公爵が口をはさみました。

「… オルテイス公爵、馬車を用意してくれるのになぜですか?」

レオンが怪訝そうに尋ねます。

オルティス公爵は苦笑しながら、

「ロブーヒナ公爵、側妃の『実家なのですからあまり目立つ行動は差し控えられた方がよろしいと思つたままでのこと。王太后さまも側妃のころはそのようになされていたはずでは?』

「あ、そう言えばそうでした…。」

うつかりしていたようにレオンが答えます。

「それに、大臣さまはきっと王宮で用意した馬車でこれみよがしに帰られたでしょ? 王妃候補と田される側妃の父を誇示するようですね。そうでしょう、侍従?」

ニヤリとするようにオルティス公爵は侍従に尋ねます。

「あ、はい。誇示なされたかどうかは分かりませんが、確かに王宮で用意した馬車で帰られたと聞いております。」

「ありがとうございます、侍従。ほら、『じらん。ロブーヒナ公爵、思った通りだ。だから我々は自分の馬車で帰るう。』

ポンとレオンの肩を叩いて、オルティス公爵は帰りを促します。

「しかし、それでは大臣さまに負けたことになりますんか?」レオンは抵抗するようにオルティス公爵に訴えます。

「分かつてないですね、ロプーヒナ公爵いやレオンどのは…。皆、ナターリアさまに無理じいをした大臣さまの姿をタバ見ていくでしょう？」

クスクスと笑いながら、オルティス公爵が言います。

レオンはなんだか馬鹿にされたような気がして、ムツとして、「それと馬車と何の関係があると言うのですか、オルティス公爵？」

「おおありですよ。つまり、大臣さまは自分で手を下してないとはいえ、第一王子の母であるナターリアさまに失礼を働いた。その後、ナターリアさまが倒れられた。疑いをかけられたもの、ナターリアさまがご懐妊と判明したため、疑いは晴れ国王陛下の謝罪を受けて、王宮の馬車で意気揚々と帰られた。そして、ナターリアさまは離宮に行かれた。一方、ご実家のロプーヒナ公爵夫妻はご自分の馬車で帰られた。これを皆は、果してどう思いますかな？」
ニヤリと笑つてオルティス公爵はレオンに尋ねます。

「あ…！つまり、義姉君に同情が集まり、大臣さまに批難が集中すると言うわけですね。オルティス公爵は人望のある方と伺つておりましたが、なかなか意地の悪い方ですね。」

レオンは嬉しげにオルティス公爵に答えます。

「それは褒めていただいているのか、それともけなされているのでしょうか、レオンどのは？」

苦笑いしながらオルティス公爵が尋ねます。

「もちろん褒めております。けなすなどととんでもない。さすがはオルティス公爵でいらっしゃると…。」

「これは恐れ入ります。さあ、参りましょうか？まあ、明日になれば、もしかすると大臣さまがナターリアさまを追い出したと噂になつておれば上々ですがな。」

フツと意地悪そうにオルティス公爵が言います。

「オルティス公爵もお人が悪い。まあ、大臣さまには自業自得と言つところですが。」

レオンもフツと意地悪そうに微笑みました。

「やういつといふですかな。ナターリアさまが王宮を出られた真相はどうあれ、皆はきっと大臣さまが圧力をかけて追い出したと見るでしょうからな。では、帰りましょう。侍従、陛下によろしく伝えてくれるか？」

「ははっ。承りました。確かに陛下にお伝え申し上げます。」

侍従は平伏して答えます。

側で聞いていたメアリーが少し怯えた表情で話しかけていました。

その様子を見たオルティス公爵夫人が気遣つて、
「どうしました、ロブーヒナ公爵夫人？」

「いえ、あの…。」

メアリーは何と答えていいか分からず戸惑いがちに返事をします。

オルティス公爵夫人はニッコリと微笑んで、
「びっくりなさつたのでしょうか？でも、政治とはそういうものですね。心配なさらないで、私たちがついております。」

「あ、ありがとうございます。オルティス公爵夫人にそういう言つていただけだと心強いですわ。」
メアリーは少しばにかんで答えます。

「まあ、可愛らしい」と。結婚前でしたら、私たちの嫁に欲しいところですわ。」

オルティスはニコニコと言います。

「だめですよ、オルティス公爵夫人。メアリーは僕の大事な奥さんですからね。」

レオンは嫉妬したのか、メアリーを抱き寄せます。

「だ、だんなさまっ！人前ですから…。」
メアリーが恥ずかしそうに抵抗します。

「おやおや、仲のよろしこ」と。レオンビの、妻はあまりに公爵夫人が可愛らしきのでつゝ言葉にしただけのじ。他意はないのだ、許してくれ。」

オルティス公爵が夫人に代わって謝罪します。

「分かつておりますよ。しかし、つい心配になりましたね。」
レオンはそう言つと、メアリーが愛しくてならないような表情で見
つめます。

「これはすっかりあてられてしまいましたな。後は邸でゆっくりな
さいませ。では、我々はこちらで……。」

オルティス公爵はそう言つと夫人と共に邸に帰りました。

レオンたちも自分の馬車で大臣とは違つてひつそりと帰りました。

「このじが良かつたのか大臣に関する噂が貴族たちの間で飛び交つ
ようになりました。

夜会ではシャルロッテが王妃目前と言われていたと言つた……。

レオンの帰宅（後書き）

お気に入り登録いただいた方、お読みいただいた方、ありがとうございます。

王太后のショック（前書き）

急展開です。

王太后のショック

さて、ここは王太后の居室です。夜会の翌朝、王太后は信じられない報告を受けておりました。

「な、なんといふこと…！」

あまりのことに王太后は絶句していました。

「お兄さま、それは事実なのですか？」

震える声で王太后は尋ねます。

「残念ながら事実でござります、王太后さま。」

宰相は苦々しい表情で答えます。

王太后は何を思つたのか、大臣のことを調べるようじと兄の宰相に依頼しました。

その報告の結果があの夜会の翌日によつやく聞きました。

その結果は思ひもよらぬことでした。

大臣は王太后の信頼をいいことに、王宮に納めるべき収入を自分のものとしていたのでした。そのうえ…。

「それに、大臣はフレデリカ男爵の子息を罪に陥れているとの報告もござります。」

吐き捨てるように宰相が言います。

「」のうえ、まだ…！それにしても、フレデリカ男爵とは、どこかで聞いたような気がしますが…？」

五太后は唇を噛み締めて、宰相に尋ねます。

「王太后さま、覚えておいでになりますでしょうか？テオドラ王女さまのお付きとして隣国に参ったカールとか申す者の実家ですよ。」

「ああ…、あの者ですか。しかし、なぜたかが男爵家の者を陥れる必要が…？」

「それは、もう少し調べてみませんと分かりかねますな。」

「そうですか。あ、まさか！」

王太后は何か思い出したように言います。

「何か思いあたることでもおありますか?」

「お兄さまも」存じでしょう? 大臣にカールとか申す者をテオドラ

のお付きに手配を頼んだことがありましたでしょう。嫌がる者が多い役目ゆえ、どんな方法でと聞いたのです。そのとき大臣は知らぬ方が良いと申したのです。まさか、お兄さま、これは……！」
王太后は震える手でドレスを掴みながら言います。

「はあ……。もう少し調べてみないと何とも言えませんが、まさかや
も知れませんな……。」

苦悶に満ちた表情で宰相が答えます。

「そうですか……。」

そうつぶやくと、王太后が困り果てたような顔をして椅子にもたれ
かかりました。

「それにしても王太后いやエリザベス、なぜ大臣を調べようと思つ
たのです？あれほど信頼していたのに……。」

宰相が臣下の顔で妹の王太后で接していましたが、ふつと、妹に対
する態度に変わりました。

「お兄さま。その名前を呼ばれるのは久しぶりですね。陛下が崩御
されて以来かしら……。」

ふつと、懐かしそうに王太后がつぶやきました。

「……エリザベス、いまは思い出に浸つてているときではないのだが？
宰相が冷静に王太后に言います。

「お兄さま、分かつてありますわ。でも、あのころのよう」「生き陛下が生きていらしていたらこんなことは……。」

王太后いやエリザベスは夫が亡くなつて以来、気を張り詰めて生きてきたのに、その結果がこれではなんだか情けなくなりました。

私の見る目がなかつたのか。

アレクセイの即位に力を貸してくれたハリス伯爵に続いて、大臣も……。

出来るだけの待遇をしたのに、なんといふこと……。

あまりのことに王太后は泣き崩れてしましました。

「エリザベス……。気持ちは分かるがしつかりしなさい。亡き陛下と約束したのだろう? 陛下とテオドラ王女さまをしつかりと支えると……。」

宰相が泣き崩れた王太后を慰めるように話しかけます。

「そうでしたわね、お兄さま……。」

王太后はそう言いながらも、涙がなかなか止まりませんでした。

どれくらいいたつたのでしょうか。

王太后がやがて肩を震わせて、クスクスと笑いながら、

「…お兄さま、私、本当に人を見る目がありませんでした。アレクセイの方があつたみたいですね。」

宰相は妹がおかしくなつてしまつたのかと、

「エリザベス、どうしたのだ？」

怖れおののきながら尋ねました。

「どうもしておつませんわ、お兄さま。これを見覽になつて下さいませ。」

ハンカチで涙を拭いて、王太后はそばにある引き出しの中から大切

そうに一通の手紙を出しました。

「それは…？」

「前口ブーヒナ公爵からの手紙ですわ。」

複雑そうな表情で王太后が宰相の前に差し出しました。

「私が読んでもよろしいのですか？」

「ええ、お兄さまなら構いませんわ。読んで下さいませ。」

「では、失礼いたします。」

宰相はそう言つと、手紙を開いて読みはじめました。

手紙を読んだ宰相は顔を上げて、驚きを隠しきれない表情で、

「前口プローヒナ公爵は気づいていたと言つことですか？」

「…それは分かりませんが、危険だと思つてたのでしょう。私が選んだ妃たちは、王妃に不適格で、アレクセイが選んだ妃は王妃に相応しいと言つことでしょうか。王子も生んでくれましたし。」

複雑そうな表情で王太后が答えます。

「そのようですね。それにしても、この報告がもう少し早ければ…。」

「宰相が悔しそうに歯ぎしりしながら言つています。

「確かに、でもあの時はああするしかなかつたし…まさか大臣がこんなことをするなんて思いもしなかつたし、隣国の王族と婚約者が大臣の娘なんて…！」

王太后が頭を搔きむしるように後悔に身をよじりました。

「それは本当にことなのでですか……？」

「誰ですか！誰も通してはならないと申したはずですよ！」
苛々が募る王太后が頭を上げるとそこには、アレクセイでした。

王太后はあまりのことに絶句してしまいました。

「ぐ、陛下……」

アレクセイの後ろから侍女が申し訳なさそうに、
「も、申し訳ございません、王太后さま。お止め申し上げたのです
が……」

泣きそうな顔で怖ず怖ずと言いました。

力がすっかり抜けてしまい放心状態の王太后に代わって、側にいた宰相が、

「侍女どの、陛下では致し方ないでしょう。せあ、王太后さまには
私から執り成すゆえ、下がつてよい。また、このことは外には漏ら
さぬよ。万が一漏れた場合は、そなたを始め家族も含め無事で
はすまぬと心得よ。それと、引き続き誰も近づけないようによろ
しく頼みますぞ。」

侍女はそれを聞いて震え上がり、「は、はい…！誰にも申しません。」

「よのしこ。ではもう下がりなさい。」

宰相は威圧するように一睨みすると、侍女を下がらせました。

「はっ、はー。失礼いたします。」

「母君、ジツコウ」となのですか…！」

アレクセイが驚きと怒りに満ちた表情で言います。

「陛下、落ち着いて下さー。まずはお座りを…。」

宰相は動搖しながらもアレクセイに席を勧めました。

アレクセイはジロリと宰相を睨みながら、ドサッと乱暴に席に座りました。

「叔父君も知っていたのですか、大臣のこと…？」

アレクセイの乱入（前書き）

お待たせしました。
すみません、あまり進んできません。

アレクセイの乱入

宰相も席に座り、ため息をついてから話し始めました。

「陛下、何と申してよいやら分かりかねますが…。このたびのこと
は、私が知ったのはつい先程に『』ぞいります。」

「それはどういう…？」

アレクセイは疑わしそうに尋ねます。

「宰相の言つていることは本当のことですよ、陛下！」
気持ちが少し落ち着いた王太后が悲痛な声で言います。

「母君まで私を『』まかすおつもりですか？」

「そんなつもりは…。お兄さま、あの。」

王太后はめずらしく弱気な有様で宰相に助けを求める

太后を安心させるように話します。

「陛下、実は王太后さまに頼まれて大臣のことを調査したのですが
その報告が上がってきたのがつい先程のことなのです。」宰相が王

「そ、そうなのですか、母君？」

アレクセイが面食らつたように尋ねます。

「え、ええ…。実は前ロブーヒナ公爵から手紙をもらつて、大臣のことを調べてもらつたのです。」

「前公爵が…。しかし、なぜ…？」

「それは分かりかねますが、結果として大臣に不審な点が見つかりました。ゆえにシャルロッテさまを王妃にするわけには参りません。」

宰相が力なく答えます。

「勝手なことを…！母君も叔父君もあれほどシャルロッテどのを王妃に望まれていたではありませんか。」

アレクセイが呆れたように答えます。

「それはこの事実を知らない時にござります、陛下。罪を犯した身内のいる者を王妃にしては国の威信に関わります。陛下にもお分かりのはずにございましょう。」

苦々しい表情で宰相が答えます。

「そ、そのようなことを申しているのではない…この事態をいかがなされるおつもりか！？大臣の息女が隣国の王族を婿養子に迎える手筈を整えたのは母君にございましょう？」

アレクセイはイライラして、怒鳴り散らします。

「そ、それは…。私も困っているのです。ああ、あの手紙が届いた時に調べていれば…。」

そう言つと王太后は泣き崩れてしまいました。

アレクセイはこんな母の姿を見たのは、父が亡くなつた時以来でしたのですつかり動搖してしまいました。

「母君、僕は責めているわけでは…。」

「陛下、私が悪いのですわ…。前ローピーハナ公爵まで娘を王妃にしたくてこんなありもしないことを書いて寄越したと、思い込んでしまつて…。あの方がそんなことをするはずがないのに。」
王太后はぐずぐずと涙を瞬りながら言います。

「母君、これを…。」

アレクセイはそう言つとポケットからハンカチを差し出します。

「ありがとう、アレクセイ。母はただあなたのためを思つて…。」

王太后はハンカチを受け取つて涙をふきました。

「母君、やつ思われていたのになぜお調べにならひつと……？」
アレクセイはふと、疑問に思つて尋ねます。

「私にも分かりません。ただ、ナターリアどのを見ていると何か違うような気がしてきて、お兄さまに頼んだのです。」

「その結果が分かったのが、少し遅すぎたよつで……。しかし、もつ少し調査を行う必要があります。」

「宰相いや叔父君、何をのんきなことを……。すぐに大臣を拘束して、調べればすむ話しどうし！」

「陛下、それはなりません。ハリス伯爵の時とは違い、大臣の息女が隣国の王族との婿養子に内定しているのです。ことは慎重に運びませんと……。」

「それはどうかも知れないが、何を調べる必要があるとおいつのです、叔父君？」

「フレデリカ男爵の子息の件です、陛下。」

「フレデリカ男爵の？その者がどうしたと……。」

「恐れながら陛下、大臣がその者を罪に陥れたやも知れぬのです。この件について、詳しく述べて調査をしなければなりません。」

「それは分かるが、なぜそれにこだわる？」

それを聞いた宰相は王太后と顔を見合わせました。

「陛下、ご存じないのですか？ 罪に陥れたフレデリカ男爵の子息の兄は、テオドラ王女さまの側近として隣国に行つたカールですよ。」

「カール…？ それはどういふことだ。」

「まだ何とも言えませんが、王太后さまが王女さまの側近に望まれて、その手配を大臣に頼まれました。そのことに関係していると思われます。早急に調べさせますので、しばしお時間をいただきたく存じます。」

王太后は申し訳なさそうな顔をして、

「『めんなさい、アレクセイ。こんなことになるなんて思わなくて…。』

アレクセイはため息をついて、

「まさか母君は何かテオドラのためだけでなく、他に理由があつて？ ナターリアに関するのですね。」

王太后は、うつとつまりながら、
「あの、アレクセイ、誤解しないでね。最初はナターリアさんに頼
んだのよ。でも、断れたから大臣に頼んだのよ。」

「ナターリアに？ それはなぜですか？」

「幼なじみと聞いているし、それにナターリアは王妃になりたくない
いようでしたから条件を出したのよ。その代わりに王妃にしないよ
うにして上げるからと黙って。でも、ナターリアさんは断つてきた
…。」

「そ、そうですか…。」

アレクセイは複雑そうな表情で答えます。

ナターリアは王妃になりたくなかつた…。
しかし、断つたと言うことは受け入れたのか…。

わからない。

カールはただの幼なじみではないのか。

王女の側近として、隣国に行かせないために王妃に…。

思いつめた表情をしてくるアレクセイと、ふと気がついたよつて壁相が話しかけます。

「ついで壁にまなづいておこでになつたので、なぜこまゆ？」

アレクセイはあつと、思に出したよつて、

「ああ、そうでした。昨夜の夜会のことは、存じですね。」

「はい、確かにナターリアさまが倒れられたと聞いておりますが。その後、いかがでござりますか？」

「そのナターリアのことです。実は懷妊しておりまして、静養のため王宮を出ました。」

「何ですってー。王宮を出たと…? 私は何も聞いておりませんよ。」

王太后は驚いて叫びました。

「急なことでしたから。ナターリアが望んだことです。表向きは離宮に行つたことになつてますが、近くにあるナターリアの実家の別荘に行かせました。」

「な、なんごとを…」のよつた事態になつて、前公爵がナターリアのを返さないと叫ぶたらどうもつです。」

王太后が悲痛な様子で言います。

「や、そんなことは…。ただ、父君に逢いたいだけですよ。アルバートもいるし、そんなことにはなりませんよ。」

言いながらアレクセイはなんだか不安になりました。

もしかして、帰つてこないのだろうか…。
アルバートも一緒にだし。

しかし、母君も誰のせいだ王宮を出たと思つてゐるんだ…。

「呑氣なことを…。早く使いを出しなさい。すぐ」王宮に戻つて来るよつこと。」

「何を呑氣でいるんですか。だいたい、母君も原因の一つでしきう。それにこの問題が解決しない限り、戻りたくないはずですよ。それに、お腹の子に何かあつたらどうされるつもりですか？」

「や、それは、さうかも知れないけど…。」

痛いところをつかれて王太后は黙りこくつてしましました。

「まあ、陛下。そのくらいで。この件については、早急に調べますのでそれまで内密に願います。今後のことはその後に話し合いましょ。」

宰相が怖ず怖ずと墨案します。

「仕方ないですね。でもそのようないふり。」
アレクセイはしづしふしふと部屋を出て行きました。

アレクセイの乱入（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます。

終わりにクライマックスに近づいてきました。

シャルロッテの心境（前書き）

続いての更新です。
すっかり立場の変わった一人の様子を“下を”い。

シャルロッテの心境

パタン…。

「陛下…。」「

王太后の面倒を出ると女官長が心配そうに待っていました。

「女官長か…。待たせたな。すぐ謁見の間に戻るぞ。」

アレクセイはそう言つと、歩き始めました。

「お待ち下さいます、陛下。先程、公爵方はお帰りになられたとのことでござります。」

女官長がそう言つながら、慌てて後を追います。

「何、すでにか？馬車はどうしたの？」

「それが皆様方ははじ自分の馬車でお帰りになられたことでござります。侍従よつて陛下にくれぐれもよろしくお伝えすることの伝言を承つております。」

「さうか、レオンが相手では侍従も帰すしかないだろうな。それにしても、王宮の馬車で帰ればよいものを…。」

苦笑いしながらアレクセイが答えます。

「さあ、それは分かりかねます。おそらくはオルティス公爵さまの
お考えかと存じます。思慮深い方であられますから。」
にこやかに女官長が答えます。

「そりだな……。それなら、執務室に行くか。侍従も待つてある
わ。」

「はい。それより陛下、王太后さまの『』様子はいかがでございまし
たか？」
心配そうに女官長が尋ねます。

「ああ、大変なことが分かつた……。執務室で話す。」

「は、はい。陛下。」

ナターリアが王宮を出て一ヶ月余り経ちました。

「ここ後宮は、今までとは考えられないくらい閑散としておりました。」

それと詠つのも三人いた側妃のうち、後宮に残っているのはシャルロッテただ一人。

そのシャルロッテに対しても、あの夜会の一件以来、ご機嫌伺いをする貴族たちもまばらになりました。

たくさんいる貴族の前で大臣がすすめたワインを飲んだときにナターリアが倒れたのです。

懷妊したためとは分かった後でも、疑いはぬぐいきれません。

それに何より、肝心の国王陛下が後宮を訪れないのです。

閑散とするのも無理はありません。

「シャルロッテさま、ご機嫌はいかがでござりますか。」大臣がいつものように娘のご機嫌伺いに尋ねてきました。

「機嫌がいいようにみえて、お父さま？」

シャルロッテが不機嫌そうに答えます。

「シャルロッテさま、いかがなされたのですか？ああ、もしや夜会でのことでしたらご心配は無用でござりますよ。父は何もしておりませんし、人の噂など無責任なものにすぐ消えましょう。」笑みを浮かべながら大臣が言います。

「ふふふ…。厚顔無知とはお父さまのことは。父親に従順だったシャルロッテにしては珍しく、大臣に嫌みを言います。

「これは本当にどうなされたのですか、シャルロッテさまへ。ナターリアさまもおいでになりませんし、陛下の『寵愛の邪魔するものは何もありません』でしょう。」

「お父さまは分からない方ですね…。陛下がこちらにおいでになつていたのは、すべてナターリアさまの為だったのですよ…。」

イライラとしてシャルロッテが叫びます。

「な、何を言われるのですか…！」

大臣は従順だった娘に叫ばれて動搖してしまいました。

「お父さまがナターリアさまを追い出したので『それこましょ、つづけ…』んな結果になつて満足ですか。」

涙目でシャルロッテは父を睨みつけます。

「も、もし…、陛下がおいでにならないのでしたら王太后さまにお頼みになられてはいかがで『それこますか？』よろしければ、この父が頼んで参りましょ、つ。」

「おやめ下さい、お父さま。王太后さまに頼んでもムダで『それこま

すよ。ナターリアさまのお立場を考えてこちらにおいてになつてい
た陛下ですもの、こちらにおいて下さるはずがありませんわ。これ
以上、私を惨めにしないで下さこませ…」

シャルロッテはそう言つと泣き崩れてしましました。

「シャルロッテさま、父が悪かつた。父を許してくれ。ただ、そな
たためを思つてしたことだ。」

大臣はさすがにかわいい娘に泣かれては致し方なく、謝罪します。

「私の為？お父さまの為でしょ？私はナターリアさまの為でも來
て下さるだけでよかつたのに…。いつか、私のことも見て下されば
と思つていたのに、お父さまのせいですわ！もひ、帰つて下さいま
せ。」

シャルロッテは感情的にそつまつと、大臣を部屋から無理に追い出
してしまいました。

娘であるシャルロッテの部屋から無理に追い出された大臣は訳が分
からず、すっかり戸惑つてしましました。

このまま帰るのもどうかと思い、王太后に面会を申し込みました。

以前とは状況が変わつてしまつた後宮のことを聞きたかったのです。

しかし、なぜか王太后の体調不良を理由に面会を許されませんでした。

今まで「こんな」とはなかつたが…。
はて？

どうしたことだ、いつたい…。

しかし、体調不良では仕方ないか…。

ならば見舞いに、いや王太后の不興を買つては元も子もないか。

あれほど王太后に近くしたのだ、裏切られることはあるまい。

お大事にと伝えて、大臣は後宮を後にしました。

王妃の父となるまであともう少し、まさかその夢がなくなるとはこの時の大臣は思いもしませんでした。

さて、そのころナターリアは王宮の混乱を知らず、実家の別荘で幸せに過ごしていました。

「ナターリアさま、王子さまがお呼びでござります。」

「まあ、アルバートが？どうしたと言つのです。」

ゆつたりと席に座つて編み物をしていたナターリアが侍女の呼びか

けに振り向きました。

「また、おむすかりの」様子にて、母君やまをお呼びの「」で
ざいます。」

少し困った顔をして答えます。

「まあ、こちらに来て、すっかりアルバートは甘えん坊になつてしまつたようね。行きましょうか、アリス？」

ナターリアはそう言つと、椅子から立ち上がりました。

「はい、ナターリアさま。」

にっこり笑つてアリスが答えます。

ナターリアがここ実家の別荘に来てから、王宮から追い出されたアリスが以前のよにナターリアに仕えておりました。

妹メアリーが姉ナターリアの為に別荘に行かせました。

ナターリアはここに来てから、両親に逢えたのもうれしかったのですがアリスに逢えたのが何よりもうれしかったのです。

びい～、びい～。

「ニヤニヤ…。」

アルバート王子はすっかり泣きじやくつ、乳母がすっかり困つ果てておりました。

別荘でのナターリアたち（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
感想で更新のリクエストをいただきましたので、頑張って更新しました。
わりと単純な作者です。

別荘でのナターリアたち

「いやいや……！」

不機嫌な様子でこの国の第一王子・アルバートが訴えます。

「どうしたのですか？」

ナターリアが穏やかに乳母に尋ねます。

「まあ、ナターリアさま。申し訳ございません。王子さまがひどくおむすかりでござることまして、お越しいただいた次第にござります。」
乳母が困り果てた様子で答えます。

「まあ、アルバート。どうしたとおっしゃります？」

ナターリアは部屋に入り、不機嫌なアルバートを抱き上げました。

抱きしめられて安心したのか、アルバートは機嫌が良くなりました。
「ふう。おかあたま、ここで遊ぶの、やあ。お外行きたい。」

「お外に行きたいの？でも、今日はもう遅いから明日になさい、ね
？」

ナターリアが優しく諭します。

「いやあ。いますぐ、行きたい！」

アルバートはなおもあまえるように訴えます。

ナターリアは少し困った顔をして、

「アルバート、よくお聞きなさい。そなたはこの国の王子なのよ。外に行くとなると護衛が必要だから、急には出られたいの。分かるわね？その代わり、明日はお母さまも一緒に行つてあげるわ。」

「本当？やつた？！じゃあ、やくわく。」

アルバートがうれしそうに答えます。

「分かったわ、約束ね。じゃあ、今日は乳母と仲良くな。」ナターリアはそう言ってアルバートをまた抱きしめて、約束をしました。

その様子を見てホッと安心した乳母が、

「ありがとうございます、ナターリアさま。」

そう言って礼をします。

「いいのよ。じゃあ、後をお願いね。それから、明日、アルバートと出かけますからそのつもりで。」

ナターリアはそう言つとアルバートを乳母に預けました。

「戻りました、ナターリアさま。」

「それからアリス、離宮に使いを出してちゅうだい。明日、王子と出かけますから護衛をお願いしますとね。」

「承りました、ナターリアさま。それから明日、オルティス公爵夫人がお越しになりますので離宮において願いたいと離宮より使いが参つております。」

「オルティス公爵夫人が？仕方ないわね。分かったと伝えてちょうだい。」

複雑そうな表情でナターリアが答えます。

「承りました。ではそのようにお伝えいたします。」

アリスはそう言って、ナターリアとともに王子の部屋を出ました。

「ところでアリス、王宮ではアルバートと接する機会があまりなかつたけれど、あのように甘えん坊だつたかしら？」

心配そうにナターリアがアリスに尋ねます。

「それは、きっと母君さまにあまえておいでなのですわ。王宮とこちらとは境遇も違いますし、父君さまにお逢いになることも出来ないわけですから。」

なんともいえない表情でアリスが答えます。

「やつ、ですね…。私のわがままでもいらっしゃりて来てしましたからね。」

ナターリアが少し考へ込むよつた表情で答へます。

「ナターリアさま、お気になさこませんよつて…。いひにいぢやうこましたから、陛下もじゅうじにじう静養なされることをお許し下へこましたのでしきう?」

ナターリアを氣遣つよつてアリスが言います。

「それはそつだけれど、アルバートのためにほんと良くなかったかしら?」

「それは句とも申せませんが、王太子さまことつまとして母相さまとこんなに仲良く過ごせる機会は貴重かと存じます。王宮ではつらうしがらみがござこまし。ナターリアさま、この機会を楽ししまれてはよひしいのではございませんか?」

「やつね、アリスの言つとおりかも知れないわね。こんなに穢やかに過ごせる日が来るなんて思いもしなかつたわ…。」

ナターリアはそう言つて微笑みます。

「王宮では苦労されましたから…。」

アリスがしんみりと答えます。

「やうね…。」

ナターリアは少し悲しそうに呟いて、やきました。

「あの、ナターリアさま…。もしもですが、このひどいとの廻りにことなことを考えてみては…？」

アリスが少し思つたまゝに嘘をつきます。

たすがにナターリアは驚いて、

「な、何を言つてそんなこと、出来るわけがないじゃない。」

「やうでしょうか？でも、また王宮に戻りましたら、華やかではあります幸せな日々を送ること出来ませんわ…。」

448

「や、それはそつかもしれないけど、王子の将来のことも考えなくては…。ここにこては忘れ去られてしまつかも知れないわ。この子も…。」

そつとナターリアはお腹をさすつました。

「やうでしたわ。申し訳ござません、ナターリアさま。私つたら、なんてことを…。」

アリスはやうとナターリアに謝罪するように深々とお辞儀をしました。

「ここによ、氣にしないで。私もやう出来たらと、思つてもある

のだから…。」

ナターリアはやけに言つて、寂しそうに笑いました。

「ナターリアさま…。」

そして、翌日になり離宮から迎えの馬車がやつてきました。

「では、お父さま、お母さま、行つてまいります。」
ナターリアはアルバートを連れて、微笑んで挨拶をしました。

「行つてらつしゃいます、ナターリアさま、王子さま。」

母エレナは、公爵夫人の重荷が取れたのか、肩の力が抜けてさらさら
優しい微笑みで言います。

「王女さまは」機嫌でいらっしゃいますな、ナターリアさま？母
君さまとお出かけなされるのがうれしいと見えます。」

父の前ロブー ヒナ公爵もこちらで来てからすっかり健康を取り戻し、
ここやかに送り出すよつて言つます。

「そのよつで、じぞこますわ。アルバート、お祖父さまとお祖母さま
にじい挨拶なさいませ。」

「おじじたま、おばばたま、バイバイ。」
にこ～と笑つてアルバートが手を振ります。

「行つてらつしゃいませ、王子さま。」

前ロプー・ヒナ公爵夫妻は孫の成長に田を細めて、王族に対する礼儀
を忘れずに微笑んで送り出しました。

「行つてしましましたわね、だんなさま。」

エレナがロプー・ヒナ公爵に向かつて寂しそうに話しかけます。

「そつだな。しかし、ナターリアさまはこ～ちらに来たこ～なりすつ
かりお元気になられて…。そろそろ潮時かもしれぬな。」

「だんなさま、まさかナターリアさまを王宮にお返しになられるお
つもりでじぞいますか？」

少し憤慨したようにエレナが前ロプー・ヒナ公爵に尋ねます。

「いや、それはナターリアさまがお決めにならることだ。どのよ
うにされるか、以前と比べて王宮も状況も変わってきたようだし…。

「ロブー、ヒナ公爵は意味深な言葉を投げかけます。

「だんなさま、それはどういふ意味でござりますか？」

「ま、エレナもそのうち分かることだ。」

「セヨウドヤガコマズカ。いい傾向ならよろしいのですが……」

エレナは不安そうな表情で娘や孫のことを思い、胸を痛めます。

「心配はこりない、エレナ。いい方向に向かっているはずだ。しかし、どうされるかはナターリアさまがお決めになられること。私は見守つて行こう。」

前ロブー、ヒナ公爵は優しく笑ってエレナを抱き寄せます。

「はー……。」

別荘でのナターリアたち（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございます。
もひらしをお付けいただければうれしいです。

オルテイスク公爵夫人との再会？（前書き）

アレクセイは出てきません。

オルテイスク爵夫人との再会？

ガタン…。

「側妃さま、王子さま、離宮に到着いたしました。お足元にお気をつけてお降り下さじませ。」

迎えに来た従者がそつまつと、馬車のドアを開けました。

「ありがとうございます。」

ゆつたりとナターリアが答えるとアルバートと共に馬車を降りました。

「お帰りなさいませ、ナターリアさま、王子さま。」

迎えに出たのはアンナと何人もの侍女たちや従者たちでした。

「元気そうね、アンナ。」

ナターリアがアルバートの手を引いて微笑んで言います。

「ナターリアさまも王子さまもお健やかにあられてよしよしわざいました。」

安心したようにアンナが答えます。

ナターリアは表向きはここ離宮で静養していることになつていて、アンナを始め何人の侍女や従者たちが離宮に常勤しておりま

した。

王宮や貴族たちが、機嫌伺いに離宮に来たときのみナターリアは実家の別荘からこじらに戻る生活を送っているのでした。

離宮に常勤している者たちは詳しい事情は聞かされてはいませんでした。この國の第一王子とその生母である側妃でしたのでこれ以上ないほど仕えておりました。

たまに来るだけでしたし、何よりもこのかの妃と違つて偉ぶらず控えめなナターリアでしたから。

「ナターリアさま、王子さま、お体が触ります。お早く中へお入り下さいませ。」

マリアが気遣うように声をかけます。

「そうですね。じゃあアルバート、行きましょうか？」

ナターリアがアルバートに優しく微笑みます。

「うん。」

アルバートもうれしそうに答えます。

二人は仲良く離宮に入り、部屋に落ち着きます。

部屋は主である国王または王妃の部屋ではなく一段下がった部屋です。

アレクセイはせめて王妃の部屋とまで行かなくても王族専用の部屋をと望んだようでしたが、ナターリアは身分に相応しい部屋をと、用意させました。

部屋に着いて、アルバートと一緒に出されたお菓子を食べてあと、ナターリアはアリスに尋ねます。

「アリス、オルティス公爵夫人はいつごろになりそうですか？」

「もうまもなくお越しかと存じます。お越しになられたら密間にご案内申し上げます。」

アンナが微笑んで答えます。

「そうですか。お帰りになられたら、アルバートと散歩に出かけますから支度をお願いね。」

ナターリアがアルバートを抱き寄せて、アリスに言います。

アルバートが期待に満ちた顔で母の顔を見ます。

「ま、王子をまとめてお出しますか？お散歩でございましたら、私もがお連れ申し上げますので、どうぞごゆっくりとお逢い下さいませ。」

アンナは第一王子とその生母が離宮の外での散歩と言つのは、何かあつてはと思い、提案します。

それを聞いたアルバートは、むつとした表情で母の服をつかみます。

「アンナ、私はアルバートと約束したの。だから、心配は分かるけどその支度をして下さい。いいわね？」

ナターリアにしてはめずらしくきつい口調でアンナに言います。

「も、申し訳ございません。大変失礼致しました。ナターリアさま、仰せのままにお手配申し上げます。」

アンナが驚いて、平謝りします。

「ありがとうございます。アンナ、無理を言つけど、かわいい王子のためだから許してね。」

ナターリアはそう言つとアルバートの方を向いて、にっこり笑いました。

コンコン…。

「失礼いたします。側妃さま、オルティス公爵夫人がお越しでござります。」

「そうですか。アルバート、母は少し席を外しますので、アンナとここで待つていてくれますか？」

ナターリアはアルバートに優しく言い聞かせます。

「えへ、アンナとお～！」

アルバートはやや恥ずの「」ともあり、アンナからふいと視線を外します。

「アルバート。アンナが嫌いなの？」

ナターリアはアルバートの顔を覗き込むようにして尋ねます。

「だつて、おたたさま。やつき…。」

アルバートがふうたれて答えます。

「やつやのことが気になるの？ダメよ、アルバート。アンナはね、私とアルバートの身を案じて言つただけたのよ。昨日も言つたでしょ？アルバートはこの国の王子なのだからね。さあ、アンナと仲良く過い」じてね。」

「う～ん、おたたさまが言つなら、ね。」

いまいち不満そうでしたが、アルバートが立ち上がり、トコトコとアンナのもとへ歩いて行きました。

「アルバートはいい子ね。お母さまはうれしいわ。用事がすんだらお散歩に行きましょうね。」

ナターリアは立ち上がりてアルバートに話しかけます。

「うんっ。いつてらっしゃい、おたたさま。」

アルバートは手を振つてナターリアを見送ります。

「じゃあ、アンナ。アルバートをよろしく。」

ナターリアは少し寂しそうに笑つて、侍女と共に密間に向かいました。

「失礼いたします。ナターリアさま、お越しでござります。」

席に座つていたオルティス公爵夫人が立ち上がりました。

「ナターリアさま、お久しぶりでござります。」

「オルティス公爵夫人、遠路はるばるお疲れでしょう。どうぞおかげになつて。」

ナターリアはにこやかに笑つて席に座ります。

「しばらく一人だけで話しますから。」

ナターリアが侍女にそつと告げると侍女は密間に出来ました。

「本当に久しぶりですね、オルティス公爵夫人。夜会でお逢いして以来かしら？」

侍女が去って、少し安心したように話しかけます。

「そのようでござります、ナターリアさま。遅ればせながら、ご懐妊のお喜び申し上げます。もう体調はよろしくんですか？」

オルティス公爵夫人が心配そうに尋ねます。

「ありがとうございます。夜会では倒れてしまつて心配をかけましたね。もう大丈夫なのでお気になさらず。」

ナターリアは言いづらそうに答えます。

「それはよろしくうござきました。王室さまもお健やかでいらっしゃりますか？」

安心したようにオルティス公爵夫人が尋ねます。

ナターリアは少し警戒するように、

「ええ…。元気にしております。」

「それは何よりです。あの、ナターリアさま…。警戒なさらないで下さいまし。私は心配いるだけですのよ。」

「いえ、そんな…。あの、オルティス公爵夫人お聞きしても言いかしら?なぜわざわざ離宮までおいでに?」

ナターリアが上目遣いに尋ねます。

するとオルテイス公爵夫人がハツとした表情をした後、「さきほど申し上げたとおり心配しているだけですわ。それからナターリアさまには、申し訳なく思つてあります。」

「それは、どういう…？」

ナターリアは怪訝そうに聞きます。

「私もだんなさまも中立派などと申して、第一王子の母であるナターリアさまがあのようなことになつているとは存じませぬとはいえ、申し訳ないことでございました。これからはナターリアさまのお力になりたいと思っております。」

オルテイス公爵夫人は申し訳なさそうにそう言つと頭を下げました。

ナターリアは夜会でのオルテイス公爵夫人の好意的な態度はうれしかつたのですが、半信半疑のようでいまいち信じられませんでした。

しかし、この様子では本当のことのようだわ…。

「オルテイス公爵夫人、お顔を上げて下さいませ。」

ナターリアはそう言つて、オルテイス公爵夫人の手をとります。

「ナターリアさま、お許し下さいますのか…？」

オルテイス公爵夫人は顔を少し上げて尋ねます。

「許すも何も、私はたかが側妃に過ぎません。」

「側妃と申しても第一王子の母君でござります。それなりのお扱いを受けられるべきでござります。そのために私どもが協力いたします。どうぞお心を強くお持ち下さいませ。」

オルテイス公爵夫人は真剣な表情で言います。

「私は、もう疲れたのです…。」

ナターリアはため息をついて、力無く答えます。

オルテイスク爵夫人との再会？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ナターリアはどうするのでしょうか…。

次回答が出るかも知れません。
たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728o/>

初恋をあきらめて

2011年10月19日19時45分発行